

---

# 龍と共に

リツ&ルア

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

龍と共に

### 【Nコード】

N5151V

### 【作者名】

リツ&ルア

### 【あらすじ】

風を操る魔術師、風霊使い  
水を操る魔術師、水霊使い  
炎を操る魔術師、火霊使い  
地を操る魔術師、地霊使い  
闇を操る魔術師、闇霊使い  
光を操る魔術師、光霊使い

彼女らと隠された霊使いが出会ってしまう

隠された霊使い、その名は……

## 第1話（前書き）

遊戯王GXの神の悪戯を書いていた者です。

（今は休憩していますが……）

その主人公が出てくるかもしれないので、

その小説を読めばこの小説の理解度が上がると思いますのでどろろが  
そちらも目を通してもらえれば幸いです。

前書きはこんなものにしておいて、ではどろろ！

## 第1話

視点 ？

「へえ、ここってデパートが多いわね

ウインの誘いで来たけど、結構面白いから来てよかったわ」

「でしょ、エリアがそう言ってくれてよかった

ヒータやアウスは？」

「横でダルクとライナがイチャイチャしててウザい!!」

「ふっ、僕がリア充っていて嫉妬しているのかな

これだから非リア充達は困るんだ」

「ダルクのいう通り、私たちが付き合った時からつらやましそうな  
目で見てるもんね

思い出した途端笑いが止まらないよ……プププ」

「こいつら果てしなくウゼエエ!!!!」

えーと、ゲームでよくあるナレーションをするね

まず私はウインだよ

で横に歩いているのがエリア

後ろで歩いているのがヒータとアウス

その横で人目を気にせずイチャイチャしているのがダルクとライナ  
ちなみに、ダルクとライナは兄妹だよ

今いるところは有名なデパート街、新しく作られた都市の中にある

んだよ

山があるところを切り開いて作っただけらしい  
近くに1つだけ山があるのだけど、それはその山の持ち主が山をわ  
たさなかつたからだっさ

結構大きい山、大きさでいうとこの新しい都市がまるまる1つ入る  
くらい大きいよ

この都市を地図で見たらだいぶ大きいから、もしわたしていればこ  
の倍の大きさになっていたのね

「お〜い、ワイン聞いているの？」

あれ、エリアが話しかけているどうしたのかな？

「ワイン、どうしたの？呼びかけ28回くらいしたのだけど……」

「どうしたも、こうしたも、ただナレーションしてただけだけど  
う？」

「……はあ、またわけわからない事していたのね……」

あれ？エリアにあきれたら？

「なんであきれているの？ というような目で見ているわね……」

そりゃ、何回もわけのわからない事を会い始めてから今までずっと  
されると流石にあきれるわよ」

「エリアいうだけ無駄だぜ

そんな天然なところがワインらしいからな

ワインから持ち味をとったら何もなくなって、ワインじゃなくなる  
ぜ！」

「ヒータ軽くウインを侮辱しています  
ウインは天然じゃないとダメだけど

まあ、天然じゃなくなつたウインも見てみたい事も一理ありますね」

「アウスも人の事いえねーじゃねーか!」

ヒータとアウスが言い合いになつちやつた  
エリアがまたあきれている

「はあ、ウイン天然もほどしておかないとひつたくりに合うか  
もしてないわよ」

「そんな事ないよ!」  
私こう見えてもちゃんとしてんだからね!」

「げへっげへっ少女がいるげへっげへっ  
このかばん貰うからなげへっげへっ」

変なおじさん……全身裸!?

……あつ、かばん盗られた……

「ほら、言わんこつちやない……」

「エリアが死亡フラグ立てるからだよ!」

「そ、そんな涙目で上目づかいしないで!」  
わ、分かつたわよ私も追いかけるわよ

ヒータやアウス達も行くわよ!」

ダルクもライナもイチャイチャしない!」

ヒータたちがしぶしぶついてくる  
私のかばんをとった人どこかな？

視点？

人ごみか……ウザい

近くにこんな都市作りやがって

「げへっげへっその奴のけ邪魔だ！げへっげへっ」

こんな変な奴がわいてくるから都市はいやなんだ

このムカつきこっちに近づいてきた変態あいつにぶつけるか……

まずは右足の膝ひざを腹にいれ

よろめいたところを左手の拳を顔面にいれる

その次に倒れたから右足がまだ地面についてないから変態の腹に落とす

そのまま足を上下に動かせばいいか

「おえっ、もうやめてくれ……」

この声ウザいな顔面けるか……

うん？手に持っているかばんなんだ？

拾うか……

届かん足を動かしながらじゃ無理があつたか

いったん止めかばんをとって……これ女物じゃね？

変態こいつこんな趣味があつたのか



「今のうちに逃げる」

「…させるか変態」

後ろからドロップキックつと

はぁ、そろそろこいつの相手するの面倒になってきたな  
とどめさすか

「…術式35番 武器召喚術・アームズ・ホール」

呪文を唱えると左手の近くに武器庫にへと繋がるワームホールがで  
きる

そこから…ランスでいいか

「…俺の目障りとなったことを後悔するんだな」

そのまま心臓へふりおとす…はずが

「あ、私のかばん」

拍子抜けた声によってやる気がなくなった

「…これの事か？」

興味ない、違うくても受け取っておけ」

そっつい投げつける

俺がどうかどうかと言われると面倒だ  
コレに乗って帰るか

コレとはスケボーだ  
ただのスケボーではないが……  
車以上の速さのスピードが出る  
圧縮空気で動くから、空気が無くならない限り必要資源は無限だ  
作ったのは俺だし、誰にも作り方を教えてないから世界に1つだけだ  
まあ自慢話はこのへんにしておくか

「あ、あの……」

なんか聞こえたような気がしたが無論無視

『…違うかばんだったか？

なら貰っておけ』

とでも答えるのも面倒、はあ、家に帰るか

その前に、家の近くで今日もまた、わいているゴミを掃除しないと

視点 ウィン

あ、行っちゃった

お礼も言えなかった……

「ウィン見つかった？って持っているじゃない

あそこに盗った人倒れているけどウィンが殺やつたの？」

「うん、親切な人が返してくれた

お礼を言いそこねっちゃった……」

「それだったらどこかまわろうぜ！！

ってそんな涙目&上目づかいでみるな！！破壊度たけーんだ！！

分かった分かった一緒に礼を言いに行くために探せばいいんだろ！  
！」

「エリアは？」

「はあ、分かったわよ

アウスとイチヤイチャしているその2人いくわよ  
それから涙目で上目づかいをやめなさい  
私がおかしくなるから……」

さてどこにいるのかな？

視点？

家がある山について、ゴミの数は  
はあ今日もまたウジャウジャとわいている  
まあ、日課となるほどやっているのだが……  
仕方ない今日も殺<sup>ち</sup>るか

「…ベビーもう出てきていいよ」

コートの中に隠していたベビードラゴン通称ベビーが出てきて僕の  
肩に乗る

「…数はザーツと数えて100を超えて200強か……  
いつもより少ないがだるい  
さっさと終わらせるとするか……」

手に持っていた杖の端……ドラゴンの頭の形をした物がついている  
その中に手を持つところがあるのでそこを右手で持つ  
そして、左手を真ん中らへんの場所ですかみ引っ張ると……  
左手には杖の一部だった物が鞘となり  
右手には刀になった杖がある

「…さて掃除の時間の始まりだ」

掃除相手？

それはわいてくる者

死者がこの世界にとどまるつとしてアンデットとなりこの世界にとどまる

それが掃除相手だ

何故この山にはアンデットが集まるんだ？

おかげで掃除が面倒だ

……

……

……

はあ、まだいるのかよ……

やっぱり刀1本じゃ時間がかかるか

もう1本ですか……

左手に魔力を一定以上ためる

そうすると腕に隠していた剣ツバキが出てくるようにしている

作者曰くイメージとしては、スクアー、ハンド・ソニック だと思  
つたらいいだとき

さて、2本となったからには早く終わらせるか……

……  
……  
……

これでいなくなったか……

はあ、まだいたし……

最後の1体を殺りにいくか

「くらえ!!」

視点 エリア

「あ、見つけたよ」

「あの人？はあ、こんな山の中でなにしているのか  
つてウイン!!勝手に山に入っていかない!!」

はあ、ウインてば飼い主を見つけた子犬みたいに駆けつけちゃって  
うん？この看板何だろう？



視点？

最後の1体を倒すとなんか6人くらいいるのだが……  
アンデットではなさそうだな  
じゃ、杖と剣を戻すか……

はあ、この山の結界で生き物は入れないようになっているはずなの  
だが

何故入ってこられる？

……はあ、こいつら魔力桁外れに高いな……  
だから結界を入れてこれたのか  
暇だし話くらいするか……

「き、来たぞ！！殺らなきゃ殺られる！！  
火霊術 - 火炎地獄」

…赤いのがなんか火の魔術を使ってきたし……  
なんだよ『殺らなきゃ殺られる！！』ってまあアンデットだったら  
殺していたが  
てかそんな場合じゃないな

「…山火事をおこすつもりなのかよ……  
水霊術 - 大寒波」

火炎地獄で出た火を大寒波でおさえる  
間一髪で間に合ったみたいだ

「…はあ、お前ら何のつもりだ」

「何のつもりってお礼を言いに来たんだよ」

緑のやつが話かけて来た

「お礼で山火事未遂か」

赤いやつはそっぽ向いている

「ヒータは私たちを守ろうとしたのだから仕方ない事だったのよ

まあ、ヒータが先走って攻撃したのだけど」

青いやつが弁解してきた

赤いやつはヒータというのか、ブラックリストに載せておこう最終的に青いやつヒータを売ったな

「はあ、止めたからいいが次したやつは覚悟しておけ」

脅しをかけておけば何とやら

これで大丈夫だろう

まあ、次されたら殺すしかないか

「で、その緑のやつお礼とはなんだ？

お礼をされるような事をした覚えはないが

てか、お前ら誰だ？俺に何のかわりがある？」

緑のやつはどこかで見たような気がするが気のせいだろうだが、他のやつらは知らない

「お礼って覚えてないの？」

私のかばんを変な人から取り返してくれたの



あ、それから私、緑のやつじゃない、ウィンだから覚えておいてね  
それから、かわりは「…もういい、俺のミスでこうなったのが分  
かった」「

はあ、あの時かばんをわたさずに捨てておけばよかったのか

「で、お前らこれからどうするんだ？」

「どうするって山を出ていくのだけど」

青いやつがとぼけたことをぬかした

「…それは無理だ、ここに結界を張ってあるからな

外から入ってこられるのは魔力が桁外れの者のみ

中から出られるのは俺とここにいるベビーや他のドラゴンのみ  
お前らに出られるという選択肢がない」

ベビーが肯定するように『がっ』とうなずいた

「……………な、なんだって!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「……………」

はあ、さっきから黙り込んでいたメガネやイチヤイチヤしていた2  
人まで一緒に叫ぶなよな  
耳が壊れる

「…と、言うわけだ、お前らはここでのたれ死ね  
俺は家に帰るから、じゃな」

「「鬼だ、鬼がいる!!!」」

何か青のやつとヒータが叫んでいるが  
無論無視して帰ろうとした時何かが手を引いた  
ウインが手を引いていたようだ

「私たちも連れて行ってよ」

そついい、涙目で上目づかいでみてきた……  
はあ、そんな顔されたら

「…ウザい、そんな顔するな、蹴り飛ばしたくなる」

「「本物の鬼がいる!!!こんな生かしておいたらダメだ!!!」」

「…はあ、うるさい」

分かった、分かった連れて行ってやるから少し黙れ、てかもつ話すな  
それからウイン、右腕に嬉しそうに笑いながら抱きつくな、重い、  
殴りとばすぞ」

「「絶対鬼だこいつ!!!」」

はあ、ウインは言ってもはなさないし  
青いやつとヒータはうるさいし  
黒いやつと白いやつはイチャイチャしているし  
メガネは黙っているからよしとしよう

「…今から行くから遅れるなよ  
遅れても無視して先に進むからな」

はあ、じゃからどうしてあんなか……

## 第1話（後書き）

この主人公、変人を殺そうとしていましたが、  
心臓をさす直前でやめていたので、ウインがいてもいなくても変人は生きています。まあ、死んだように気絶していますが……

霊術は魔法カードから採用します。

火炎地獄ならば、見た目が炎っぽいので火霊術、

アームズ・ホールのように見た目がどれに当てはまるかは分からないのは術式〱番  
とします。

作者が見た感じで決めるので皆さんが水霊術だと思っても作者が地霊術とするかもしれないのでご了承をおねがいします。

アンデット好きの方へ、ゴミと書いてごめんなさい。

主人公が名前出てきてなかった……

次くらいに出てくるかな？

では、感想お待ちしています。

## 第2話（前書き）

モンスターの各ステータスは全く関係ないものとして話を進めていきます。

この小説【視点】を入れたのはいいけど書きにくい……  
3人称でした方が良かったかな？

## 第2話

視点 エリア

話の流れであの子の家に行く事になったけど、

なんなのよあの子

ウインの涙目と上目づかいその上、右腕に抱きつかれているのに動じないなんて……

何者なの？もしかして同性愛者なのかしら？

だとしたら、ダルクが危ないわね

あ、ダルクを犠牲にしたら私たちは大丈夫だわ！

「…青いやつ、俺は同性愛者じゃないから安心しろ  
同性愛者はお前じゃないのか？ウインに対してだが

俺がウインに動じないのはこいつに全く興味ないからだ  
それからこいつ、いつの間にか寝ているのだが……」

「あ、あなたなんで心を読めるのよ！！  
それから私は同性愛者じゃないわよ！！  
それに私エリアだから次からちゃんと呼んでよね！！」

「…んな事どうでもいいからウインをどうすればいい？  
歩きにくいから捨てていききたいのだが」

ヤバい、目が本気だ……

「お前がおぶったらいいいじゃねーか」

「…はあ、ヒータか  
俺が何故こいつをおぶらないとならない  
こいつにそこまでする必要が無いと思うが？  
なんならお前がおぶればいい」

「おぶるくらいいいじゃねーか！！  
ウインがお前の事好きなんだからいいじゃねーかよ！！  
何？もしかしてか弱い女の子におぶらせるつもり？」

「…はあ、なつかれていると言え  
それからお前のどこが弱いんだ」

くすっ、そういいながら結局はおぶっているじゃない

「なあ、なあエリアこいつってもしかしてツンデ「ヒータ、みなま  
で言ったらダメだわ」だよな」

「くすくすくすくす」

「…後でお前ら来い  
この世から消してやるから」

や、やばいさつき以上の不機嫌顔になった……  
しかも目が怖い……  
絶対敵に回したくないわね

「悪かったって……もう言わないから許せよ……  
お前と俺の仲じゃねーか……」

あれ？ヒータともう仲良くなったのかしら？

「…ふっ、笑わせる

お前は俺のブラックリストに載っているのだが  
そんなやつを許すと思うか？」

「エリア、こいつ殺ろうぜ！！

こんなやつ生かしていたらゼーデーダメだ！！」

「…はあ、叫ぶなうるさい

まあ、聞かなかったことにしてやる」

やっぱりツンデ……今睨まれたから性格の事考えるの止めましよう  
それよりもなんで心を読めるのよあの子！！

あ、聞く事あったの忘れていた

「ねえ、さつきアンデットを剣でたおしていたけど

アンデットに物理技効くの？」

「…普通は効かないだろうな

あやつらは肉体が損傷してもすぐ回復するような奴らだ  
その回復スピードは、今お前が考えたスピードの倍以上だ  
だから切る事はできるかもしれないが、意味がないな」

「じゃ、あなたの持つ剣はどっちも普通じゃないの？」

見た目は普通なのにな

「…見た目だけは普通だ

だが、これらの剣に呪いの類の魔術をかけたから効く  
その魔術というのは、魂を直接冥界へと送る

アンデットは基本的にこの世にとどまろうとするために残った魂の



怨念

だから、跡形もなく消える

冥界へ行った魂はどうなったか知らないな

恐らく帝のヴァンダルギオンが働いてくれているだろう

文句を言われたら言い返せばいい

アンデットの事を後回しにしているあいつが悪いのだからな

「その魔術に効くのとてアンデットだけなの」

「……いいや、全ての魂があるものに効くな

お前らを切ってもなるが……そんな身構えなくていい

めんどくさいからな、アンデット以外はこれらの剣は振るわない」

へえ、変なところで……

そういえば私たちこの子の家に行くのだったわね

この子の家族迷惑なんかじゃないかしら

「話変わるけど、私たちってあなたの家に向かったいるのよね  
あなたの家族は迷惑なんかじゃないの？」

「……いや、俺の家族は弟のベビーしかいないからいい

家で泊める事はベビーも同意した事だからな

はあ、ちゃんとした結界をあの結果の外に張るべきだったな

あの結界の外し方分からないからほっとかなければこんな面倒な事はならなかったのだが……」

彼曰く弟のベビーが『がう』と肯定するようについた

「ベビーって弟だったの!？」

いや、そんな事よりもお父さんやお母さんは？」

「…はあ、親父やおふくろはとつくの昔に死んでいる  
だから、他に誰もいないから反対するやつはいない  
こんなどうでもいい話はもういいだろう」

「…どうでもいいって

「どうでもいいわけないでしょ！！！！  
あなた親をなんだと思っているの！！！！  
もういないのかもしれないけど、感謝をしなさいよね！！！！」

この子目を思いっきり見開いている  
何かその…意外な事を言われたような感じ？  
そんな意外だったかしら？

「…すまなかったが、お前がなんでそんな事言うんだ？  
俺の両親の事はお前には関係ないだろ？」

なんか、真面目な顔でそう謝れたら照れるわね

「べ、別にいいでしょ  
ただ単に考え方が間違っているから怒っただけなんだから」

「そりゃ、エリアが怒るに決まっているだろ  
エリアもお前みたいに両親がいねーからな  
同じ境遇の者としてさっきの発言は勘に触ったのだろうな  
俺もそんな境遇だったら怒っていたかもしれないよ」

「この話はもういいでしょ！！！！」

「あれね、エリアもこいつの事言えないのじゃねー？  
照れちゃってエリアもかわいいところあるじゃねーか！！」

な、ヒータ調子に乗って！！

「な、何なのよ全く！！

私がいつもかわいらしくないとでも言いたいの！！！」

もう！！ヒータのバカ！！

「あちゃー」

「ヒータ調子に乗りすぎましたね」

視点？

はあ、まさかあんなやつに説教されるとは思わなかったな  
そういえば、あいつなんで照れていたんだ？

照れる要素全くないと思うが……

まあいいか、中にはよくわからないところが変なやつもいるからな

「…エリア、行きすぎだ

家はここだ

別に入りたくないのだったらしいが」

「……あなた私をバカにしているの？

ここ何も無いじゃない！！！」

はあ、怒るのも無理はないか  
ここは回りに木がなくて森で恐らく他に1つあるかないかの何もな  
い場所だからな

「見た目だけで判断するな

俺だってアンデットがウジャウジャしているところで野宿などした  
くない

まあ、ここは結界を張ってあるからアンデットは入ってこれないが  
で、家は地下にある

今から開けるから待っておけ」

地面について手をつくそして魔力を流す……開いたな

「入口がスロープになっているから転ぶなよ  
転んでも俺はなにも責任をとらないからな」

はあ、家についてもウィンは起きないし……

ん？どうなっているかって？

下に簡易に図を書くからそれでイメージしてくれ（パソコンで見  
ないと分からないかもな）

地上

地上へとつながる扉（一定以上の魔力であく）

??????

— スロープ — リビング — 武器庫とスケボー置き場

— 地下1階

— — —

— 地下2階

??

20階

??

—

— 地下21階

— 色々ある

— 地下22階

まあこんな感じだ

「…手前の部屋がリビングだから、そこにいておいてくれ」

そろそろウインをおこさないとな……

「…散らかっているのを文句を言っても聞かないからな」

「いやいや、全然散らかってねーじゃねーか

アウスの部屋の方ってアウス杖で殴ってくるな!!!

結構いてーんだよ!!!」

ウインは起きないし……このソファに寝かせればいいか

「…はあ、うるさい

黒いやつ、ウインとエリアとヒータ以外のやつの名前を教えてください」

「そういえば名前教えてなかったか

僕はダルク、横にいる僕の妹と彼女の役割をしているのがライナ、ヒータを殴っているメガネをかけたハリー・ポッター似の子がアウスそれから僕たちの役職を言おうかな？

霊使いと呼ばれるものに僕たちは入っているんだ

ウインが風霊使い

エリアが水霊使い

ヒータが火霊使い

アウスが地霊使い

僕、ダルクが闇霊使い

ライナが光霊使い

こんなもんかな？質問あるかい？」

はあ、こいつもシスコンなのか……

「…質問が2つほどある」

「なんだい？モテ男になる秘訣かい？」

「…そんなものはどうでもいい

1つ目は闇と光はみな兄弟愛に目覚めているのか？だ」

こいつ、どうでもいいって言った時涙目になったのだが、もしかしてこいつの存在を否定したか？

まあいいか

「いや、僕ら以外にはあまり見かけないね  
確か1つ前の先輩の閻霊使いと光霊使いはそうだったとは聞いたけ  
ど」

ほう、もしかして手がかりをつかめるか

「…2つ目だが、リツとカオルを知っているか？」

「……うん、知らないね、誰だい？」

はあ、こいつも知らないか  
知っているやつ見つけるだけでさえ見つからないとは……

「…知らないのならいい」

「じゃ、次はこっちの番だね！」

こいつからの質問か……  
だるいが、こっちも質問したんだ仕方ないな

「君の名前何だい？」

「あ、私も知りたーい！！」

……ウインいつの間にか起きた……  
てか、教えてなかったか？てつきり教えていたのだとおもったのだが

「…教えてなかったようだな  
俺の名前はルアだ」

「その杖を見ると何かの役職についてそうだね  
役職は何？」

「僕の手前では魔導戦士か魔導騎士かな  
魔力が多いにも関わらずに魔術をあまり使わずに剣でアンデットに  
攻撃していたからね」

「恐らく魔術は使えないという訳じゃないとおもっけど」

「こいつ意外と鋭いな……」

「こいつらの中で一番賢いんじゃないかね？」

「策士に向いてそうだな」

「……悪いが魔導戦士でもないし魔導騎士でもない  
普通のやつなら迷わずそれを選ぶだろうな」

「ふーん、じゃ何だい？」

「……龍使いだ……」

「詳しくはそこにいるメガネ……じゃなくアウスに聞け  
役職を言った途端に知ってそうな顔になったからな」

「そんなおびえた顔をしているあたり知っているって丸わかりだ  
さて、今回はどのような感じになっているのかな」

「アウス？ルアの役職って何なの？」

「『龍使い』ってというのは……」



## 第2話（後書き）

中途半端なところですが2話は終わりです。

やっと主人公の名前と役職が出てきましたね。

リツとカオルについて知りたい人は遊戯王GXの神の悪戯を讀めばわかります。

そういえば霊使いで1番人気があるの誰なのかな？

感想お待ちしています。

### 第3話

視点 ルア

「アウス？ルアの役職って何なの？」

「『龍使い』っていうのは、昔私たち霊使いの一派であったのだけど何年か前に龍を従わせる方法を魔術師たちが聞いた時、あるうことかその時の龍使いはウソを教えたらしい

魔術師たちは龍を従わせる事しか頭になくてウソを本当だと信じたらしいです

その方法というのは現実の龍を従わせるのじゃなく死んだ龍を魔力により復活させるという全く違った事だった

魔術師たちはしてみたと、もちろん龍は従わせる事はできず復活した龍は肉体を保つ事が出来ず、ゾンビとなった

そのゾンビ……ドラゴン・ゾンビは魔術師たちに傷を付け

ドラゴン・ゾンビが復活した場所である魔法都市エンディミオンをところ構わず破壊しつくした

今でもその傷跡が残っているらしいけど、どこにあるかは教えてもらってないから分からない

そういえば、その時の龍使いがドラゴン・ゾンビを従わせて破壊する場所を決めたとも言われている

龍使いはコレが原因で魔法都市エンディミオンから追放され、この前最後の龍使いが亡くなった事によりその役職が無くなったのだけど……」

「本当なのルア？」

エリアが半信半疑で聞いてきたし……

はあ、ウインはアウスが何を言っているのか理解してなさそうだし  
ヒータとアウスは身構えているし

ダルクはこの話が間違っている事に気が付いているな  
口に手を当て考えているが、詳しくは分からないっぽいな

「…ふつ、前以上に悪者になっているな

ドラゴン・ゾンビはアンデットなのだから龍使いが従わせる事が出  
来ないだろうに

それに龍使いが龍を従わせる方法を知るはずがない  
いくら龍使いでもそれは無理だ

ただ単に心をかよわせているだけなのだが  
同じ靈使いなのだから分かるだろ

エンデイミオンの傷跡を明かさないとこでその魔術師くすどもが自身  
の誤った術のせいであろうな事が分かるだろ

最後の龍使い？俺がいるのだから最後じゃないだろ  
恐らくあいつがが思っているのは俺の両親の事だろうな

あいつらが殺したんだ、だから何も知らず最後の龍使いと勘違いを  
したのでらう

おめでたい連中だ

はあ、自身の失態を隠すために冤罪にさてた龍使いは散々だ」

「ルア？どういう事？」

はあ、ウインはやっぱりわかっていなかったか  
最後にわかりやすく説明したのにな……

「簡単に言えば、アウスの言ったことは魔術師が身を守るためにつ  
いた嘘

龍使いがその嘘の被害にあったという訳

これでいいのかな？ルア」

「…ああ、そうだ」

ダルクが代わりに説明してくれて助かった  
あそこまで簡単によくいえるな  
俺には無理だ

「…………つまり、ルアがいい人でその魔術師が悪者なの？」

……はあ、ダルクがバカでもわかるように言ったのに完全に理解で  
きてないとは  
こいつ頭大丈夫か？

「…もうなんとも思っておけ  
これ以上説明するのだから……  
ダルクにでも聞いておけ」

はあ、ダルクが困ったような顔をしてワインに説明しているし  
あいつ本当に大丈夫か……

「…はあ、説明するだけでなんでこんなにも疲れるんだ……  
まあいい、今からそれぞれの部屋を決めるが要望のあるやつは先に  
言え

後で言っても聞かないからな」

「お、おい！！」

説明されて分かったけど、お前それでいいの？  
このまま勘違いをされて世間の冷たい目を浴びながら生きていくん  
だぞ……！！」

…はあ、やっぱりこいつは……

「…うるさい叫ぶな

どうせ龍使いの事を知っているのは上層部なやつだけだろ

上層部のやつは頭が固い

何を言っても聞かないさ

それにもし噂で下層部のやつにも広がっていたとしても

一度広がった噂はなんとやらというだろ

言うだけ無駄だ」

「で、でも」

「…くどいぞ!!」

俺がいいって言っているんだ!!

どうでもいいだろ!!

…はあ、さつさと部屋の要望を言え

こっちが勝手に決めるぞ」

どうしてヒータ（こんなやつ）に心配されなくてはならないんだ

はあ、無性に腹が立つ

視点 ヒータ

なんだよあいつ

せつかく人が心配してやってんのに

てか、あいつ感情すぐに変えていたな

怒ったと思ったら急にさっきまでの冷静？陰気？まあそんな感じで

静かになつたし

部屋の要望を決めろって言っていたな  
要望ねーのだけど……

「ルア、要望いいかい」

「…なんだ

限度を超えた事をほざいたらこつちが決めるからな」

「ははは、そんな不機嫌にならないで

簡単な事だよ

ただ単にライナと相部屋がいいだけだから」

「（…こいつ本当にあいつに似ているな……）」

…そんな事だつたら別にいい

他のやつはあるか？」

あ、俺いい事考えた！！

「はいはい！！俺もあるある！！」

「…他にはいないのか

じゃ連いてこい」

「おい！！無視すんなー！！」

「…なんだうるさい……

分かったから黙れ

要望は聞くだけ聞いてやるから」

「聞くだけかよ!!!!!!」

まあいいか、俺の要望はルアとの相部屋がいいぜ!」

ふっ、どうだ

これでちよつとは動揺するがいい

「却「ええええええええええ!!!!!!!!!!!!!!!!!!ヒータってルアとの相部屋がいいの!?じゃ私も!!!!!!」下……ウイン黙れそして却下だ」

くっ、こいつ眉一つも動かさないとは……

てか、ウインが動揺するなよな!!!!!!!!!!!!

「……ヒータは野宿でいいな

じゃ、案内するからついて来い」

「止め????????????????????い

野宿だけは止める!!!!いや止めてください!!!!この通り(土下座)」

「……はあ、目障りだ

分かったからとつとどけ、蹴り飛ばすぞ」

こ、こいつ……

だが、結局は許すもんなこいつは素直じゃないやつだ

視点 ルア

「…ウインの部屋はここでいいな

はあ……これで終わりだな

それから良く聞けよ

この突き当りが俺の部屋だから‘絶対’に入るなよ  
入ったやつは命が干あっても足りると思うな」

「そ、そこまで！？何があるのよ!？」

はあ、エリアが何か言ってきたが無論無視

部屋は地下15の空き部屋を使わせた

5人分しか空き部屋がなかったが

ダルクとライナが相部屋でいいからちよつどだ

それに俺の部屋の近くに置いておかないと何をするのか分からない  
からな

「…俺はリビングに戻るから何か文句があったら言いに来い  
聞くだけ聞いてやるから」

……  
……  
……

うん？誰か来たか……



「…ウインか？文句は何だ？」

「うん、文句はないよ、ただ……」

「……なんだ？」

「さっさと答えろよ」

「…はあ、できる範囲なら言う事を聞いてやる  
ただなんだ？」

「……なんだかウインの表情が一段と明るくなったのだが  
はあ、こいつ一番やっかいなやつになりそうだ」

「私とデュエルして！！」

「……はあ？」

「デッキ1つくらいならあるでしょ  
いいじゃない、ウインの相手してあげなさいよ」

「エリアいつの間にかいたんだ  
神出鬼没スキルでも持っているのか？」

「…はあ、あることはあるが何故しなくてはならない  
俺とせずにエリアとすればいいだろ」

「私とするの嫌なの？」

「……はあ、どうしてこいつはすぐ涙目になるんだ」

「……分かった分かった、してやるから泣くな  
絨毯じゅうたんが汚れるし、うるさい」

してやるっていったらこいつすぐ泣き止んだぞ  
なんなんだこいつ？  
嘘泣きの達人か？

「……たしかこのクローゼットの中に……見つかった  
はあ、先攻は貰うぞ」

「デュエル!!」

ルア LP 4000

ウィン LP 4000

「……ドロー」

D・HEROディフェンドガイを守備表示で召喚（守備 2700）  
カード4枚伏せターンエンド」

「私のターン！ドロー!!」

「……ディフェンドガイの効果、スタンバイフェイズになったことに  
より1枚ドローしろ」

「……ドロー？」

「…便乗を発動  
相手がドローフェイズ以外でドローした時に発動できる  
その後、お前がドローフェイズ以外でドローすると俺は2枚ドローする」

発動後、強欲な贈り物を発動  
お前は2枚ドローする」

「ドロー？」

「…俺は便乗の効果で2枚ドロー  
手札断殺を発動、互いに2枚捨てて2枚ドローする  
俺はこの2枚捨てて2枚ドロー」

「えーと、このカードとこのカードを捨てて2枚ドロー」

「…便乗の効果により2枚ドロー  
もう1枚の手札断殺を発動  
効果はもうわかるな  
俺はこの2枚を捨てる、2枚ドロー」

「えーと！？えーと！？この2枚捨てて2枚ドロー！！」

「…便乗の効果により2枚ドロー  
ちっ、そろわないか……  
さあ、お前のターンを続行しろ」

「ルアちよつといいかしら……  
なんでさっきまで1枚だった手札が7枚になっているのかしら……」

「…便乗の効果でな」

はあ、見てて分からないのかよ  
横で見ているだけだからわかるだろ  
さて、この手札をどう処理するか

「ドラゴンフライを守備表示で召喚！！（守備 900）  
カード2枚伏せてターンエンド」

「…ドロー」

2体目のディフェンドガイを召喚（守備 2700）  
成金ゴブリンを発動

デッキから1枚ドロー、お前は1000ポイントライフを回復する  
折れ竹光をディフェンドガイに装備、装備モンスターの攻撃力は0  
ポイントアップする

黄金色の竹光を発動、『竹光』と名の付いた装備魔法が存在する場  
合に発動できる

折れ竹光がある事により発動条件は満たしている

俺は2枚ドローする

もう1枚の黄金色の竹光を発動、2枚ドロー

手札断殺を発動、この2枚捨て2枚ドロー」

「私はこの2枚を捨てて、2枚ドロー」

「…便乗の効果により2枚ドロー」

成金ゴブリンを発動、1枚ドローお前は1000ライフ回復  
ちっ、そろわないか……

無限の手札を発動、互いに手札枚数の制限がなくなる

ターンエンド」

「ど、どうしようエリア!?  
ルアドローばかりしているよ!?  
手札8枚あるし!?!」

「はあ、ルアはあのカードをそろえているから多分このターンしか  
勝てる機会はないわ

このターンでルアのライフを0にしなさい」

「そんな〜」

あ、でもなんでドローばかりしているのかな?  
デッキ切れしたら負けるのに」

こいつ知らないのか?

結構有名なほうだぞ

まあ、いいか

「…ぐだぐだ話さずさっさと進める」

「はい、ドロー!?!」

「…スタンバイフェイズに入ったことによりディフェンドガイの効  
果発動

1枚ドローしろ」

「ドロー!?!?!」

「…便乗の効果で2枚ドロー

もう1体のディフェンドガイの効果でもう1枚ドローしろ」

「ドロー!!!」

「…便乗の効果で2枚ドロ  
ふつ、エリアの言う通りこのターンで僕を倒さなかったらお前の負  
けだ  
せいぜい頑張るんだな」

あと1パーツか  
残りデッキ枚数は11枚か  
余裕でいけるな

「うーん、頑張ったらいけるかな？  
フィールド魔法発動!!! 脳開発研究所!!!  
緊急レポートを発動!!! 自分の手札またはデッキからレベル3以  
下のサイキック族モンスターを1体特殊召喚する!!!  
デッキからメンタルマスターを特殊召喚!!!  
念導収集機を発動!!! 自分の墓地に存在するレベル2以下のサイキ  
ック族モンスターを任意の数だけ特殊召喚する!!! その後、自分は  
この効果で特殊召喚したモンスターのレベルの合計×300ポイン  
トダメージを受ける」

はあ、どう見てもあのコンボか  
無限ドロウするつもりか？

「…手札断殺をうまく使われたな  
どれを特殊召喚するんだ？」

「ガスタの巫女ウインダを3体とクレボンスを特殊召喚!!! レベル  
の合計分の2400ダメージを受ける  
えーっと、メンタルマスターの効果で800ポイント払い

自分フィールド上のサイキック族モンスター1体をリリースして発動する！！

ガスタの巫女ウィンダをリリースする

で、800ポイントは脳開発研究所の効果でサイコカウンターを1つ置く事で肩代わりできるっ！！

効果の続きで自分のデッキからレベル4以下のサイキック族モンスターを1体特殊召喚する！！

デッキから……いた！！ガスタの静寂カームを特殊召喚！！

メンタルマスターの効果をもう1度発動！！

カームをリリースしてデッキからカームを特殊召喚！！

もちろん、脳開発研究所の効果で肩代わり！！

もう1度使ってカームをリリース、カームを特殊召喚！！

カームの効果発動！！自分の墓地のガスタと名の付いたモンスターをデッキに戻して

自分のデッキから1枚ドロウする

カーム2体をデッキに戻して1枚ドロウ！！よし！！」

「……喜んでるところ悪いが便乗の効果で2枚ドロウ」

……はあ、そろわないな

やっぱ運ないな

「サイクロン発動！！便乗を破壊っ！！」

もう便乗いらなからまあいいのだけどな

あいつのプレイの邪魔になるから、あいつからしたら破壊した方がいいけどな

「さてメンタルマスターの効果で……はあ、めちやくちや続くのだろ、勝手にやっつけてくれ終わったらよんでくれ」はい、カーム出して、カウンター乗せて、カーム出して、カウンター乗せて……」

はあ、あれで何どうするのか

あそこから色々戦術ができるぞ

まあ、ここを耐えて次のターンサイクロンを使って脳開発研究所を破壊すればいいのだけだな

「ルア、後何枚でそろろうの？」

「……後1枚だ」

お前の助言通りにウインはこのターンでしか俺を倒す機会はない手を抜くつもりもないからな」

「へえー、それならウインの応援を頑張っておくわ」

『くすくす』って笑っているのを見るとムカつくな

「ルア終わったよ」

「……はあ、良く頑張ってデッキを0枚にしたな、感心するわ」

モンスターは、ガスタの静寂カーム1体、ガスタの巫女ウインダ2体、メンタルマスター1体、カバリスト1体か……

クレボンスがいつの間にかカバリストとなっているのだが……

「レベル4ガスタの静寂カームとレベル2ガスタの巫女ウインダとレベル1カバリストにレベル1のメンタルマスターをチューニング  
！！」



集いし願いが新たに輝く星となる 光さす道となれ！シンクロ召喚  
！飛翔せよスターダスト・ドラゴン！！（攻撃 2500）

念導収集機を発動！！墓地からカバリストとメンタルマスターを特  
殊召喚！！

レベル1カバリストにレベル1のメンタルマスターをチューニング  
！！

集いし願いが新たな速度の地平へ誘う 光さす道となれ！シンクロ  
召喚！希望の力、シンクロチューナーフォーミュラーシンクロン（  
守備 1500）

ドロー効果は使わない！！

レベル8スターダスト・ドラゴンにレベル2のフォーミュラーシン  
クロンをチューニング！！

集いし夢の結晶が新たな進化の扉を開く 光さす道となれ！アクセ  
ルシンクロ！！生来せよ！！シューティング・スター・ドラゴン（  
攻撃 3300）

無欲な壺を発動！！自分または相手の墓地に存在するカードを2枚  
選択し、持ち主のデッキにもどす！！

このカードは発動後ゲームから除外する

無欲な壺は1ターンに1度にしか発動できない

私はメンタルマスターとクレボンスをデッキにもどす

さらに貪欲な壺を発動！！

自分の墓地に存在するモンスター5体を選択し、  
デッキに加えてシャッフルする

その後、自分のデッキからカードを2枚ドローする  
墓地からガスタ・イグル、ガスタ・ガルド、ガスタ・スクイレル、  
クレボンス2体をデッキに戻し2枚ドロー！！

シューティング・スター・ドラゴンの効果発動！！  
自分のデッキの上からカードを5枚めくり、その中のチューナーの  
数まで1度のバトルフェイズ中に攻撃する事ができる！！その後戻  
したカードをデッキに戻してシャッフルするよ  
今デッキはちょうど5枚、その中には全てチューナー！！  
一応めくるよ1枚目、ガスタ・イグル、2枚目、ガスタ・ガルド、  
3枚目、クレボンス、4枚目、クレボンス、5枚目、クレボンスほ  
ら全てチューナーだよ  
シューティング・スターは計5回攻撃ができる！！」

はあ、よくやる

これが決まったら俺の負けだな

そんなことより、なんでクレボンスがこんなに出てくる？  
クレボンスが好きなのか？

「1度目の攻撃！デイフェンドガイに攻撃！！  
2度目の攻撃！デイフェンドガイに攻撃！！  
3、4、5度目の攻撃はルアにダイレクトアタック！！  
スターダスト・ミラージユ！！」

「…そんなの通すわけないだろ

3回目の攻撃、言い換えると1回目の直接攻撃の時

手札にあるバトルフェーダーの効果を発動

相手モンスターの直接攻撃宣言時に発動する事ができる

このカードを手札から特殊召喚し、バトルフェイズを終了する

この効果で特殊召喚したこのカードは、フィールド上から離れた場  
合ゲームから除外されるが」

「くっ、ウイン惜しかったわね……」

「ターンエンド」

「…ドロー」

はぁ、まだそろわないし

王立魔法図書館を召喚（守備 2000）

折れ竹光を王立魔法図書館に装備

黄金色の竹光を発動、2枚ドロー

揃った、エクゾディア

効果により特殊勝利だ」

「ぐすつ、負けちゃった、エリアあ！！！」

「くつ、涙目で抱き着いてこない！

落ち着け私、落ち着け、はぁー」

はぁ、こいつら大丈夫か？

シューティング・スターか……

手札にバトルフェーダーがいなかったら負けていたな

「おつ、デュエルしていたのかい」

「…ダルクだけか、ライナはどうした

お前らの事だから、いつも磁石のように引っ付いているのじゃないのか？」

「流石にそこまでは引っ付かないよ……」

で、どっちが勝ったの？って聞くまでもないか

エクゾディアが揃っているもんね

エクゾディアか……」

「…作ったのは俺じゃないけどな  
知り合いが置いて行ったデッキだ  
特殊勝利やバーンが好きなやつだったからな  
俺のデッキはあるが使う気ならない限り使わないからな」

「へっ？」

何驚いているんだこいつ？  
変な声だして気持ち悪いな  
はあ、デッキ元の場所になおすか

「ルア、知り合いが置いて行ったって、この山から出て行ったの？  
じゃ、僕たちも出られるんじゃない？」

「…はあ、知り合いがこれを置いて行ったのはここに住む前の家だ  
からな

ここには来てない  
この結界は親父が死ぬ前にかけたから俺には外し方がわからない  
だからお前らが出られるなんて無理だ  
まあ、いつかここから脱出させてやるから安心しろ  
俺も家にベビー以外のやつがいられると落ち着かない  
結界を外したらさっさと出て行けよ」

はあ、疲れる

それから、こいつ何笑っているんだ？  
ワインとエリアはまだやっているし

さっさと結界の外し方を見つけるか

### 第3話（後書き）

デュエルを入れるとやっぱり多くなりますね

このデッキを作ったのはもちろんリツです

リツとルアの関係はいつか番外編などに書くつもりです

デイフェンドガイと便乗でエクゾディアそろえる人、僕以外にいるかな？

感想お待ちしています

## 第4話（前書き）

この小説どこに向かっているのだろうか？  
自分でも分からない……  
それにアウスの口調がいまいちつかめない  
公式を使うとなんだか負けた気がするし

## 第4話

視点 ルア

「…今から調べものをしてくる

用があるやつは地下8階の図書室にいるからそこに来い

部屋の文句を言いにくく来たやつにも言っておけ

言い忘れていたが、そこにエレベーターがあるからそれを使えばいい  
ベビー行くぞ」

なんだか後ろから『あるなら言っよ!!』などと聞こえたが空耳  
だろう

はあ、さっさと探すか……

……

……

……

はあ、最近使ってなかったから汚れていると思ったら、思ったほど  
汚れてないな

だが、埃が目立つ

探し物する前に掃除するか

確か、部屋の隅に掃除道具があったはず

……あつた、はあ、やるか

.....  
.....  
.....

「ルア！お風呂ってどこ？入りたいのだけど」

「何人くらい一緒に入れるかしら？」

「ワインとエリアか……」

「こいつらいつの間に来た？」

「やはり、神出鬼没能力あるのじゃないのか？」

「普通だったら誰か来たのならすぐわかるはずなのに」

「……風呂は地下20階にある」

「大勢入れるから他にも誰か呼んで一緒に入っとけ、手間が省ける」

「……どんだけ大きいのよ！！！！！！」

「はぁ、叫ぶな」

「埃がまう」

「そろそろ掃除機をかけるか」

「ホウキがけはこんなものでいいだろう」

.....



……  
……

ん？誰だ？

気配を拾えたってことはエリアではないな

「やあ、掃除頑張っているね  
手伝おうか？」

「……はあ、ダルクか  
別に手伝わなくていい  
なにか用か？それよりあいつらと一緒に風呂に入らなくていいのか  
？」

「いくらなんでも女子と一緒に風呂に入るのはダメだよ  
用はない事はないんだよね」

はあ、何を聞きたいんだこいつは  
『ない事はない』ってややこしく言わずに  
『ある』って簡単に言えよ

「……なんだ、あるなら早く言え  
ないのならさっさと出ていけ」

「まあまあ、そんなに怒らず」

別に怒ってはないが

「ちよつとだけ気になったことなんだけど  
ヒータの火霊術を止める時に水霊術を使っていたよね  
ルアは水に属するのかなって」

属する？ああ、何の術を使うかか……

そこるところよく分からないのだよな

風に属したら、風霊術

水に属したら、水霊術

火に属したら、火霊術

地に属したら、地霊術

闇に属したら、闇霊術

光に属したら、光霊術

を使えるのだったか？

「…さーな、自分でもどこに属しているか知らない  
あえて言うなら『無』とでも言っておくか  
聞きたいのはこれだけか？」

「『無』…かい？」

「…ああ、『無』だ

字のごとく何も無い

どこかに属する波動がないからな

風の波動が体内にあれば、必然的に風に属するだろ

だが、俺には何も無いからな

『属するのはどこだ』と聞かれても答えられないという訳だ  
記憶したか？」

「だったら矛盾が起きるよね

属するのがなければ、その霊術が使えないはずだけど

そこのところはどう説明するのかな？」

「はあ、やっぱりこいつは鋭いな」

普通のやつだったら気づかないのにな

気づいているやつももしかしたらいたかもしれないが

あまり追究しなかったのかもしれないな

「…はあ、俺の体の中にはあらゆる波動が入り乱れているとでも言ったらわかるか」

風、水、火、地、闇、光が同量でこの6種類の波動が混ざることによって「無」になる

幸いなことに俺の体内には全ての波動が同量だ

だったら、そのうちの1つ以外弱くすれば……例えば風以外を弱くする

そうすると、風だけが残る

これにより、その時だけ風に属する

この原理である時水霊術を使った

これで理解したか？」

そろそろ掃除を終わりにするか

きれいになったしな

まだ、ダルクは残っているが、ほっとけばどこかに行く埃だ

「そんな事可能なのか」

体内に6つの波動があるなんて

たしか1つにしないとダメなのじゃ……はっ、なるほど、そうか！

「！」

ん？考えたようだが、理解したようだな

「…恐らくお前が思ったことであっているはずだ  
元々生まれた時には例外はあるが、ほぼ全員が6つの波動を宿して  
生まれる

それから、何歳かしてからその中から1つだけを選びそれに属する  
それが普通だが、その時の俺はそれじゃ面白くなかったのだから  
だから6つの中から6つ共選り、それを全てみがいた

子供の頃ってすごいよな、  
自分で決めた事を自分が好きな事に変えてしまうように脳を変えて  
しまうからな

好きな事ばかりして気づいたら今だ

だから属するのはないが、だが全ての波動はA級だ」

確か、 $F > E > D > C > B > A$ と波動の価値を決められるのだった  
よな

Fだったら、術すら使えなくて

Cでようやく簡単な術を使えるようになるのだったか

「全てA級って……

だけど、良くやるね

そんな多種の波動を身に着けた魔術師ってルアくらいじゃないのか  
他には聞かないしね」

「…俺の知っている限りではもう1人いる

風と闇だったか？ 忘れたが、たしかそれであっているはずだ

お前なら聞いた事はあるはずだが

『疾風の闇』『漆黒の風』どちらかで呼ばれていたはずだ」

「噂くらいしか知らないけど、確か歴代で最強の闇霊使だったか  
な？」

闇と風をうまく使えたとかなんとか

今聞いたからわかるけど、2つの波動を持っていたからそう呼ばれていたのか

でも、継承の儀式の途中で消えたから闇霊使いとしてなりつたたないから最強じゃない、とも言われているけど」

「…そいつの親父が目立ちたがりだな

継承の儀式を盛大なパーティーのようにしたのだとさ

それが仇となって、儀式と途中で消えた事を大勢の人に見られただが、そいつはその時の最大権力者で、その場にいた人全員に賄賂をわたし

大声で『儀式の途中で消えたように見えたが、儀式が終わったのと同時に消えたのだ！！だから、儀式は成り立った！！』などとほざいたそうだ

周りは迷惑を被られてしまったな

まあ、消えてしまったやつからしたら、そう言われてよかったのかもしれない

いつか帰ってきてても戻る場所があるからな」

ん？なんだこいつ意外そうな目で見やがって

何か変な事でも言ったか？

だるいし、ゴミを捨てるのと一緒にこいつも捨てるとするか

「へえ、その子の話する時は不機嫌顔ではなくなるんだ」

「不機嫌顔だったのに表情豊かになって話していたもんね」

「なんだなんだ、そいつつてもしかしてお前の彼女だったのか？」

はあ、だからこいつはなんで神出鬼没なんだ

「…不機嫌顔で悪いかよ

それにそいつ男だ、彼女つていう案は消えるな  
それにエリアと違って、同性愛には全く興味ない」

「私も同性愛には興味ないわよ!!!!!!」

みんなも私を避けないでよ!!!!!!」

「エリア、ゴメン

お前の趣味は否定はしないが、俺は興味ねーんだ  
だから……な」

はあ、どうしてウインは俺を見るなり腕に抱きついてくるんだ？

『放せ』という意味をこめて頭を撫ぜたら逆効果で喜んでいるし……

はあ、やっぱりこいつが一番厄介だ

「るーあー、弁解しなさいよね!!!!!!」

そんなウインとイチャイチャしてないで!!!!!!」

あなたのせいで私の立場がめちゃくちゃになっちゃったじゃないの  
!!!!!!」

「…うるさい叫ぶな

恋愛対象のウインがとられたように見えたからって八つ当たりするな  
それからイチャイチャなんてしてないからな

こいつが一方的に抱き着いてくるだけだ」

はあ、こいつ寝ているし

このパターン2回目なのだが……

「な、なに言っているのよ!!!!!!」

なんで私の恋愛対象がウインなのよ!!!!!!」

私は女子が恋愛対象じゃないのよ！！！！！」

はあ、泣きかけだし

これ以上いじくるのは止めるか

「泣くな、床が汚れるしうるさい  
俺の勘違いでいいのだな、はあ……」

アウスがあやしているし、あいつ いたのが気づかなかったな、ラ  
イナもいるし

ヒータが謝っているし

はあ、うるさいな

「ここで叫ぶなら出ていけ

ついでにこいつも連れていけ、邪魔だ

さつき部屋を教えたからわかるだろ

風呂あがったのかだったらダルク入ったらいいだろ」

「そう、じゃ入ろうかな

ルアも一緒にどう？」

何言っているんだこいつ？

俺と一緒に入るって？

「却下だ

俺は1人で入る派だ

分かったらさっさと行ってくれ

上がったら教えてくれ、ここで調べものをしているから」

「そう、じゃ1人で入って来るね

後で呼びに来るから」

はあ、あいつら全員いなくなったな  
じゃ、とつとつと調べものをするか

……  
……  
……

はあ、手がかりはないか……

親父の書斎ならあるかもな  
親父がかけたから外し方くらいは残しているだろうな

「ルア、あがつたよ  
1つ聞いていいかな？」

はあ、風呂から上がってすぐ質問かよ  
風呂に何かあったのか？

「こつて旅館でも、ホテルでもないよね……  
どうしてこう設備が整っているのかな」

ん？顔が引きつっているぞ  
旅館やホテル行った事ないから分からないぞ

「…整っているのか？」



必要最低限なものしか置いてないが」

「必要最低限でなんで温泉くらい大きいんだ！！湯船が！！  
1人で入っていてなんだか悲しかったのだけど！！」

あ、その事か

「…親父曰く、『家を建てるために掘っていたら温泉がわき出たから  
どうせなら、大きい湯船にしよう！！』だとさ」

「いやいや、限度が……はあ、今さら言っても無駄か……  
僕リビングに戻っているから」

じゃ、俺も風呂入りに行くか  
その後、書斎で探せばいいな

……  
……  
……

はあ、風呂からあがって部屋に戻って来たら、なんでウインこいつが僕の  
ベッドで寝ているんだ？

部屋ちゃんと教えたはずなのだが  
部屋の中見られてない事を願うか

はあ、こいつ起きなさそうだし……

こいつの部屋に戻しに行くか

いつもと違う家だ  
勝手が違うから仕方ないか

.....

.....

.....

はあ、すれ違うやつがいなくて良かった  
ヒータとかに見られたら絶対おちよくられたな  
そつえばあいつら晩飯食ったのか？  
リビングにいなかったら、ほっておくか

.....

.....

.....

はあ、見事にウィン以外の全員いるし.....

「.....はあ、何か食いたいものあるか  
要望がなかったら勝手に作るが」

誰も何も言わない

むしろ意外なものを見る目で見られたのだが  
こいつらに意外な目で見られる事多くないか、俺？

「…無いんだな、じゃ勝手に作るぞ」

「る、ルア……」

ルアって料理できるの？」

「…できなかつたら一人で生きていけないだろ  
生きていけない事はないが

できないよりもできた方がいいからな

要望があるのか、だったらまだ聞いてやるから早く言え」

「じゃ、お任せで任せようかな

ルアがどんな料理が得意か気になるしね」

はあ、お任せって一番対応に困る返答なのだが

「…はあ、まずくても文句言つなよ」

確か、ハンバーグを作っておいたのがあつたはず

焼くだけで、すむように事前に作つてあつたんだよな

7人分でいいか……：…：そういえば、あいつらの使い魔見かけないな

「…お前らの使い魔の分は用意した方がいいか？」

「それがね、私たち全員の使い魔、家に置いてきちゃった  
だから今いないからいいよ」

はあ、家に置いてくるバカがこんなにいるなんてな  
まあ、8人分しかなかったからちようど良かったのだが

「ベビー、あいつらを席に案内してあげてくれ」

ベビーが『がう』ってうなずいてくれた

さあ、やるか

……

……

……

「ベビー、これも持って行ってくれ」

ベビーに手伝って貰って、皿運び等をしてくれたから時間がだいぶ  
省略されたな

俺の分も焼くか

「ルア！ワインが来たからワインの分もよろしく!!」

「…はあ、今更来たのかよ

分かったから席につかしておけ」

まあ、後1つ焼くのと2つ焼くのはもう同じもんだな  
とっとと焼くか……

.....  
.....  
.....

「ベビー、この2つもよろしくな」

はあ、これで終わりか

ハンバーグと一緒にサラダとライスも追加してやったんだ

はあ、疲れたな

いつも2人分が8人分になったからな

まあ、いいか

「…なんだ、まだ食べてなかったのか

さっさと食べるよ覚めるぞ

まあ、お前らがさめたのを食べたいのならほっておくが」

「なんだよ、せつかくまってやったのに

まあ、いいか俺もっ食べるぜ」

「ねえルア、あなたベビーと話している時なんだかキャラが違ってくるじゃない？

私たちと話している時は不機嫌顔なのに

ベビーと話している時はイキイキしているじゃない」

「…気のせいだろ」

本当に気のせいだろ

いつも通りに話しているだけなのだが  
こいつらと話すのも同じなのだが

はあ、食ったら書齋に行くか

その前にまた風呂に入らないと  
焼いたから匂いがついてそうだが

はあ、2度手間になったな

……

……

……

はあ、やっと書齋にこれた

飯を用意してなかったらこんなにも時間食わなかったのにな  
まあいいか

隅々から探しまくるとするか

……

……

……

無いな……

後はこの本棚だけか

はあ、1番めんどくさそうだから探したくなかったのだが……  
仕方ない、探すか

……

……

……

ちっ、見つからないな

残る段は1番下の段だけか……

ん？なんだこの手紙？

『ルアへ……』

遺書か？後で部屋で読むか

早く探さないと

……

……

……

はあ、結局ないのかよ

気が滅入る……

部屋に戻ってきたがウィンがまた寝ているか？と思ったがそんな事

はなかつたな

流石に2回は間違えないな

さて、遺書らしきものを読むとするか

『ルアへ……』

お前がこれを見ている時には俺はもういないだろうっ』

はあ、親父らしく最初はベタな展開だな

『まあ、もしかしたら生きているかもしれないが  
いや、生きていたいなあ』

はあ、予想通り茶化してきた

『まあ、冗談はさておき  
恐らく俺の事だ結界を張って死ぬだろうな』

……手がかりか？

『結界がある限り、その中はお前の身の安全は守られたと  
思っている  
追っ手の魔術師もその中には入れないはずだ』

そんな事はもうわかってる  
さっさと外し方を教える

『俺からお願いがある  
それは』

』

！？なんだと正気か！？  
そんな事何故俺に頼む！？



## 第4話（後書き）

なんだかどうでもいい事を書いてしまったところが多くて長くなりました

まあ、最後は次回の伏線のような感じで

『疾風の闇』『漆黒の風』はまあ分かると思いますがりツの事です  
早く番外編書きたいな

書くとすればこの伏線が一通り終了してからです

その前に番外編を書くところとしたネタバレが含まれるのでやめておきます

感想お待ちしています。

## 第5話（前書き）

はあ、前回までの話を第1話で終わらせようとしていたのに、なぜか4話も使ってしまった……

はあ、グダグダ書いているからだ……

だったら、グダグダ文章をマスターしてやる！

## 第5話

『それから、もう一つのお願いだ』

はあ、手紙の続きまだあるのかよ

さっき書いてあった事より難しかったらお手上げだぞ

『この山に強い力の持ったアンデッドが現れるらしい  
その日は、俺が死んだ10年後のお前の誕生日の日だ  
どうか、頑張ってくれ

父より』

はあ、どうして親父はこんな面倒な願いを残したまま死ぬんだ  
強い力の持ったアンデッド？果たしてどんなやつか……  
そいつが現れるのは後……1週間だと！？  
今、あいつらがここにいるのだぞ！？  
ちっ、どうするか……

とりあえず、先の願いの方をすれば楽になるか？

くっ、それを終えて1週間で戻るなんて不可能に近いぞ

親父め、俺がこれを見てなかったらどうするつもりだったんだ  
どう考えても1週間じゃ……いや、いけるか？

地図もついでに持ってきておいて良かった

親父の部屋にあつて、興味があつたからな

どこから回ったらしいか……順番に回るしかないな

だが、俺が明日……もう今日か、日付が変わっている  
出ていくとあいつらどうなる？

地図があるから行き当たりばったりじゃないとは言え、始めていく  
ところだ

1週間で間に合わなかったら、そのアンデッドの餌食となるのか……  
くっ、そいつの力の量さえ分かれば計画がすぐ立てられるというの  
にな

親父がああ言っているから強いのだろう

やはり先の願いを済ませた方がいいか？

はあ、振り出しに戻る……

起きて決めるとするか……

もう寝よう

……

……

……

はあ、目覚めが悪いな

こんな問題を抱えているんだ、当然といえば当然か……

てか、この刀で切れば……無理だったらどうする

武器を封じられ、術も封じられたら手は無いな

やはり、先の願いを先にするか……

はあ、もうそうしよう

これで決めなければまた振り出しに戻る

上が騒がしいな

俺もリビングに行くか……

べビーも起きたようだしな

「べビー、行くぞ」

.....  
.....  
.....

「……朝からうるさい  
静かにできないのかお前らは」

とりあえず抱き着こうとしたウインをかわし、コーヒーを淹れ椅子に座る

はあ、何故まだ抱き着こうとするこいつを手で押さえながらコーヒー入れなければならぬ朝から疲れる

はあ、そつえば話を切り出さないと

「……はあ、俺はこれから1週間くらい出かける」

全員の動きが急に止まった  
こいつら息ぴつたりだな

「る、ルアなんで？」

そりゃ、そう聞かれるよな

「……ちよつとした用ができたからな  
まあ、1週間以内には必ず戻るから」

そうじゃなかったらここが危険だ

「私たちどうすればいいのよ!!」

「…ここを自由に使っている

アンデットは家の周辺の結界で入ってこれない

それに親父の結界で山の外にも出られないな

家から外に出ない限り安全だ

食糧もまだある

1週間は持つはずだ」

「どうしても出て行かないとダメなのかい？」

「…ああ、その用は重大な用だからな

今行かないとダメだからな」

今行かないともしかしたら1週間後手遅れになっているかもしれないからな

はあ、面倒事が続く

「じゃ、僕とデュエルして勝ったらいいよ

もちろん負けたらここに残る事だ

デッキは君のデッキじゃないとダメだからね」

……こいつもデュエル脳か

はあ、受けないとつるさそうだから受けるしかないか

「…はあ、仕方ない受けてやろう

だが、俺が勝ったら何も文句言わず引き下がれよ」

はあ、久しいなこのデッキ使うの

「じゃ、先攻と後攻どうする?」

「…お前の自由でいい」

「じゃ、先攻を貰うね」

「デュエル!!!」

ダルク LP 8000

ルア LP 8000

「僕のターン、ドロー!

モンスターセット

カード1枚伏せてターンエンド!!!」

はあ、どうせ面倒なモンスターなんだろうな  
マシユマロンか?リクルートモンスターか?

「ドロー」

高等儀式術を発動

手札の儀式モンスター1体を選択する

白竜の聖騎士を選択する

そのカードの同レベル、この場合だとレベル4となるように自分のデッキから通常モンスターを墓地へ送る

デッキからサファイアドラゴンを墓地へ送る

その後、白竜の聖騎士を特殊召喚（攻撃 1900）

儀式の準備を発動、自分のデッキからレベル7以下の儀式モンスターを1体手札に加える

その後、自分の墓地から儀式魔法を1枚手札に加える事ができる  
デッキからは白竜の聖騎士を墓地から高等儀式術を加える

そして高等儀式術を発動、選択するモンスターは白竜の聖騎士  
デッキから墓地に送るのはサファイアドラゴン

これで、白竜の聖騎士が降臨（攻撃 1900）

儀式の準備を発動、さっきの同じカードを手札に加える

高等儀式術を発動、選択するのは白竜の聖騎士、  
デッキから墓地に送るのはサファイアドラゴン

これで、白竜の聖騎士が降臨（攻撃 1900）

手札2枚か……

どうするか

「へえ、白竜の聖騎士が3体か

青眼の白龍を呼ぶのかな？」

これでミラーフォースとか破壊系カードが使われたら最悪だな  
あいつの余裕そうな顔がムカつくのだが

「…まだ通常召喚していないからミラージュ・ドラゴンを召喚（攻



撃 1600)」

ふーん、あいつの顔少し歪んだな  
ミラーフォースでもあったのか  
まあ、ミラージュ・ドラゴンの効果でバトルフェイズ中は罨が使えない事を知っていたのだろう  
だからかもな

「流石にヤバいかもね……」

予想通りか

それじゃ、ミラージュがいなかったらヤバかったな

「…白竜の聖騎士で裏守備モンスターに攻撃

白竜の聖騎士の効果で、裏守備モンスターに攻撃した場合、ダメージ計算を行わずに破壊する」

破壊したのはキラートマトか

はあ、厄介なカードかよ

「…戦闘破壊じゃないからリクルート効果は使えない

白竜の聖騎士2体とミラージュ・ドラゴンでダイレクト」

後2600ライフか

「…白竜の聖騎士の効果発動

このカードをリリースしてデッキまたは手札から青眼の白竜を特殊召喚する

このターン青眼の白竜は攻撃できないが

2体をリリースして青眼の白竜を特殊召喚（攻撃 3000）

凡骨の意地を発動  
ターンエンド」

「へー、ルアなんでもう1体もリリースしなかったの？  
もう1体出せばダルクが危ないじゃん」

はあ、やっぱりウインか  
こんな質問するのウインくらいだからな

「…考えたら分かるだろ  
もしあいつがまたキラートマトなどのリクルートモンスターや面倒  
なモンスターを裏守備に出された時のためだ  
だが、3体もおいていれば攻撃力の高いのを召喚されたら負けるか  
もしれんから2体はリリースする  
だから1体だけおいておく、分かったか？」

はあ、どうしてこんな説明をしなくてはならないんだ  
俺がこれを書いている作者とは違いバカノリで3体リリースなんてする  
わけないだろ  
まあ、1体だけの方が良かったかもしれないが、まあ、2体で良か  
つただろう

「このままじゃ危ないね、ドロー！  
相手フィールド上にモンスターがいないことで、バイス・ドラゴン  
を特殊召喚！！（守備 1200）  
この方法で特殊召喚した場合攻守が半分になっちゃうから守備力が  
1200だよ

手札からライティング・ボルテックスを発動！  
手札を1枚捨てて発動！相手フィールド上に表側表示で存在するモ

ンスターを全破壊する！」

ちっ、だがこのターンでは決まらないだろうな  
次のターンで何とかなるだろう

「ダーク・リゾネーターを召喚！（攻撃 1300）  
レベル5バイス・ドラゴンにレベル3ダーク・リゾネーターをチュ  
ーニング！」

王者の鼓動、今ここに列をなす 天地鳴動の力を見るがいい！シン  
クロ召喚！我が魂、レッド・デーモンズ・ドラゴン！（攻撃 30  
00）」

何とかなるか

「ただだよ、スカーレット・カーペットを発動！！  
フィールド上にドラゴン族のシンクロモンスターが表側表示で存在  
する場合、

自分の墓地に存在する『リゾネーター』と名のついたモンスターを  
2体まで選択して発動する  
選択したモンスターを墓地から特殊召喚する！

墓地からダーク・リゾネーター（攻撃 1300）とバリア・リゾ  
ネーター（守備 800）を特殊召喚！！」

バリア・リゾネーター？……はあ、ライトニング・ボルテックスの  
時か

「レベル8レッド・デーモンズ・ドラゴンにレベル3ダーク・リゾ  
ネーターとレベル1バリア・リゾネーターをダブルチューニング！！  
王者と悪魔、今ここに交わる 荒ぶる魂よ、天地創造の叫びをあげ

よ シンクロ召喚！いでよ、スカーレット・ノヴァ・ドラゴン！  
攻撃 3500)

スカーレット・ノヴァ・ドラゴンの効果で墓地にいるチューナの数  
×500ポイントアップする！！  
よって攻撃力は4500！！

スカーレット・ノヴァ・ドラゴンで攻撃！！バーニング・ソウル！  
！！

くっ、後残りライフ3500か……

「ターンエンドだよ  
スカーレット・ノヴァ・ドラゴンは魔法・罠・効果モンスターの効  
果では破壊されないからね  
どうやって対抗する？」

「……ドロー、凡骨の意地の効果でドローフェイズにドローしたカー  
ドが通常モンスターだった場合、  
そのカードを相手に見せる事で、自分はカードをもう1枚ドローす  
る事ができる

青眼の白龍を見せドロー、暗黒の竜王を見せドロー、ベビードラゴ  
ンを見せドロー、  
暗黒の竜王を見せドロー、神竜ラグナロクを見せドロー、デビル・  
ドラゴンを見せドロー、  
神竜ラグナロクを見せドロー、砦を守る翼竜を見せドロー、洞窟に  
潜む竜を見せドロー、  
砦を守る翼竜を見せドロー、暗黒の竜王を見せドロー、デビル・ド  
ラゴンを見せドロー、ちっ終わりだ

竜の尖兵を召喚（攻撃 1700）」

「そのモンスターを出してどうするの？  
僕には攻撃力4500のスカーレット・ノヴァ・ドラゴンがいるの  
だよ」

「…竜の尖兵の効果発動  
手札のドラゴン族モンスターを1体墓地へ送る事で、こいつは攻撃  
力300ポイントアップする  
墓地へ11体のドラゴンを送り攻撃力5000  
カードを1枚セットしてターンエンド」

「あれ攻撃しないのかな？  
僕のスカーレット・ノヴァ・ドラゴンの方が攻撃力しただよ」

「…そいつは自身を除外することで攻撃を無効とする効果がある  
そしてエンドフェイズ時に特殊召喚する  
そんなやつに攻撃するか  
セットしているカードがミラーフォースなどのカードかもしれない  
んだ」

こいつ動揺したな  
そのカードの確率が高いな

「ふーん、そうかい  
じゃ、僕のターンだね、ドロー！！  
うーん、ターンエンド」

「…ドロー、このデュエル勝ったな」

「勝利宣言すると死亡フラグだよ」

「…そんな事どうでもいい

畏発動、強制脱出装置を発動

フィールド上のモンスター1体を持ち主の手札に戻す

スカーレット・ノヴァ・ドラゴンを選択

そいつの効果はバウンスには対応していないからな

竜の尖兵で攻撃」

「畏発動！！聖なるバリア・ミラーフォース…！！

効果は分かっていると思うけど、

相手モンスターの攻撃宣言時に発動できる！相手フィールド上に存在する攻撃表示モンスターを全破壊する！

竜の尖兵は破壊だよ」

「…はあ、勝ったな

竜の尖兵は自分フィールド上で存在している時に相手のカード効果で破壊された時、

自分または相手の墓地のドラゴン族通常モンスター1体を特殊召喚することができる

墓地から青眼の白龍を特殊召喚（攻撃 3000）

青眼の白龍で攻撃」

「いつけー！！！！滅びのバーストストリーム！！！！」

……なんでこいつが青眼の白龍の技名をいつているんだ

こいつのモンスターみたいになっているし……

はあ、まあいいか、言うのは面倒だ

「…これで文句ないな  
俺は出ていくからな」

時間を食ったが、まあいい  
反論されると思っていたから、その分の時間は予想範囲だ  
まさかデュエルするとは思わなかったが  
はあ、だるい、行くか

「ルア、行くのはいいけど、どこに行くのよ？」

「私も行く！！」

「…はあ、とりあえずウインはだまれ  
親父の結界があるから外に出られないだろ、それに今から行くところ  
は危険だからな  
お前じゃ足手まといだ

…次はエリアの質問の答えだが、今から行くところは旧国だ」

「きゅ、旧国ってあそこの！？  
何しに行くのよ！！死ぬつもり！？」

どうして死ぬことになるんだ？  
はあ、ウインは知らなさそうだ

「…はあ、旧国ってあそこしかないだろ  
ウインが知らなさそうだから、一応説明しておく  
昔、ここに移り住む前の国だ  
風、水、火、地、闇、光の国に分かれている  
確か、俺らの先祖は移り住む集団と残る集団に分かれた

旧国の周りには何百年に1日だけまわりの竜巻などがやむ時があり外に出られる

ちよつと移り住む時がその時だった、はあ、自分から説明すると言ったがだるいな、まあ続きを言うが

残った集団はそれぞれの国で自由に住んでいるのだったか？

戦闘民族は戦闘をし、古代龍の封印を守っている民族はそれを守ったりなどしているのじゃないか？

詳しい事は知らないが

知っているといえば、並みの人じゃ旧国に行けない……着けないと言ふ事だけか

竜巻などが常にあるんだそりゃ、無理だろうな

理解したかウイン？

してなかったらダルクにでも教えてもらえ  
バカでもわかるように教えてくれるだろ  
ウイン

はあ、真つ先に聞きに言つたし……

「…説明したんだもう行つていいだろ」

「まだ説明は終わつてないわ

何しに行くのつていうのがまだだわ」

はあ、それ説明することほとんどないのだが

「…ただ親父から頼まれた用をしに行くだけだが」

「ふーん、そうじゃ行つてらっしゃい」

「お、おいつ、止めなくていいのか？」



またあいつか、どれだけ俺の邪魔をすれば気が済むんだ

「デュエルの賭けで無理でしょ

それに止めても無視していくでしょうから意味ないんじゃない」

まあ、あいつの言う通りというのはムカつくが、

まあ俺の事だ、無視して行くだろうな

はあ、だるい、もう行くか

「…じゃな、また1週間後」

………

………

………

はあ、旧国までは時間がかかる

ベビーに乗っていくか

「ベビー、憑依装着」

「がうー!!」

憑依装着には、2通りある

1つは使い魔の魔力を自身に憑依させ、能力を上げる事

もう1つは、自身の魔力を使い魔に憑依させ、使い魔を成長させる事

この場合は後者の方だ

ベビーは今、千年竜よりも若々しい姿だ

青眼の白龍くらい大きさをたろうな……って俺は誰に言っているんだか  
ウインの天然が感染したか

はあ、用意はできたからさっさと行くか

……

……

……

はあ、旧国の前についたが竜巻が吹いているな  
どうするか？

## 第5話（後書き）

旧国にはいろいろな民族がいますが、どの民族が出てくるかは決めていません

まあ、2つの民族は決めています

感想おまちしています。

## 第6話

視点 ルア

ベビーを元の大きさに戻したが  
とりあえず霊術を使って穴をあけてみるか

「風霊術 - サイクロン」

くっ、かき消されたか  
だったら

「風霊術 - ハリケーン」

効果ありか？  
なら余り使いたくないが

「風霊術 - 大嵐」

ちっ、穴が空きかけたが新たな風の層が作られたか……  
どうするか……  
スタート地点を走り出せないという意味がないのにな……

何か打ち消されるもの……  
いや、あれを吸収すれば……いや、そんな術は知らない  
6つも術を使えるというのに対抗策が無いのかよ……  
……ふっ、1つだけ試してみるか  
アレの性質上いけるかもな

「ベビー、コートの中に隠れていて  
…さて、してみるか」

初めての試みだからな  
失敗するかもな、まあ、無理やりでも成功さすが

「『無』発動!!」

ふーん、体のまわりに薄い膜のようなものができたな  
無色透明だからちゃんと見ないと分かりにくいな

これに術名つけるべきか? 『無』というのも一々面倒だがまあいいか

「…はあ、通り抜けれるか?」

風が強いな、並みのやつじゃ近づくのでさえ苦しいのじゃないのか?  
まあ、俺はベビー（憑依装着状態）によく乗るからこのくらいは  
馴れたが

竜巻の目の前に来たな一歩踏み込めば竜巻の中に入れそうだな  
くっ、『無』のコントロール難しいな

1つでも波動の量が変わればこの状態を維持できないぞ  
はあ、もたもたしても仕方ない、行くか……

「…何とか行けるか?」

『無』が竜巻の『風』の波動を『無』の膜の上をコーディングして  
いるな

自分の波動とできないのが幸いだ、この場合  
少しでも増えると『無』を維持できないからな

だが、利用はできそうな感じだな、今度ためしてみるか

まあ、ある程度は思った通りだったな、『無』には属する波動の核

がない状態

『風』『水』『火』『地』『闇』『光』がそれぞれを打ち消すからなだから、核が無くなる、それは昔試したから分かっていたが波動を食うとはな……大学で発表すれば賞貰えるほどだぞコレ俺以外に『無』を使えるやつはいないから発表しても貰えないか……まあ、発表する気はないが考えている内に旧国に着きそうだ

到着したが、ここは……火の国か？

火山……バーニングブラッドか？地図を見た時に確かあつたはずだ……ああ、あつたな

ここは火の国であっているな

早く目的地に行かなくては

はあ、地図にどうして書いてないのか……地道に探すしかないか……

「ベビーもう出てきていいよ」

ベビーは定位置の僕の右肩に乗る

ん？前から何かやってきたが？恐竜か……はあ！？恐竜に炎が灯っているぞ！？大丈夫なのか！？

あ、火の国だからまあ、全身が炎に包まれたやつがいるかもしれないから

これはカワイイものなのか？

「…お前どうした？」

「がう？（涙目で上目づかい）」

最近涙目で上目づかい流行っているのか？ましてやこんな小さい恐

竜にまで……

はあ、頭でも撫ぜるか……首と尾に当たると火傷するな絶対  
何故あんなところから炎が……気にしたら負けか？

はあ、こいつといい、ウインといい何故頭を撫ぜたら喜ぶんだ？

「がう、がうー！」

ついて来いか……

ドラゴンの言葉を生れてから聞いていたから会話できるが  
恐竜の言語も分かってしまつとは……俺頭大丈夫か？

……

……

……

はあ、恐竜がたくさんいるコロニーのようなところか  
数で数えて20あるかないかか……少ないな

ここが本拠地でなく、支部の1つか

はあ、奥の方で一番偉そうな恐竜がこつちを睨んでいるのだが  
行った方がいいな、周りの恐竜も睨んでいるし（ここに連れて来た  
恐竜は何故か懐いているが）

はあ、目の前に来たが背デカイな

まあ、恐竜だから当たり前か、肉食つぱいから生態系のトップか？

「グルル（お主、何者じゃ、モノロフが懐いているのだが……）」

ここに連れて来たやつ、モノロフって言う名前なのか

「…グアルガ（…旅の者だ、ここに来た時にそのモノロフに会い、ここに連れられた、懐かれているわけは分からぬが…）」　次から恐竜の言葉を抜きにします

「ほお、そうか

我々を倒しに来た者ではなさそうだな」

モノロフが頬を足に擦ってきたのだが…もしその炎が服に引火したら危ないな

着替えの服1つしか持ってきてないぞ

燃やされたら危ないから頭を撫でて気をそらすか

「…ああ、俺は『火の塔』を探しに来たんだ、何か知らないか？」

「知っているが、何か用なのか？」

ワームはいなくなつたといえ、封印龍が今いるんだ見つかったら危ないぞ」

封印龍？氷結界だったか？

確かここに残つた部族の1つで有名なやつらだったから少しだけだが知っているな

まあ、封印龍の事だけだが俺は

「…何故そいつらが目覚めている

氷結界が封印を守っているのじゃないのか？

もしや、さっき言っていたワームが関係あるのか？」



封印龍が3体とも目覚めたらどうなるか、あいつらが1番知っているのだろ

「お主何も知らないのか？」

「…すまないが教えてくれないか？  
俺は今日ここに来たばかりなんだ  
ここで起きたことは全く知らない」

「な、ここ来ただと！？どこから！？  
もしや、ワームと同じで宙からか！？」

はあ、ワームとは何か知らぬが、『宙』という単語が出て来たから  
恐らく宇宙の者が…：侵略者と考えるのが1番か…：

「…今の話を聞くとワームとやらは宇宙からの侵略者なのだな  
ここに来たのは、侵略しに来たわけでないから安心しろ  
俺がどこから来たのかだ  
新国と言えば分るか？」

ここは旧国と知っているが  
僕が住んでいるところは何とこのだか？  
旧国の対をなすから新国でいいのか？

「し、新国だと！？外に竜巻があるのだぞ！？  
ここに来るのは不可能に近いぞ！！」

新国であつていたみたいだな  
はあ、説明するのしんどい  
封印龍の事を説明してもらえてないし…：

「…来てしまったものは仕方ない  
それをとやかく言われてもな  
まあ、その事はどうでもいいだろ  
封印龍の事を教えてもらおうか」

「あ、そうだったな忘れていた  
簡単に言うと戦争が起きたのだ

宇宙からの生命のワームとここに生きている部族の連合とのな

まず1体目の封印龍、ブリューナクが解放され、戦線は有利かと思  
われたが

X-セイバーがワームの餌食となり壊滅した

その後、他の部族もその影響を受け、ワームの餌食となり壊滅する  
のも時間の問題となった時に

2体目の封印龍、グングニールが解放された

氷結界としては内部で賛否を巡る口論がされたようなのだが

氷結界が作り出した『鏡』によってブリューナクが制御できていた  
からな

それで、グングニールを解放する事になった

我々ジュラックも戦線に出た時

運が悪く、友として我々と非常に仲が良かったフレムベルが壊滅に  
なった時だったのだ

我々は怒りに狂いそうになったが、我、タイタンが何とか抑え冷静  
に戦線で戦った

それは良かったのだが、魔轟神がその戦争により目覚めた

魔轟神は昔に封じられた堕ちた神々

こっちの味方になれば百人力なのだ

ワームの味方についたのだ

封印された怒りで我々の敵方についたのだろうか

そやつらは堕ちたといえ神、力は我々の予想を大きく上回った  
ワームで他が空いていない上にそやつらとも戦わなくてはならぬ  
我々の負けは確実だったのだが、伝説のドラグニティと呼ばれる者  
が我々の味方になったのだ

ドラグニティは魔轟神と同等くらいの戦力でな、戦線を元の状態ま  
で戻した

だが、魔轟神が戦い方を変えたのだ

1つの部族を徹底的に攻撃し、壊滅させるといふ戦い方にな  
その最初の餌食になったのが我らジュラックという訳だ

壊滅になりそうなその時、我々の神、

ジュラック・メテオが天より降って来て魔轟神を壊滅寸前まで追い  
詰めたのだ……自身の命の引き換えに……

それは、我々ジュラックにも大きなダメージだったのだ

メテオが降って来た時、我々は2つのグループに分かれ魔轟神と対  
抗していたな

1つのグループがメテオの作り出した火の波に沈んだのだ

だから我々の生き残りはここにいる20程度

これは戦線から手を引くしかなかった

だが、メテオが作り出した火の波から我らの友が生まれたのだ

ネオフレムベルとなつてな戦線へ出て行ったそうだ

その中に、フレムベルの神、エンシエント・ゴッド・フレムベルも  
出陣していたそうだ

メテオとエンシエント・ゴッド・フレムベルのおかげで戦線はまた  
大きく動いた

当然我らの有利でな

だが、おとなしく黙っているワームと魔轟神ではなかったのだ

ワームはゼロを魔轟神は3体の巨大な堕神と新しく作り出した堕神  
が戦線へ出て行った

また戦線の状況は元通りに……いや我々連合軍の不利となった

ワームゼロは連合軍が対ワーム用兵器、A・O・Jディサイシブ・アームズが完成に間に合い倒せたのだが  
残る問題は魔轟神、ドラグニティが全てのナイトを出陣させても叶わなかった

そこで、氷結界が最後の封印龍……トリシューラの封印を解いた  
それがこの戦争の終わりとなった……全ては三体の封印龍が無に帰してな」

なるほどな、氷結界は鏡で封印龍を制御できていると勘違いをし、  
トリシューラの封印を解いたのか

あいつらめ、封印龍は見えない回路でそれぞれの意思を通じている  
というのを考えたら分かるだろ

くっ、やつらの失態のせいで僕の行動をさらに気を付けないとなら  
ないじゃないか

特に水の世界で……  
はあ、どうするか

「…なるほど、よく分かった

気を付けて行動する

説明をしてくれてた事に礼を言う

もう一つ質問はいいか？

『火の塔』にはどう行けばいい

そこに行かなくてはならないのだが」

タイタンが悩んだいるな

よほど何かあるのだろうか？

中に何かあるかよく知らないのだが

「うむ、いいだろう

そなたは悪用しないだろうからな  
モノロフ連れて行ってやれ」

……よりによってこいつかよ

なんだかウインと似ているオーラがあるから不安なのだが

はあ、他のやつらはいカツイヤつらばっかだからな

モノロフみたいなやつがまだましなようだな

はあ、じゃ行くか……

……

……

……

結構歩いたな

火の国だから気温が暑いからな

それで長距離歩くと疲れる

「…モノロフここなのか？」

うなずいたからここなのだろう

「…じゃここで少し待っておいてくれ」

正面に扉があるなその上に鳥のような模様がある

何の模様だ？まあ、いいか、待たすのも悪い早く入るか

.....  
.....  
.....

中は結構広いな  
そこに階段があるから2階に行けばいいのか

.....  
.....  
.....

2階に上がつてと  
ん？真ん中に何かあるな？なんだ？

「.....な、何故こいつが.....  
親父が言っていた事は.....  
.....はあ、厄介なことを押し付ける  
まあ、するが.....」

.....

……

「モノロフ終わったぞ」

はあ、人の顔見るなり来るし……  
はあ、どうして俺はウインのようなやつに懐かれる傾向があるのか？  
はあ、いらぬスキルだ……

「……じゃ、戻るか」

……  
……  
……

「……タイタン、帰ってきたぞ  
今日は世話になった、礼を言う  
じゃ、俺は違う国に行く  
また逢えたら逢おう」

「お主ちょっと待て  
モノロフも一緒に連れて行ってみないか？  
ものすごいお主に懐いているのでな」

はあ……

「…断つてもついてきそうだから、別にいい」

「そうか、良かったなモノロフ」

だが、聞くことが1つある

「モノロフ、俺の弟になるか？」

「がうがうー!!」

めちゃくちゃうなずきやがった

「そうか、今からお前は俺の2番目の弟だ  
じゃ、行くぞ」

次の国はどっちに行くべきか？



## 第6話（後書き）

DTの所、段的に間違っているところもありますが、ツッコまない  
てください。

ジユラックは私的に好きな部族なのでめちゃくちや出したかったの  
で出しました。

『火の塔』で何していたか？いつか分かるはずです！  
カンのいい人はもう分かっているかもしれませぬね！

感想お待ちしています。

## キャラ設定(前書き)

今更ですが、キャラ設定です。  
完璧に忘れていました！

## キャラ設定

ルア 役職 龍使い 性別 男

年齢 15歳

身長 165cm

体重 測定不可

(武器等を服の中に入れていたため  
時々入れすぎた時、体重計が壊れる)

容姿 髪を膝まで伸ばしている、髪はストレートで銀髪

(髪のをとても大事にしている、それ故、質はとても良く、  
シットリサラサラ)

髪のが傷まないようにとても気を付けている

シャンプーやリンスを調べつくし、1番気に入ったものを  
今使っている

新商品が出た時点で買いに行きその日で調べる

今使っているシャンプー、リンスは、ブルーアイズシャン  
プー、リンス

キャッチコピーは『ふうん、これを使い、 強靱！無敵！  
最強！となるのだ！』

髪の毛の先はレッドアイズシャンプー、リンスを使っている

次の新商品はギャラクシーアイズシャンプー、リンス

カレンダーに書き込んでいる

店のお得意様になっていたりする)

顔は普通、目の色は赤

(普通にしていればかつこいい系に入っているが、不機嫌顔なので減点されている)

銀髪ロン毛に似合う顔)

ダルクのような感じの体型

服 服は霊使いのコート(ベビーが入れるように中は大きめのポケットを付けた)

白Tシャツの上にフード付きの黒パーカを着て上と下を開けている

足にポケットがついている黒色の長ズボン、白ベルトを付けている

ファー尻尾(確かこんな名前:だっけ?)の色は透明

(光の反射で白に見える時がある)

ダルクと同じように、黒ベルトを斜めにつけ小物入れを付けている

その他 頭もよく、運動神経もいいという才色兼備な少年

だが、人付き合いは苦手な様子

ヒータ曰く、ツンデレ

ムカつくので言われたら睨む

顔はエリア曰く不機嫌顔ですが、

ベビーやモノロフは弟なのでふつつ、いや機嫌よく話している

ウインなどは無愛想に接しています

(大半の人には無愛想、無愛想の時は『…』を最初につきます

たまに普通の顔で話す人がいます、

恐らく本能的に馬が合うと感じたのでしよう)

剣を主に使うが、  
ランスはもちろん斧など武器庫の中にあるものは全てマス  
ターした

だが、剣が1番使いやすいそう  
弓も使うが、本人曰く『…あれは必要時にしか使わない』  
だそう

基本的に左の腕に剣（魔術加工済み）を忍ばせている  
杖は刀となり（魔術加工済み）鞘は邪魔になるので

『術式35番 武器召喚術・アームズ・ホール』を使い、  
武器庫にしまい

戦い後にまた取り出して杖にもどす

エンディミオン大学を5歳で入学、9歳で卒業している

（その世界で1番難しいと言われる大学  
龍使いというのを隠して入学、  
父親が入学をすすめたが、入学後この世から去った）

父親は魔術師に殺され、母親は生まれた時に死んだと……  
親はいない

リツとは何らかの関係がある

スビードラゴン 通称 スビー

容姿 ドラゴン

その他 ルアと生まれた時からの付き合い

リツとも知り合いである  
ルアの使い魔  
ルアの弟

ジュラック・モノロフ 通称 モノロフ

容姿 炎をともした恐竜

その他 非常に人懐っこい  
それ故ルアについていくことになった  
そしてルアの弟になった

## キャラ設定（後書き）

こんな感じですかね？

感想お待ちしております。

## 第7話（前書き）

本当にこの小説どこに向かっていているのやら……  
書いている自分でも分からない……  
初期設定からだいぶ離れている……  
大丈夫かな？



## 第7話

視点 ルア

はあ、やっと火の国から地の国へ来れた  
ここ何もないな

砂漠が広がっているだけだし

まあ、砂丘がないから『地の塔』の場所をすぐ見つけられたな  
行くか……

……

……

……

地の塔か

扉の上に三首の生き物の模様があるな

まあ、中に何がいるかもう分かったが

「ベビーとモノロフ、ここで待っておいでくれ」

干しレンガでできた塔か……崩れないよな

……

……

「……やっぱりこいつか  
早く終わらせて、光の国に行くか」

……  
……  
……

「待たせたな、じゃ行くか」

「「がうがうー!」「」」

氷結界の封印龍が封印をとかれて、暴走しているのは本当っぽいな  
火の国にはジュラックがいたが、ここには誰もいない  
その上、何もなし  
あるのは砂漠と地の塔くらいだしな  
光の国に行くと誰かいるかもなし

……  
……

……

地の国を出て光の国に着いたと……本当に何もなかったな……  
ただ単に逢わなかっただけか？

はあ、いいか

それよりも宿を探さないとな  
野宿だと髪が痛む

ん？向こうの方に何かあるな行ってみるか

……

……

……

はあ、『ヴァイロンの宿！！泊まれば運が上がるかもよ！！』って  
いう名かよ……

ちゃんとした宿名を付けろよ……

しかもなんかウサンくさいし……

はあ、他に宿なさそうだな、ここにするか……

「いらっしやい！！おっ、兄ちゃん！！ここに泊まるのかい？  
今なら1泊5000万円の所、1500円にするぜ！！」

なんだか全体的に丸型の機械みたいな天使だな

頭にハチマキしているからどっかの居酒屋にいそつだな  
てか、大丈夫かここ

1泊5000万円ってどんな超高級宿だ  
ここ見た目すごいボロイのだが

「…魔術師1人、ドラゴン1匹、恐竜1匹が1泊泊まりたいのだが、  
いけるか？」

「いいよ、いいよ！！兄ちゃんだけに特別大サービス！！  
全員で500円にしておくよ！！」

それからこの契約書にサインすると君もヴァイロンの仲間入り！！  
どう？してみない？サインすれば無料にするぜ！！」

…… 本当にここ…… いやこいつ大丈夫か？

頭絶対いかれているだろ

それからヴァイロンってなんだ？

ジュラックみたいに部族の名前か？

そんなに数すくないのかヴァイロン

そこまでしないと集まらないのか？

「…サインはしない、ほら500円だ  
部屋に案内してもらえるか」

「サインは明日に気が向いたらしたらいいぜ！！  
年中無休でサイン設置場を開けているからな！！  
で部屋はこつちだ！！ついてきな！！」

サイン設置場だけ年中無休なのかよ

ここのロビーが開きっぱなしって言う事なのか？  
考えているうちに着いたし

「ここが君たちの部屋だ!!」

……こいつ正気か？

ここが5000円なのか？

……5000万円は妥当だな

外はボロイくせになぜ中はきれいなんだ？

外のボロさはアンティークっぽくしたのか？

「…案内してくれた事に礼をいう

カギはチェックアウトの時に返せばいいのか？」

「おう、その時に俺に帰してくれたらいいからな!!」

食事はどうするか？もう持ってこようか？」

ベビーたちは腹が減ってそうだ

俺も減っているから持ってきてもらうか

「…今からでいい」

ここのオーナーらしき奴は『おう!!楽しみにしておけ!!』と出て行った

この部屋だったら髪も痛むことはなさそうだ

「兄ちゃん!!持ってきたぜ!!」

早くないか？

……ここ本当に5000円でいいのか？

新鮮そうで豪華な刺身

そして、その刺身と同じで新鮮そうな色々な魚の切り身がある

恐らくナベ用だろう

真ん中にナベを置いてあるあたりあっているだろうな  
そして、ごはんも魚が入った味噌汁か……  
どうでもいいが魚多くないか？

「食べ終わったら呼んでくれな！！  
片づけにくるからな！！」

といい丸い奴は出て行った

ここ、運営大丈夫か？

まあいいか、さっさと飯を食おう

うまいな……

ベビーたちもつまそうに食っているし

この魚なんて言う魚だ？

ここでしか取れない魚とかか？

こんなの食べたことないが……まあいいか

……

……

……

とりあえず食い終わったから丸い奴を呼ぶか

「兄ちゃん！！呼んだか？」

……はあ、呼ぶ前にきやがったし……  
細かい事を気にしたら負けか……

「… 食い終わったから片付けを頼む」

「あいよー!!」

すぐに片付いたし……

こいつ妙なスキルあるな

「… オーナー、風呂はどこにある？」

後で入りに行くから教えて欲しいのだが」

「ここを出て右をまっすぐ着いたらオメガ湯っていう温泉がある!!  
ウチの自慢の温泉だ!! 後でって言わずすぐに入って来るがいい!  
!」

まあ、いいか

今から入りに行くでしょう

「ベビー、モノロフ行くぞ」

「「がうがうー!!」」

こいつら息合っているな

いつの間にか仲良くなったのか

……

……

……温泉の壁に『オメガ様サイコー!! キャッコイイ!!』などと書いているのだが……

気のせいだな、気のせいとしておこう

まあ、そんな事よりこのシャンプー、リンスはどこのだ?

……ふーん、ヴァイロンシャンプー、リンスか……

どんなものか……ん? 注意事項?

『このシャンプー、リンスを使うと頭がつるつるとなります。』

ヴァイロンに入るなら、髪の毛などいらぬ!! ハゲてしまえ!!』

……使うのは止めておこう

2行目注意事項じゃなく、ただ単に恨みの類だな

はあ、ブルーアイズシャンプー、リンスとレッドアイズシャンプー、リンスを持ってきておいて良かった

早くギャラクシーアイズシャンプー、リンスが発売してほしいものだ

……  
……

「……オーナー、ドライヤーは無いのか?」



「今持つてくるから待つてな兄ちゃん!!」

といい、ほんの5秒くらいで持つてくるこいつはなんなんだ

「スイッチが1、2、3となつていてな!!」

1が低温、2が高温、3が超高温だ!!

気を付けて使つてな!!

それで頭火傷した客が後を絶たないからな!!」

『…そんなドライヤー捨ててしまえ』と心底思ったのは気のせいではないだろう

まあ、低温を使うから関係無いが

………

………

………

髪の毛の手入れはこのくらいでいいか

じゃ、寝よう

オーナーが温泉に行つていている間に布団を敷いていたそうだ

ちゃんときれいなおいているあたりが流石と言うところだろう

「モノロフ、その炎消すことできないのか？」

ためしに聞いてみたところ、すでに消して寝ていた

じゃ、俺も寝るか

……  
……  
……

はあ、目覚めたらすぐオーナ来て、布団をどっかに持っていったし  
あいつの行動力早すぎるだろ

まあ、いいか

くっ、アホ毛が立ったし……戻ったな

「ベビー、モノロフそろそろ出れるか？」

ベビーとモノロフはじゃれているし……

朝の髪の毛の手入れする前にも同じ光景を見たのだが……ずっとや  
っていたのか？

まあいいか、声をかけたらやめて来たから行くとするか

……  
……  
……

「…オーナー、チェックアウトに来た  
思っていた以上の暮らしだった」

「そうだろ！！客を満足させるのが俺の仕事だからな！！  
当たり前だろ！！」

「…オーナー、1つ聞きたいことがあるのだが  
『光の塔』はどこにあるか知っているか？」

「ああ、知っているさ！！」

「この道があるだろ、それを真っ直ぐ行くとあるぜ！！」

「…そうか、礼をいう」

「おう！また来てくれよな！！」

もう二度と来ないだろうな

旧国にもこの旅が終われば来ないつもりだしな

あ、結局ヴァイロンってなんだったんだ？

まあいいか

「ベビー、モノロフ、行くぞ」

………

………

………

意外と近かったな  
扉の上には……よくわからんな、あの模様なんだ？  
まあいだろう、光の塔だ  
あいつしかないだろう

「ベビー、モノロフ、待っといてくれ  
時間がかかるかもしれん」

……  
……  
……

「……はあ、やっぱりこいつかよ  
今までの奴より厄介だ  
はあ、やれるだけやるか」

……準備は終わり

「……目覚めよ！！光、最強の……！！」

さあ、ここからか……

……

……  
……

「終わったぞ  
じゃ、行くか」

「「がう？」」

ベビーとモノロフが心配してきた  
恐らく、塔の外にも響いたのだろう  
厄介な相手だったからな  
まあ、成功したから何とかだったが

「大丈夫だ、成功した  
だが、ここにずっといるのは危険かもしれない  
だから次の国……水の国に行くぞ」

ベビーたちも分かったようで、早く行くことに了承した  
はあ、水の国か……

氷結界の封印龍に出会いたくないな  
龍使いだ、今のあいづらはココロを開かないかもしれないからな

## 第7話（後書き）

地の国は氷結界の封印龍の餌食に1番あったので誰も出てきません  
ジエムを出そうかと思っただのですが

出てくる機会を作れないのですよね……

考えたのが、ジエムがルアを攻撃するというのですが、  
ジエムは余り戦いを好まないのでボツとなりました

ヴァイロンの宿のオーナーはヴァイロン・スフィアです

なんとなくかわいかったので出してみました

光属性で他にしようとしたのですが、

ワーム、魔轟神っていう危険な部族なのでヴァイロンとなりました

感想お待ちしております。

第8話（前書き）

旧国編も折り返しにきました！

## 第8話

視点 ルア

くっ、水の国に入ってすぐに氷結界の封印龍に見つかってしまおうとは  
そうじゃなければ今頃全力疾走で逃げてないのにな

やはり、運ないな……

こいつは封印龍の1体の……グングニールか？

ブリューナクは海竜、トリシューラは3つの頭があるから、この2  
体は違うな

やはり、グングニールか

どうやってまくか……

って、ブリューナクとトリシューラも来たし……

はあ、泣きっ面に蜂だ……

ベビーとモノロフはもう限界そうだ

くっ、ここまでか

「お兄ちゃんこっち！！はやく！！」

なんだか、白い長髪のカギに呼ばれたのだが  
くっ、封印龍が本格的に攻撃を開始しだした  
仕方ない、あいつの所に行くか

「ベビー、モノロフ行くぞ」

ちっ、グングニールが邪魔しに来たな

「…龍使いとして命じる

そこをどけ！！」



グングニールは退いたな

今のは龍使いの力と全く関係ないのだが  
ただ単に言っただけで退くとは

こいつ気が弱いのか？

まあ、退いたからガキの所に着けたのだが

何故こんなところにいるのかは後で聞くとしよう

今は俺の後ろで攻撃しているトリシューラをどうにかしないとな  
バカ

「おい、お前

ベビーとモノロフを先に連れていけ

後で追いつく」

「じゃ、この道をまっすぐ行くから

すぐ追いついてね」

あいつらは行ったな

はあ、龍相手にあまり戦いたくないのだが

この場合はそんな事言ってられないな

「…光霊術 - 光の護封剣」

光の剣が出てきて、封印龍の周りを囲ったな

これであいつらはしばらくの間動けない

だが、もう一つ術をかけておいた方がいいな

「…闇霊術 - 悪夢の鉄檻」

鉄でできた檻を護封剣の上からかけておく

俺が入りそうになっただけだから少し危なかったな

あいつらと共に中にいれば命が何個もあっても足りないぞ  
1、2体なら何とかなるが3体だからな  
さて、追いかけるとするか

……  
……  
……

やっと追いついたか

封印龍で結構手間をとっていたっばいな

まあ、この道が真っ直ぐで少しありがたかったな  
後ろにいる封印龍を確認できて、前にいるガキとベビーらを確認で  
きる

まあ、封印龍がああ術から抜け出したら、すぐ追いつかれるが

「おい、どこに向かっているんだ」

「ボクの隠れ家だよ  
後もう少しだからね

ほら、ここー!!」

……何もないのだが

ああ、俺の家と同じように地下にあるのか  
こいつも開けているし

「あの子たちがどこか行くまでここに隠れていよ

ボク、お兄ちゃんと話がしたいからね」

……こいつと話す事全くないのだが

まあ、封印龍がどこかに行くまではここにいるのはいいだろう  
道を左にまがったから封印龍からは見られてないし

ベビーらとガキはもう入ったな

じゃ、俺も入るとするか

……

……

……

入ったのはいいが、狭くないか？

まあ、少しの間隠れるだけだ

「そついえばお前誰だ？」

「ボク？ボクは氷結界の破術師だよ

お兄ちゃんは？」

……それが名前かよ

まあいいか、封印龍がどこかに行けばもう会わないんだ

「ルアだ」

術が今外されたな

あいつらは今頃、俺らがどこに行ったか探しているはずだろうな

「そうそう、お兄ちゃんってどこから来たの？」

「新国だ

で、火の国、地の国、光の国をまわってきた」

「そうなんだ!!」

何こいつ興奮しているんだ？

「じゃじゃ、ボク以外の氷結界にあった？

ボクみんなを探しているんだ

封印龍が暴走したからみんなと離ればなれになっちゃったから」

氷結界を探すためにここに残り

封印龍に見つからないようにしていたのか

「残念な事に1人もあっていない」

「そう……」

なんだか飼い主とはぐれた子犬みたいになっている

そろそろ封印龍が遠くに言った頃だろう

心配も感じ取れないからな

「俺はそろそろ行く」

「どこに行くの？」

「まずは『水の塔』に行き、そのあと風の国だ」

……何故こんな奴に説明しているのやら  
まあ、いいか、世話になっただ

「じゃボクも連れて行ってよ!!」

ここにずっといても誰にも合わないかもしれないからね!!」

……飼い主を見つけた子犬のような目で見られたのだが  
はあ、どうするか

「はあ、まあいいだろう」

……

……

……

「破術師、モノロフに乗れ  
そっちの方が早い」

こいつ結構歩く速さ遅いからな  
モノロフに乗ればちょうどいいだろう

「モノロフ、破術師が乗っている間、炎を消しておいてくれ」

さあ、ここからどうするか

破術師は水の塔の場所は知らないからな  
地道に探すしかないか  
つて

「ブリユーナクに見つかった」

はあ、こんな時にブリユーナクと合うことになるとか

「ベビー、憑依装着だ」

ベビーを旧国にきた時みたいに、俺の魔力を憑依させ巨大化させる  
顔も大人っぽくなっているからな  
力も大きくなっているのだろう

「モノロフ、破術師さつさと乗れ  
ブリユーナクが攻撃する動きに入っている

乗ったな、ベビーでできるだけ早く」

ベビーが早く飛んだから何とかブリユーナクの氷弾に当たらずにす  
んだ

「ベビー、このまま真っ直ぐだ

後ろにいるブリユーナク……封印龍らは俺に任せて気にせず飛べ」

いつの間にかグングニールとトリシューラが来ていたし  
はあ、あまり使いたくなかったが使うしかないか……

「…術式35番 武器召喚術・アームズ・ホール」

左手の近くにできたワームホールから、弓を取り出す  
はあ、魔力消費量を抑えるか

「破術師、前に行け  
それで、前の様子を教えてくれ」

破術師を前に行かしたから、僕はベビーの尾の先端に行くか  
はあ、厄介だ  
氷壁が両脇にあるな、これを使うか

風の波動をコントロールし、風の矢を作る  
簡単そうに結構難しんだよな  
他の波動を混じらせればダメだからな  
と考えているうちにできたな

「…ギヤラドボルグ!!」

真名を解放し、左側の氷壁に当てて崩す  
それが丁度、封印龍らの目の前に落ちる  
封印龍があわてている間に

「…ギヤラドボルグ!!」

2発目を右側の氷壁に当て、封印龍の目の前にある氷の山の上に落  
とす

これで時間を稼ぐことができるだろう

「お兄ちゃん、頭を下げて!!」

破術師の言う通りに下げると

ちょうどさっきまで頭があったところにも木の枝があった  
破術師が言ってくれなければ当たっていただろう

「破術師、礼を言う」

くっ、封印龍が追ってきたか

ん？追うのを止めた？

何故だ？

「破術師、ここには何がある？」

「えーと、確かリチュアの領域かな」

リチュアの領域に入ったから追うのを止めたのか

封印龍が縄張りとしているのは氷結界の里だけだからか

「ベビーもすごい

ありがとうな」

ベビーを止めさせて、憑依装着のために使った魔力を返してもらおう  
リチュアか……どんな部族だ

「破術師、リチュアってどんな部族なんだ？」

「確か、儀式を中心に活動しているのだったかな？

この前、ガスタへ侵攻をしたらしいけど

インヴェルズっていうのがリチュアやガスタを含む5つの部族に侵  
攻したから

ガスタへの侵攻を止め、侵攻された部族の1つであるヴァイロンと  
共に戦ったとか



その中にガスタもいて、今は仲良くなっているよ  
リチュアとガスタが手をあわし、イビリチュア・メロウガイストが  
生まれたのだって」

「とりあえず、リチュアに会いに行くか」

はあ、どこにいるのやら

## 第8話（後書き）

中途半端で終わりです

1・氷結界の破術師が登場！！

2・ルアと共に行動をする！！

あれ？これって仲間GETだぜ！！の旅じゃないよね……

まあ、ルアは破術師には普通に話しています

髪の毛が似ていたからでしょう

ギャラドボルグという名前はギャラクシーとカラドボルグからとって作りました

矢は自身の波動で生成します

感想お待ちしています

## 第9話（前書き）

旅行に行っていて最近更新ができませんでした。

## 第9話

視点 ルア

リチュアの領域に来たが、だれもいないが……

水の塔の手がかりを探さないといけないのにな

はあ、水の塔のある場所が氷結界の封印龍の領域に入らなければいいが

また封印龍に会うと危険だ

俺とベビー、モノロフだけなら何とかなるが、今は破術師がいるからな

こいつは氷結界の生き残りを探すという目的がある

その目的を潰したくない、だから安全にさせておきたい

「お兄ちゃん、どうしたの？」

考え事？さつきから浮かない顔をしているけど……」

はあ、こいつに心配されるとか

こいつがその原因というのにな

まあ、俺が連れて行くと決めたらから愚痴は言わないが

「ただ単に考え事だ

リチュアは今、危険な部族ではないのだから？お前がそのような事を言っていたが

だが、いきなり攻撃をしてくるやもしれん

その時の対処をどうするか考えていただけだ

それからモノロフに乗れ、お前歩くの遅いから」

「おいおい、俺らがいきなり攻撃するわけないだろ

まったく、俺らだって余り戦いを好まないんだ  
ガスタに侵攻したのだって、ただ資源を求めるために仕方ないこと  
だったんだぜ」

破術師がモノロフに乗ったのを見たのと同時に  
前から変な奴がやってきた

なんだあいつ？サメか？いやサメの顔をした人か？

体を見ると人型だしな

はあ、考えるの面倒だ

サメでいいか

「それから俺の事をキモサメや

キモイルカの親戚じゃね？

つて言つた奴に対しては手加減せず殴るからな」

「…そんな事興味ない

お前はリチュアの中の一人か？

話を聞くとそんな風に聞こえるが」

「ああそうだぜ！！」

俺はリチュアのエンジンの事アビスだ！！

リチュアのためにエンジンのように働いているんだぜ！！

リチュアの仲間にも過労死しないように心配されるくらい働いている  
んぜ！！」

「…あつそ

リチュアのエンジンだったら知っているか？

水の塔がどこにあるのか？」

「俺は重労働を基本としているから

情報はあまり知らないな

そういう事だったらヴァニティが知っているかもな

そいつはリチュアの里に今いるけど行くか？

俺は今から帰る所だからついてい来るなら今のうちだぜ!!」

ヴァニティ？英語の vanity か？

確か意味は無価値、無益、価値のないもの、無意味な事だったか？

そんな名前の奴が情報持っていると思えないが

今の所知ってそんな奴はそいつしかいないな

だが、リチュアの里だ

こいつの仲間がいるという事だ

俺らを襲うという事もある

こいつがそんな事をする奴じゃなさそうだが

第一印象で人を判断すれば痛い目にあうからな

強盗をするようじゃない奴が強盗をするとかあるからな

破術師がいるんだ、どうするか

「お兄ちゃん、どうする？

ボクは行ったほうがいいと思うけど」

こいつは行きたいのか？

「お前は行きたいのか？

そうだったら行くが、もしかしたらお前の仲間がそこにいるかもしれないからな」

そっというと破術師が僕の耳元に近づいてきた

「（ねえ、お兄ちゃんリチュアに行きたいけど

リチュアにいる間は念のためにボクが氷結界の者だって事を隠して

て」

リチュアと氷結界には何かあるのか？

場所的に近いしな

まあ、こいつがそういうならそうするか

だが、こいつの事なんて呼べばいいんだ？

『ガキ』でいいか

「…アビスだったか？

俺らもリチュアの里に行くから、連れて行ってくれ」

「あいよ！！じゃついて来いよ！！って言ってもすぐそこなんだがな歩いて2、3分だ

それからお前が心配しているかも知れないが

リチュアの奴らは里に訪問しに来た奴には襲わないから安心しろ

攻撃しに来た奴などは徹底的に攻撃するが

まあ、俺が説明するから大丈夫だと思うが、変な素振りをするとうるいかな

襲われたくなかったら変な素振りさえしなければ大丈夫だ

だからしない方がいいから気をつけるよ」

「…そうか、だったらしないように弟共とこのガキに守らせる

俺はする事はまずないからな

俺だって争い事は好きじゃない

自分の山にわいてくるアンデットバカ共を倒すのに争うくらいだな」

「ははっ、お前も大変だな

お前とは気が合いそうだ！！」

さあな、俺はそんな事は思わないが  
はあ、最近いろんな奴と関わる事が多くなったな  
こんな事が始まったのは、あいつら霊使いに会ってからか？  
いや、リツとカオルに会ってからかもしれないな  
ふっ、もうどっちでもいいか  
どっちもうるさい連中だからな

「そういえば、お前とお前の近くに  
子供のドラゴンと炎を灯した恐竜とお前に髪が似ている子は誰なん  
だ？」

「…言っただけじゃなかったか？すまなかったな  
俺はルアで、この子供のドラゴンは俺の弟の1人のベビー  
こっちの炎を灯した恐竜はモノロフ、2人目の弟だ  
でこいつは…旅の途中で出会い今は一緒に行動をしている奴だ」

こいつの名前考えた方がいいな  
リチュアの里で聞かれたら、氷結界の破術師って言わざるおえなく  
なるかもしれないしな  
まあ、それは歩きながら考えるとするか  
氷結界の破術師だから、氷結界と破術師から連想したものがいいか？

「へえ、ドラゴンと恐竜が弟って変わっているな！！」

「…本物の弟じゃないからな  
俺の親はちゃんとした人だからな  
ベビーもドラゴンから生まれ、モノロフも多分、恐竜から生まれた  
だろうな」

「お前のそのような嫌いじゃないぜ！！」



いや好きな方がもな!!」

一瞬、背筋に悪寒が走ったのだが

「まあ、恋愛的な好きじゃないから安心しろよ  
ただ性格が好きなだけだ

やっぱりお前とは気が合いそうだ!!」

はあ、そうか良かった

考えたら分かるが

恐らく知り合いにエリアがいるから悪寒が走ったのかもしれないな  
はあ、俺は同性愛にも兄弟愛にも興味はないんだ  
なのに何故知り合いはそんな奴らばかりなんだろうか

「着いたぜ!!」

ここがリチュアの里だ!!」

ここがリチュアの里か……

海と岩陰に隠れている小さな町っぽいな  
タコなどがいるからリチュアの里であっているっぽいな  
リチュアはこんな海の者が人型になっている部族なのか？

「アビツ君おかえり!!」

仕事をしてくれて助かるけど、余り無茶しないでね!!」

「エリアル嬢、ただいまつと!!」

それから、こんな所にいたら危ねーよ

ノエリアのババアの所かエミリア嬢の所にいとかねーと!!」

「だって、ノエリアは怖いし、エミリアはスピリットだし

だからここでみんなの帰りとかを見ているんだよ!!」

……こいつエリアじゃないのか？

いや、エリアと話し方が違う

それから、水の魔力の量は変わらなそうだが

こいつ中に邪悪な者がいそうな感じがする

こいつ何者だ？

他の奴らは海鮮者（適当に名付けたが）だがこいつは人だ  
リチュアの上の奴か？

「アビツ君、この人たち誰？」

エリアルだったよなこいつ

こつちに興味津々しつつ、殺気を放っているな  
ちよつとこいつ危ないぞ、いやだ**いぶ**危ないな

「こいつらはな、旅の者でリチュアの里に来た**い**つて言ったから連  
れてきたんだ

危険な奴らじゃない、安心できる奴らだ（ほら、エリアル嬢にご**挨**  
拶をしろ）」

エリアル嬢ってこいつ結構えらい立場そうだな

アビスに挨拶しろって急かされたからするか

アビスがああ言ったから殺気は少し緩んだが、完全には緩んでない  
からな

「…俺の名前はルアだ

このドラゴン**は**ベビー、恐竜はモノロフ、こいつらは俺の弟だ  
で、こいつは僕たちと今一緒に行動している**氷華**だ」  
ひょうか

氷華は当然破術師の事だ

氷破つてしようとしたが、言にくいから『破』を『華』にした  
こいつの性別は知らないがこの名前は別にどっちでも使おうと思え  
ば使えるだろ

女子の方が多いかもしれないが……

破術師が驚いた顔をしているが仕方ないだろうな

アビスがいたから打ち合わせができなかったし

「どうしたガキ？俺がお前の名前をいうのはそんなにおかしいのか？

（お前が氷結界の者とばれたら面倒だ

だから勝手に名付けた、リチュアにいただけでいい、この名前を使  
え）」

エリアルらにはれないように破術師に言う

破術師は分かったようだ

「お兄ちゃんはいつも、ガキっていうから驚いちゃったんだよ！！

（それと、氷結界には役職を与えられるだけだから

名前を付けられるのが初めてだったからね）」

なるほど、だから初めて会った時に氷結界の破術師と名乗ったのか  
氷結界はそのような部族か

はあ、おかげで名前を考えるとという面倒な事をやらされた

「へえ、そうなんだ

私はアビツ君が言ったようにエリアルだよ

よろしくね！」

殺気は消えたな

はあ、警戒するのは分かるが何故殺気を放つ？

リチュアがそのように教えているからか？  
はあ、考えるの面倒だ

「ああ、よろしくな」

「じゃ、俺はこいつらをヴァニティの所に連れて行くからな  
エリアル嬢、そこにいるなら気を付けてくれよ！」

はあ、破術師が氷結界とばれてないようだ

これからヴァニティの所に行くが、どのような奴か？  
情報を扱うという事だから上層部じゃないとうまく扱えないからな  
こう考えると人か？だが、エリアルだけが特別とすれば海鮮者か？  
はあ、会えば分かる事だ、今はこいつについていくか

.....

.....

.....

何やら会議室のような扉の前に来たが  
中から2人の話声が聞こえるな  
少なくとも2人がいるという事が  
アビスがノックをすると『いいぞ』と言われ入って行ったな  
俺もついて行くか

「アビスお帰り

この前壊れた外壁は治ったかい？」

「ああ、しつかり直してきたぜ！！」

それと、ガスタのウィングール殿がお越ししていたのですか！！」

「いやいや、そんなに恐縮する事はない

ただヴァニティと打ち合わせをしていただけだ」

ヴァニティは人だったか

なんだか厚そうな生地を着た青年か

で、アビスが敬語で話したのはウィングールか

ガスタと言っていたな

はあ、こいつは緑の生地を着たか

「アビス、その人達は？」

「お前に話をしに来た奴らだ

今は無理そうだから後でまた来る」

まあ、かつて敵どおしの奴らがこの部屋にいるんだ

どっちだってまだ完璧に信用したというわけではないだろうな

厄介ごとに巻き込まれるのはなれたが面倒だ

巻き込まれたくないから後で連れてきてもらうか

それとカードが散らばっているのは何故だ？

「いや、別にいい

もう話は終わってただ世間話をヴァニティとしていただけだ

私はイグルスが今ガスタの里から来るまでここにいるが

私を気にせずにヴァニティと話をすればいい」

世間話か

世間話をするという建前で、相手の中を探るのが一般常識だからな  
ウィンドールからすればもう少し探りたかったのかもしれないが  
あいつがもういいと言ったんだ、遠慮などしなくていいだろうな  
で、ウィンドールはカードの回収をそそくさとし出したな  
実は遊んでいたのじゃないのか？

「…そうか助かる

まだ名乗ってないからまずは名乗っておこう

俺はルア、このドラゴンがベビー、恐竜がモノロフ」

「で、ボクは氷華だよ！！」

最近自分の名前を言っていなかった事が多いからな

先に名乗っておいた方がいいだろう

で、このガキは何故自分から名乗りだした？

はあ、どうでもいいかそんな事

「私はヴァニティだ

リチュアでは情報を扱わせてもらっている

それと見ての通り、ガスタとのやり取りもやらせてもらっている

情報を聞きたいのならば私を訪ねればいい

リチュアの不利をなす事は教えないけどな！」

「私はウィンドールだ

ガスタの賢者をやっている

ガスタに用がある時は私を訪ねてくるといい」

ヴァニティが情報を扱っているのは自称でなければいいが

それとガスタは風の国にありそうだ、こいつから風の波動を感じる  
からな

水の塔を行った後に行くとするか

「で、私に用があつてわざわざ来たのだよね  
何の用だい？」

「…水の塔の場所を知っているか？  
アビスが知っているかもしれないと言つたから来たのだが」

「ああ知っているよ  
でもあそこは扉が開かないから行つても無駄だよ  
ただの観光目的だつたら意味は無くは無いけど」

「水の塔に行くのならば、私が住んでいる風の国にある風の塔にも  
行くのだから」

あそこも扉は開かない、他の塔も開かなかつたはずだ  
まあ、観光目的ならガスタを訪ねるがいい  
その時に教えてやる

ガスタは、リチュアと水の塔との延長線上にある  
すぐに見つかるはずだ、私は迎えが来たから帰るとする  
ヴァニティ、また今度話をしよう」

と言つてウィンダールはデカイ鳥に乗つて帰つて行つたが  
扉が開かないか…：親父のせいかな

多分、俺しか開かないようにしたのだからな  
はあ、観光目的と言つてさっさと教えてもらうか  
ここに長居はしたくないからな

明日までには風の国に着きたいからな  
で明後日に闇の国に行き

その日で家に戻れば例のアンデットが現れるまで余裕を持てる  
3日間だけ旧国に居た事だから、家に帰つた4日後に出てくるな

まあ、今は水の塔の場所を聞くとしよう

「…別に中に入れなくていいで、場所はどこだ？」

その後でガスタの里に行くという用事が出来てしまったからな早く行きたいから教えてくれないか？」

「場所は確か、この先に氷結界の里があるだろ  
そっちには行かずに、反対側の道を行くと見える  
ガスタへの道は、さっきウィンダールが言った通りだ」

「…そうか、礼を言う  
じゃ僕らは水の塔に向かうとする」

「そう、じゃまた来た時はよって来たらいい  
敵にならない限り、いつでも歓迎するよ!!」

「おう！俺も歓迎するからな!!  
次はゆっくり話をしようぜ!!」

「…ああ、よった時にな」

はあ、ヴァイロンの宿同様にここも もう来ないだろうな

.....  
.....  
.....



ここが水の塔か

他のと同様に扉の上に模様があるな、これは普通の模様だ  
で、この先がガスタの里と

はあ、今は昼くらいか

ガスタに着くには夕方になっているかもな

「ベビー、モノロフ、破術師はここで待っていてくれ  
すぐに終わらして来る」

「お兄ちゃんは何しに行くの？」

そういえばこいつにはまだ言ってなかったな

モノロフにはベビーが火の塔で待っている間に言ってくれたそうだが

「ここに親父が封印している者がいる  
それを解きに来ただけだ」

「封印したのを解いていいの!？」

「親父がそう遺書に書いたんだ

別にいいだろうな

じゃ行つて来る」

.....

.....

.....

「…はあ、こいつが目覚めれば封印龍も暴走をやめなければならぬ  
いだろうな

目覚めよ、水、最強の

」

……

……

……

「おい、早く行くぞ!!」

ここに居れば巻き込まれるぞ!!」

そう言つと全員が一斉にリチュアとは反対方向の風の国の方へ行つた  
破術師はモノロフに乗っているから大丈夫だろう  
はあ、封印龍が暴走しているから本格的に目覚めたら行くだろうな  
もうだいぶ走つたから巻き込まれる事はないな

「もう歩いていい

ちよつと、出て行つたからな」

後ろから青い流星が氷結界の里の所に行つた

俺の予想が当たつたな

ここまで非難しておいてよかった

元々、水の国の王だ、自分の領域で暴れている奴がいるのなら行く

のは当然だ

「水の塔から風の国は近いのか  
もう見えて来たな」

地図で念のために確かめたが  
水の塔の場所だと思われる所から風の国は近いな  
ガスタには夕方よりも早く着くかもな

「風の国には、いるかな？」

やっぱり水の国にはもういないよね  
リチュアがいるし、それに封印龍もいるし」

「そういえば、リチュアと氷結界は仲が悪いのか？」

「リチュアは氷結界が使わなかった力を使っつて教わったよ  
だから氷結界はリチュアには好感を持ってないのだから  
でも、リチュアは氷結界の事はどう思っているかは知らないよ」

氷結界が使わなかった力？まあ深追いを止めておこう  
こう言い回しをする事は言いたくないのか、知らないのかだろう

.....  
.....  
.....

「風の国に着いたな、ここはミスト・バレーか  
はあ、このまま真っ直ぐか……モノロフ、破術師を連れてあそこの  
陰に隠れてくれ」

風の国に着いた途端、前方から殺気が来たな

エリアルも殺気を放っていたが、あれの倍以上の殺気か  
しかも俺に向けているって、はあ、厄介事が起きそうだ……  
モノロフは岩陰に隠れたな、炎もちゃんと消してある  
だが、影が少し薄いからばれてしまいかも知れないな

「闇霊術 - 漆黒のトバリ」

闇を増やすために漆黒のトバリを使ったが上手くいったな  
トバリの中からは闇が見えないから、普通の景色だ  
だから危険を感知すればすぐに逃げられるだろう  
殺気が段々と近づいて来たな……

「モノロフ、破術師、何があっても絶対にそこを動くな  
俺がいいと言っただけだ」

前から風を切る音？

槍か……くっ、避けれないな

「…フローラル・シールド」

あらかじめコートに仕掛けておいたシールドを発動し  
コートでガードする  
そうすると、槍が弾けて落ちたが、元の持ち主がいると思われる方  
角に行ったな

こっちもガードした時にアームズ・ホールを発動し、槍を取り出した

「…いきなり攻撃とは結構なご挨拶だな」

「何故ここにいる、龍使い」

前から白いドラゴンに乗った白い戦士らしき者がこう言ったが

こいつ、俺が龍使いて何故分かる

こいつが白いドラゴンに乗っているからか？

ドラゴンに乗る部族は確かドラグニティだったか

昔に旧国の事を調べた時に氷結界の封印龍と共に書類から出てきた  
覚えがあるな

「…ここにいて何か悪いのか、ドラグニティ

貴様らは『竜の渓谷』に住んでいるのだろ、ミスト・バレーの事は  
関係ないと思うが」

「この旧国は昔から我々ドラグニティが住んでいるんだ

だから我々が旧国を管理していいと思うが

我々の旧国に貴様がいるのは悪いに決まっているだろ

貴様ら、龍使いがこの世界の得となるか」

「…ここに昔からいるから管理していいだと

ふっ、戯言の限度を超えたな

『お前らが旧国を管理する』とは傑作だ

管理する？ならば戦争をもっとこんなひどくなるわけないだろ

何故、三体目の氷結界の龍の解放を許した？

これがお前らの管理の仕方か？

管理を適当にしすぎるだろ、これで管理をする権利をとれるとは思  
えないな

龍使いがこの世界の得とならないのもお前らが決める話ではない」

「くつ貴様、言わせておけば好き勝手言いやがって」

「…俺の言ったことが何か間違っているか？  
管理する奴が適した奴じゃないとお前らがしたみたいな事が起きる  
だから昔から住んでいる奴がなるといふのは間違いだ」

『上に立つ奴が力のある奴じゃないとならないのと同じだ』とも付  
け足した

まあ、人徳も必要だけどな  
そついう点なら、俺は管理できないし上、にも立てないか  
まあ、する気が全くないからいいが

「くつ、ならば我が貴様より力がある事を証明し  
貴様の上に立ち、ここから追い返してやる」

「…はあ、どうしてそうなる」

「白き魔槍・ゲイボルクが貴様を討つ！！」

くつ、持っている槍を所構わずに投げやがって  
このままじゃあいつらに当たるのも時間の問題だ  
無駄な争いは嫌いだが仕方ないな

「ベビー、憑依装着」

ベビーに俺の魔力を憑依させ、成長させる  
これで戦う場所を互いに空で殺りあえる

「…槍の使い方が下手だ

これで何故ナイトの称号を持っている事やら」

そういい、槍をこいつの胸元に入れようとしたがこいつが乗っているドラゴンが危険を感知しその場から移動し、かわされた

ドラゴンのおかげで何とかなっているな  
そうじゃないとこいつはすぐに殺されていただろうな

「貴様もドラゴンに乗って戦いができるだ  
だが、こういう戦場では我々の方が熟知しているはずだ、問題ないな」

このままじゃ拉致があかないな  
こいつはドラゴンに乗りながらの戦いが慣れているがこっちはこれが初めてだからな  
長期戦になればこっちの負けが確実だ

「そこだ!!!」

そっぴい槍を投げてきた  
かわせるな……ちっ、そこにはあいつらが

「…くっ、着替えがあるから大丈夫か」

槍が腹に刺さり、服が血に染まった  
槍が腹から抜け出してこいつの手に戻る動作をしたから、傷口が更に開いたな

「ふっ、この程度も避けられないとわな  
貴様より我々の方が強いな」

言われても仕方ないな

腹から血が大量に出ているのが服越しからでも分かる状態だしな  
ちっ、クズのような状態だ

「お、お兄ちゃん！危ないよ！もう止めて！！」

「がうがう！！」

あいつら、出てくるなと言ったのに何故出てくる  
ここは戦場だぞ

「ほお、仲間を守るために自身を盾にするとはな

いい物を発見した

あれを人質とするとしよう

これも立派な戦術だ」

こいつ……

頭の中のどこかが切れた音が聞こえたが、気のせいだろう

僕がこんな奴相手にキレルわけがないな

普通だったら

「…そいつらに手を出してみろ！！

お前らを……殺す」

何故、こんなに殺意が出るのだろうか

何故、こんなに頭は冷静でいるのに体は熱くなっているのだろうか  
何故、いつの間にかアームズ・ホールを開き、弓を取り出している  
のだろうか

何故、『無』で作った矢が出来て、手にあるのだろうか



何故……もういい、こいつは警告を守らずに俺の横を通り過ぎようとしている

もう、殺るしかないな

「ははっ、そんな体じゃ我々を止められない  
無駄なあがきだ!!」

「…儂く散れ  
ギヤラドボルグ？」

無色透明な矢が見事にこいつの胸に突き刺さり、貫いた  
そして惨めに落ちていった

胸の真ん中に円形の穴を抱えて

白いドラゴンは……そいつのもとに行つたな

あいつは人質を取る事に少し反対していたっばいが、結局は賛成し、  
行つたからな

同情はいらないだろ

くっ、？やはり体への反動が強い、魔力を普通のより倍以上使う  
からか

腹からの大量出血の上にこれを使ってしまったからな

これはずっと前に考えて作つたが今まで使う事がなかったからな

これが初めてとなったが、失敗せずにすんでよかった

はあ、意識の底に墮ちそうだ

「ベビー、あいつらのもとに下ろしてくれ」

ベビーはそれに従い、地上に降りたが、なかなか憑依装着を解除し  
ない

「俺は大丈夫だ、だから解除してもいい」

そう言うと、渋々だが解除してくれた

はあ、服が結構汚れている

髪が汚れてないからいいとするか

「おい、お前から何故出てきた

俺があいつを殺らなければ、お前らが危険な目に会っていたかも知れないんだぞ

そういう事分かっているのか」

「ごめんなさい」

「がうがう」

はあ、本気で謝っているようだからもういいか

「はあ、次はちゃんと守れよ」

くっ、あいつらの前だから普通のように話していたが  
そろそろヤバいな

自己治療の魔術をかけておくべきだったな

はあ、魔力の量を調べる術を中心にしないべきだったか？

まあ、魔力の量を調べるのは結構役立つているからいいとするか  
だが、この傷はどうするか

ガスタまで、体が持つか

いや、無理かもな

そんな事より、白いドラゴンがゲイボルグの死体を運んでいる  
他のドラグニティに報告するのか？

……来た方向と違う方向に行っている

竜の渓谷はあいつらが来た方向だから、仲間に報告する可能性が低

くなつたが

「はあ、ドラグニティとは元々仲が悪いようだったが更に悪くなつただろうな」

「行くぞ、ガスタの里には夕方までには着きたい夜になると何があるか分からなくなるからな」

そう言つて歩きだすと、俺の後についてくる

後ろだからこの表情や顔色を見られる事はないだろうな  
はあ、みつともない姿だ

出来るだけ普通を装つていよう  
恥ずかしいからな

「モノロフ、とりあえず炎は消しておけ

背中に乗っている破術師が熱いだろうからな  
それから、それを見た奴が襲ってくるかも知れない」

この状態なら戦えないぞ

一方的に攻撃をされるのを黙って受ける事になる  
たのむから出てくるなよ

ちよつと足が動かなくなってきたが、まだ大丈夫だろう  
はあ、ガスタの里はまだかよ

憑依装着をして、ベビーに乗って行くと早く着くが  
あれは発動時に魔力を結構使うから余り使いたくない  
時間に比例して足らなくなつたら僕の魔力を食うし  
それに今はそれをするだけの十分な魔力がないからな  
はあ、結局歩きしかないか……

「お兄ちゃん、大丈夫？」

「ダイジョウブダ、モンドイナイ」

「片言になっているけど!!」

「キノセイダ」

こんな事で弱音をあげたら、親父に笑われる

だが、さすがにヤバいな

親父は『治』の魔術を使えるから、これくらいは何ともないが  
俺は使えないからな

そろそろ考えるのも止めようか、いや、止めたら体の変化に気づか  
ずに倒れるかもな

はあ、面倒だ

.....

.....

.....

やっとガスタの里らしき所に着いたな

違ってくてもここで泊らさせて貰うか

「やあ、待っていたよ、ルア」

ウィンダールか

じゃ、ここはガスタの里であっているのか

..... 風景がウィンダールから地面になっただと？

はあ、とうとう倒れてしまったか  
早く起きないと髪が汚れるし笑われる  
って、体が動かない  
なんだか、騒いでいるな  
だけど、騒ぎ声が遠くに聞こえる  
ははっ、ベビーとモノロフ、破術師が大慌てで近づいて来たな  
何を言っているんだ？聞こえないな  
はあ、こんなに頭は動くのに体が動かないって、なんだか…さい…  
あ…く…D…

……

……

……

……「ここはどこだ？」

はあ、ベッドにいつの間に寝ていたか  
薬品臭い、そんな事はどうでもいいか、起きるとしよう

「くっ、はあ、そいえば腹に傷があったな  
それで、ガスタの里に着いた途端、倒れたのだったな」

じゃ、ここは病院的な所か  
薬品臭いし、腹に包帯を巻いている所を見るとそうであっているだ  
ろう

はあ、こうはなりたくなかったのにな

「起きましたか？」

動きたいのかもしれませんが、ゆっくり横になっていてください  
まだ傷口が完治していませんので」

緑の髪のノロマそうな顔の奴にそう言われ横にさせられた

包帯が赤くにじんだから仕方ない

言い訳をして、出ていけないな

窓越しで見るともう真っ暗だ

はあ、風の塔の場所を聞くのは明日にしようか

「…おい、俺の連れはどこにいる？」

何か変な事をしていたら、許さないからな」

「大丈夫ですよ

お連れさんは今、ウィンドールさんが案内した部屋にいるはずですよ」

「…そうか、なら良かった

それから、頭を洗いたいのだが」

「我慢してください」

「…少しでいい、洗いたいのだが」

「我慢してください」

「…頼む」

「我慢してください」

「…ほんの少しでいい」

「我慢してください」

「…こいつ、ちっ、仕方ない

明日、トリートメントをすれば大丈夫か？

髪が傷んでいる所はなさそうだが、念には念をした方がいいだろう

「私の名前を名乗ってませんでしたね

私はカーム、ガスタの静寂です

あなたはルアさんですよね？」

「…ああ、合っている」

「それではルアさん、あなたは何故このような傷を負っていたのですか？」

「はあ、医者かこいつ？

ここは病院っぽいからな

そこにいるという事は、医者かナースくらいだろうな

はあ、なんと報告したのか……

「…ただの傷だ」

「ただの傷でこんなにひどくなるわけないでしょ」

くっ、ノロマそうなくせに……

「…はあ、ただ槍が腹に入って、抜けただけだ」

「どうして、槍が？」

「…戦いに巻き込まれたからな」

「相手は誰だったのですか？」

「……はあ、ドラグニティと答えてもダメだし  
ゲイボルクとも答えたらダメだし」

「…さあ、知らないな、相手が名乗らなかったからな」

「そうですか」

「…いつここから出られる？  
早く出たいのだが」

「ここから出るには傷が完治するまで許しません  
後3日くらいで大丈夫でしょう」

「…長い、もつと短くできないのか  
ただの傷だぞ」

「これでも結構短くしています  
あなたの傷はとても深いので、普通ならもつと時間がかかるのですが、この薬草がよく効いているせいか、効き目が出ているのです  
なので、この調子でいくと3日なのです」

そういい、いかにも薬草と分かるような草を見せてきた  
くっ、こっちには後、風の塔と闇の塔が残っているというのにな  
風の塔にはウィンドールに聞こえるとして



闇の塔は闇の国にあるから、できるだけ昼間に行きたい  
闇に潜んでいる者が多そうだからな

「では、消灯の時間なので電気を消しますよ  
おやすみなさい」

はあ、カームは出て行ったが、どうするか  
このままじゃ余裕が余りない  
抜け出すか

明日の早朝にベビーたちと合流しないと  
じゃ、早いめに寝るか

……  
……  
……

くっ、逃げ出そうと思っていたのにな  
カームめ、朝早く着やがって  
その後例の薬草を切り刻んで作った塗り薬をつけられた  
傷は早く治って欲しいが、あれは傷口をえぐるような痛みだ  
本当にあれで治るのか？むしろ、ひどくなっていつているような気  
がするが……

「元気そうだな  
寝ていると思っていたのだが、話ができそうで良かった」

「…ウインダールか  
風の塔はどこにある」

「まあそれはおいておこう  
今話したら逃げ出すかも知れないからな  
ここは安全だから安心するがよい  
連れの者は後で来るだろう」

ちっ、見破られたか

ガスタ以外には知ってそんな奴はドラグニティしか知らない  
しかもそいつらは龍使いとは仲が悪そうだから教えないだろうな  
はあ、暇だし話を何かしておくか

「…リチュアと何の打ち合わせをしていたんだ」

「それは…まあいいだろう

ヴァニティも別に言ってもいいと思うからな

リチュアとは資源の取引の打ち合わせをしていただけだ

我々ガスタはこの森でとれる資源を出し

リチュアは近くの海で取れる資源との交換をな

リチュアは時々だが、超古深海王シーラカンスを出してくれるのだ

それは意外と珍味なんだ、私の娘が気に入っているほどな」

なるほどな、ここは余り魚を捕れなさそうだ

で、リチュアは魚以外はとれなさそうだからな

それで取引が成立しているのか

そうじゃなかったらかつてが敵だった奴らがこんなに仲良さげにな  
るわけがない

で、こいつは父親なのか

娘がいると言っていたからな

じゃ、カームはそいつの母親か姉妹なのか？それか関係ない奴か  
年齢を聞くと分かると思うが

『女性に年齢とスリーサイズを聞くと酷い目に会う』

というのが親父の口癖だったから、聞くのは止めておこう  
聞く気はないが、こんな状態で酷い目に会えば余計に退院できなく  
なる

「…世間話の方は何を話していたんだ？」

「それはな、ヴァニティが私の娘よりエリアルの方が可愛いと言っ  
んだ

それで、私がウィンダのいいところを言うと

ヴァニティも負けずに言ってきたんだ

それが原因となりデュエルをし

1勝1敗となり三試合目をする時に君が部屋に入って来たんだ

私達の私情で君を待たせるのは悪いだろ

だから結果は次、話をする時に持ち越したわけだ」

ウィンダというのはこいつの娘でいいのだよな

で、こいつら何やっているんだ

こいつ親バカか？

ヴァニティはエリアルの兄的な存在か？いや兄か？むしろ父親だっ  
たりしてな

「まあ、君は私の娘を見た事ないからどっちが可愛いかわからない  
と思うが

見たらウィンダの方が可愛いと思うはずだ

ウィンダはな時々不器用な時があるがそれが可愛くてな

それから……」

こいつ絶対に親バカだ

娘の事語りだすからな、まだ語っているし

これに対抗するヴァニティもヴァニティだ……

はあ、やっぱり俺の知り合いは変な奴しかないな

「それにな、ダイガスタの称号を幼い時にとつたのだ

その記録はまだ超えられてないしな

ウインダの次はムストの娘のカムイだったか

まあ、ムストがカムイの自慢をしてくるが、ウインダの敵じゃないな  
他には……」

まだ語るのかよ

親バカを超えて変態かストーカーのレベルになっているぞ

ムストっていう奴が出てきたし

そいつも親バカなのか

ガスタは親バカしかいないのか……

ちゃんとしているのまだカームしか見てないぞ

「という訳だ

まあ、少ないがこの辺で止めておこう

まだ見ていないんだ、先に楽しみを全て言ってしまったらつまらないだろ」

これで少ないのか……

別に気があるわけでないから楽しみじゃないが

「…そうか

ガスタはすごい奴が多いというのが分かった（親バカ的な意味で）」

「ははっ、そうだろ

「一番は私だが（力や技術的な意味で）」

「ああ、飛び抜けて1番だろうな（親バ力的な意味で）」

「はははっ、そんなに褒めなくていい

私はそろそろ行く、ゆっくりと寝ているがいい

連れの者は後で来ると言っていたからその時に起こされると思っ  
たらな

今のうちに体を休める方がいい」

バカにしたのだが、なんだか機嫌良さげに出て行ったな

絶対に子離れできないだろうな

はあ、ウィンダールが言った通りになりそうだから寝ておくか

「…カーム、寝るから電気を消してくれないか」

「はい、分かりました」

そう言って消した

カームはウィンダールを見て、いつもの事のように呆れていたからな  
やっぱりこいつがガスタで1番の常識人じゃないのか？

はあ、こいつが母親か他人だったらいいが、姉妹だったら苦だった  
だろうなアレ

まあいいか、他人の家庭の事に口を挟むのは面倒だ

そういえば、俺の家どうなっているのか？

ダルクとアウスがいるから大丈夫だと思うが……はあ、大丈夫だっ  
たらいいが……

もう寝るか

……

……

……

ん？ここはどこだ？

山？いや海？空？結局どこだ？

はあ、顔を動かすと景色がガラリと変わるのだが……

なんかの魔術にかかったのか？

はあ、考えていても仕方ないか……

前：空から何か来たな…… 見覚えがあるが何だあれ？

白いドラゴンにまたがった白い戦士？槍を片手に持って投げた！？

その程度か、かわせるな…… ちっ、体が動かない、何故？

くっ、腹に刺さったか…… で抜け出して、その戦士のもとに戻る

これ前にもなかったか？

はあ、横に行つたか…… 顔で追つたら景色が変わりいなくなったか

ここは氷で覆われた所か…… 三体の龍が出てきたか

これらの龍、見覚えがあるが…… 何だ？さっきの奴同様に思い出せない……

全員で一斉攻撃か、氷弾に、冷気のブレスに、ブリザードか……

はあ、顔を動かせば避けられるか？

うまくいったみたいだ

ここは山か…… はあ、ここは思い出せるな、俺の山か……

アンデットが来たか、数が数えきれないほどいるし……

くっ、さらに何か来たな…… 6人の魔術師か

ちっ、赤い奴が炎の魔術を使ってきたか  
アンデットで手が空いてないというのに、6人の魔術師の相手など  
できるか

下をとつさに向いたのが正解だったか

！？ここはダメだ

顔をすぐに動かさないと……動かさないだ！？

あの光景をまた見る事になるのかよ……

ポニーテールの少年が慌てて大学から出て行った

その後ろから銀髪の長毛の少年も出て行った

彼らが向かっている先は、銀髪の少年の家

その家が大学から確認できるほど近くにある

その都市：魔法都市・エンディミオンのそばの山にあるからだ

その家が今、大量の魔術師が困っている

少年らは彼ら、魔術師に見つからずに家の裏口から入って行く

そこには、体格の大きい男性が少年らを待っていたかのように静かに迎えた

そして、こう言った

「お前ら、ここから逃げろ

ここは俺が引き付ける

この地図に書いてある場所はいつらが来れない場所にある

リッ、お前はそこに入るな、出られないようになるからな

じゃ、気をつける」

そういうと、ドアに手をかけ出ていこうとしたが、止めた

「親父も一緒に行くぞ

あいつらに見つからない抜け道がある  
あいつらごときには無理だ、だから」

と、銀髪の少年が引き止めたからだ  
それに続けて、ポニーテールの少年が

「師匠、外にいる魔術師は皆何かを待っているようだよ

師匠が出てくるのを待っているか、司令塔が来るのを待っているの  
だと思っ

ただ、準備はもう終わっているそうだから、出て行ったら危ない  
よ！..!」

彼らの言葉に男性は

「お前ら、あいつらがこの家を囲っている結界を完成させる前に逃  
げる

今ならまだ間に会っ

俺は体がでかいから抜け出せない

お前らまでがここで死ぬ事はないんだ  
だから俺の事をほっておいて逃げろ」

そっつい、少年らの反論を聞こうとせずに出て行った

外に出ていき、そばにいる使い魔に話かけた

「お前にはいつも世話になっているな

俺が子供の時、旧国でお前を使い魔にした時からの付き合いだからな  
礼を言い切れないな

こんな俺を信じ、その部族の王を止め、俺の使い魔になり  
今、俺と死のうとしてしているからな



だがレヴァティン、最後までいいは自分の好きなようにしていいのだぞ  
俺の息子と弟子を逃がすために死ななくてもいいのだからな  
ここからはお前の好きなようにすればいい」

男性の使い魔：レヴァティンは彼の言った意味をしつかり理解した

『お前はここで死なずにかつての仲間の所に戻れ』と

だが、レヴァティンはそれをせず、彼と共に戦場に出て行った

それを見た少年らは

「リツ、俺たちも行くぞ

あいつら何者か知らないが、親父を殺そうとしてんだ

俺だつて何か手伝えるはずだ

6種類の霊術をある程度覚えたからな」

「ルア、師匠が言った意味をちゃんと理解しないと

師匠は『お前らは生き残れ、これが間違いだといつか証明しろ』

つて伝えたかったのだと思う

だから、それを忘れないようにして、今は逃げないと」

このように、幼いながらも自分のすべき事をしようと意見を言う  
ている

銀髪の少年は共に戦おうと、ポニーテールの少年は逃げよう

と銀髪の少年はポニーテールの少年の意見を聞き入れた

理由は、目の前の戦いが自分の手を出せないほど凄まじかったからだ

男性は使い魔を自身に憑依させて魔術師を大量に殺し

魔術師は、男性を倒そうと大魔術を発動させようとしている

誰が見ても足手まといにしかない

その事を感じてしまったのもある

少年らは戦場を見える、完成つつある結界の外に出た

もちろん、身の安全も確保してある

少年らはその場所であるの戦いを見て、何を思っていたのだろうか  
悲しみ？怒り？哀れ？それとも喜び？

それは少年らにしか分からないが、恐らく悲しみであろう

男性はその少年らの姿を見て安心したのか、術のために使う魔力を  
ためだした

今までしなかったのは、少年らが安全な場所に行くまでであろう  
だが、横眼で安全な場所に逃げている少年らを見てそれをしたのだ  
ろう

彼の使い魔は今、憑依状態を解除していて、違う場所で戦っている  
かつて、ある部族の王ただけあつて魔術師との力の差は歴然として  
いる

もちろん、レヴァテインが圧倒的に倒している  
そのレヴァテインが魔力をためだした男性を見て  
一瞬悲しげな目をしたが止め、敵を倒しに行った

レヴァテインと同じく、少年らも感じたようで  
目からは涙がこぼれ落ちていた

大人でさえこの状況を見れば泣くどころでない  
少年らはまだ5歳だ、それで正常でいられるはずがない、当然であ  
ろう

男性の方は術の準備が完成したようだ  
そして、術を使った

「術式42番・ブラック・ホール！」

そっさい、術ができた

男性の近くに黒い穴が開いた

それは、全てを吸い込もうとした

森や家、魔術師も

男性も例外じゃない

少年らはその範囲に入っていないので吸い込まれる危険性はない

範囲内にある全てのものを吸い込むのは時間の問題だ

そうだったが、結界が完成してしまった

その結界は、その中のあるものの行動範囲を狭める目的で作られたもの

ブラック・ホールはその中で発動したまま

男性もその中、多くの魔術師は結界がある事を知っているので、その中に入っていない

中には、ブラック・ホールと男性とレヴァテインと家などの物だけとなった

結界内はだんだん黒くなっていく

魔術師たちはそれを見て目的が達成したのだろう

全員が立ち去った

数分後、ブラック・ホールは止まり、結界内が見れるようになったが中には何も無かった

少年らはそれを見てさらに悲しんだが

男性は必ず帰ってくると思い互いに行く所に行った

ポニーテールの少年は父親と妹が待つ家に

銀髪の少年は男性に言われた場所に

そこは自分の家があったのと同じような山に着いた

家を探そうと山を歩いたが見つからなかった

地図をもう一度見て、その場所に行ったが見つからなかった

少年が野宿の準備をしていると

地面から子供のドラゴンが現れた

地面の中にある家から出てきたのだ

その子供のドラゴンは銀髪の少年の使い魔

男性に連れられて先に来ていたそうだ

銀髪の少年は自身の使い魔に会い安心したのかその場で寝てしまった  
銀髪の少年はその日からそこで暮らすようになった

ポニーテールの少年は数年後、闇霊使いの継承の儀式を受ける事と  
なった

同じ時、場所で光霊使いの継承の儀式を受ける事となった妹がいた  
その時に2人ともがその場で消えた

その時と同じ時に銀髪の少年が住む山にアンデットが出現した  
何のために出てきたのか分からない

だが、自分の山に出てきたから銀髪の少年はそれを倒すために戦った  
自分は生きる場所を奪われないように戦うが

同時に死んだら男性やポニーテールの少年に会えるのじゃないかと  
も思っている

だれもそんな彼を救えはしない

.....  
.....  
.....

「お兄ちゃん、大丈夫？」

結構うなされていただけ」

目が覚めると破術師が心配そうに言った

そばにいるベビーとモノロフも見てきた  
何か変な夢を見ていた気がするが、思い出せないな  
何を見たのだったのだろうか  
まあいい、どうせつまらない夢だろう

「さあな」

「体大丈夫？  
いきなり倒れたからびっくりしたんだよ」

「そうか  
次からは気を付ける  
悪かった」

「そう、お兄ちゃんが退院するまで、ここに居ていいらしいから  
ベビーとモノロフと一緒に待っているね」

ベビーとモノロフも同意するように頷いた  
はあ、僕のせいでこんな事になってしまったな  
こいつらにはなんか悪いな

「まだ顔色すぐれないようだから  
ボクたち部屋に戻っているね」

「そうか、じゃな  
もう一寝入りでもするか

：カーム、すまないが、また電気を消してくれないか」

そういうと、ベビーらは『おやすみ』と  
カームは電気を消して出て行った

はあ、寝るか

## 第9話（後書き）

ルアが破術師の目的を手伝っているのは

破術師が仲間を探しているからです

ルアは家族がいないから、1人の孤独さを知っているからかもしれ  
ませんね

まあ、その孤独さを消すためにベビーらを弟にしています

ドラグニティが龍使いを嫌っている理由は

ルアの父親がレヴァティンを使い魔としたからです

自分たちの王をとられたと思ったのでしょう

ゲイボルグはカツコイイキャラにして、ルアのライバル的な存在に  
しようとしたのに

何故こんな奴に……

ルアは邪道キャラのつもりだったのですが  
なんだか違う……

番外編 その1 (前書き)

番外編 その1です  
ルアの家にいる霊使いの話です



## 番外編 その1

### 1日目

#### 視点ダルク

ルアが出ていったけど、どうしようか  
問題児が2人いるからね

朝は僕とライナが1番早く起きたけど  
他のみんなが起きたのは昼だからね  
寝すぎだよ！！

昼ごはんは僕とライナで全員分を用意する  
本当に1週間くらいの食糧あったよ……  
まあ、普通の和食だから簡単にできたよ  
ちよつと手を込んでみたかったけど、ヒータに急かされたからでき  
なかった  
でも食べられる程度にはできているはずだよ……多分

昼ごはん後、エリアとヒータとのデュエル  
理由は、おやつのカッキーが最後1つだけとなって  
それをどっちが食べるかでさ  
はあ、半分にすればいいのに……  
勝者はエリアだったよ

決め手はスライムトークンに下克上の首飾りを付けて  
フィールド魔法、湿地草原を発動し、暴走トークンなどの強化カ  
ドを発動させた事らしいよ  
スライムトークンの攻撃力が……常識以上の攻撃力となったらしいよ

はあ、それとあまり戦いたくないね

晩ごはんはアウスとヒータが用意する

アウスはあまりパツとしない料理を作つて

ヒータは熱そうな料理ばかり

コンロで赤ワインを入れたのか知らないけど、火が上がっていたね

僕たち未成年だよ！！

まあ、アルコールは抜けるからいいとしよう

ワインがあるルアの家つて……

風呂は、僕を除く5人が入り

僕は皆が上がったら入る

はあ、こんなに広い風呂に1人で入るなんて……

で、寝るはずが……

他の5人がデュエル大会をするとかで起こされた

結果は、ワインのスターダスト・ミラージュ！！グオレンダア！！

を全ての試合でして優勝

vs 僕の時が優勝戦だったよ

後1ターンあれば、終焉のカウントダウンの効果で僕の勝ちだったのにね

その後は大会の後の打ち上げをした

超融合のDVDを見て笑つたり（おもにパラドックスの顔芸）

お酒のつまみを食べたり……

寝ろよ！！

で結局寝たのは、4時を超えていたのじゃないかな

こんなのだから昼に起きてしまうのだよ……

まあ、僕とライナはいつも通りに目が覚めたから起きたけど

頭がズキズキする……

2日目

視点 ダルク

……はあ、昨日と同じ暮らしたよ  
デュエル大会をして打ち上げをして……  
寝ろよ！！！！！！

3日目

視点 ダルク

今日はいつもと違った  
デュエル大会がヴァンガード大会に変わったからね  
……これは僕らのにしているの？  
はあ、しっちゃったから仕方ないね……  
まあ、結果的にヒータのかげろう軍団に全員負けたね  
『ファイナルターン！！』等を高らかに叫んでいたね  
もしかして酔ってなかったよね  
赤ワイン飲んでないよね……はあ、不安になってきた  
ルア早く帰って来てくれ！！

番外編 その1（後書き）

やっぱりダルクが1番苦勞人になる……  
そういえばライナって1話目に話していらい話してない……

## キャラ設定2（前書き）

キャラ設定その2です

霊使いの設定です

それともう1人の設定です

まあ、モブキャラは書きませんが……

## キャラ設定2

風霊使いウイン

天然

水霊使いエリア

若干ツンデレ？

霊使いの中では常識人の1人だと思われたが、同性愛者だと疑惑が  
……

火霊使いヒータ

ムードメーカー的な存在

地霊使いアウス

空気キャラその1になった……

霊使いで1番頭がいい、だてにメガネをかけてない  
常識人の一人

闇霊使いダルク

黒一点

霊使いで1番常識人&苦労人  
常識人だけど、重度のシスコン

光霊使いライナ

空気キャラその2

天然系、重度のブラコン

氷結界の破術師

性別は女 『英語版から推測するに男だ』という説があるが、この作品では女とします

年齢11歳

水の国でルアにあっってから共に行動している  
ボクっ子

ルアの事を『お兄ちゃん』と呼んでいる

番外編 その2（前書き）

最近までこれの存在忘れていた……

まあ、いろいろあったから覚えていても書けなかった……

明後日が夏休みの宿題の提出日なのに何やっているんだろう……

しかも、宿題1つも手を付けてない……

大丈夫かな？

後、この話メチャクチャですから見たい人だけお願いします!!

どんな内容でも『俺は見てやんよ!!』精神の人のみお願いします

!!



このくらい空けていれば大丈夫ですかね？  
では「俺は見てやんよ」精神の持ち主の方、どうぞ！！

## 番外編 その2

竜の渓谷には伝説の騎士団が住むと言われている

伝説の騎士団は名をドラグニティを言う

彼らは旧国の危機を感じると現れる

だが、彼らをあの戦争が始まるまで誰も見た者はいなかった

何故なら、彼らが住む竜の渓谷にはたどり着けるのは並の人間には無理だからだ

いや、人外レベルの人間にも無理だろう

そこにある少年がやってきた

「お主、何者だ？」

ここに用か？」

その少年にドラグニティの王…レヴァティンが話かけて来た

「俺は龍使いだ

使い魔となる者を探しにここに来た」

「ほお、龍使いとは

たしか新国の役職か……

新国からよく来よる

そなたは使い魔を探しに来たと言ったな

何か当てはあるのか？」

「ああ、今考えているのは水の国にある氷結界の龍をな

あいつらの中から誰をするか……いつその事全員にするか」

少年がそう言った途端、レヴァティンの表情が強張った

まあ、当然だろう

氷結界の龍と言えば、氷結界の一族が封印しえざる負えない三龍だ  
それをこの少年は使い魔にするという

しかも3体共……

3体が目覚めると世界が終わると言われている  
それはこの少年ももちろん知っているはずだ

「奴らが全員目覚めるとどうなるか分かっているのか!!  
この世界が終わると言われているのだぞ!!」

「冗談だ、俺だってあいつらを使い魔にできると思っていないさ  
その前に氷結界の連中に止められる  
だからここに来たわけだ、ドラグニティにな」

「そうか……最近の子供は恐ろしい冗談を言うのお  
ここで立ち話をするのもよいが、中に入がよい  
ワシの家で話そう」

といいレヴァティンは少年を中に促す  
言い忘れていたが、彼らは今、竜の溪谷の入り口の前にいる  
まだドラグニティの村に入っていない

レヴァティンの家に彼らはついた

流石はドラグニティの王、周りの家より立派である

「さあ、お主はドラグニティの誰を目星をつけているのだ？」

「そんなのは知らない

俺はドラグニティという名しか知らないからな  
ただ、ドラゴンがいると聞き来ただけだ

誰がいるかは全く知らない」

「そうか……」

ならワシが一人ずつ教えて行こう」

「助かるが、なぜ俺の手伝いをしてくれる？

お前からすれば仲間をとられるような話だろ」

少年が疑問に思ったことを言った

それもそうだろう、王が村の者をさっき知り合った者に渡すというのだ

「ここで使い魔をつけないと封印龍と契約しちゃうから……」

「いやいや、あれは冗談だから」

「まあ、ワシも冗談だ

ただドラグニティは……いやワシが困った奴や頼られたりされると手伝いたいだけだ

流石に限界があるがのお

だが、今回のお主の願いは限界じゃない  
だから手伝ってやるのじゃ

それに仲間の一人がこの村から違つところに行く機会が生まれるのだ  
さみしいが、それがお主には上手くいきそうなのでな少し楽しみなのじゃ

今、写真つきの名簿を持ってくる少し待っていてくれの」

といいレヴァティンは名簿をとりに行くために席を離れた  
その後10分くらいして戻ってきた

「ほれ、白い龍はどうだ？」

こいつは自分が気に入った者としてしか契約しないと云っているからな  
今までこいつとナイトの契約しようとした者がいるが全員が断られ  
ているんじゃない

はあ、働かないのならさっさと出て行ってもらいたいものじゃ……  
村1番の龍なのだがのお」

「こいつはなんか気に入らない、てかニートとほぼ変わらないじゃ  
ねーか

他のを見せてくれ」

「そうかのお、ならアキュリスはどうだ？  
小さい体だが、結構やりよるやつじゃぞ」

「いや、そいつも気に入らないな  
俺のように強い使い魔はいないのか」

「使い魔が自分の力量に収まらなかったら、お主の体が崩壊するの  
じゃよ

それを考えているのかのお？」

そう、レヴァテインが言う通りに使い魔が自分より強すぎると崩壊  
してしまう

だから他の龍使いを含む霊使いは自分より力の無い使い魔と契約する  
だが、この少年はそのギリギリ力に収まりそうな白い龍を断り、ア  
キュリスを断ったうえにそれを言った

レヴァテインが心配するのも当然だろう

「大丈夫だ、俺は結構強いからな

まあ、崩壊した時はその時だ、後悔はしないさ」

「ぬ、そうか

ならミスティルはどうだ？

ワシの次に強いアームズだ」

「なんだか、顔がムカつく

こいつ後でぶん殴ってきていいか？」

「理不尽じゃのお

それから顔を殴るのは止めてやってくれ」

「そうか、他は誰がいる？」

と全ての者を見せたが少年が気に入る者はいなかった  
少年の理想の使い魔のレベルが高すぎたのであろう

だが、少年はドラグニティに来た時から目を付けていた者がいた

その者が少年の理想の使い魔にヒットしていたからだ  
それは……

「他にはいないのか？」

「これ以上は龍がないのじゃ

数が増えて欲しければK O A M Iと交渉するのじゃ」

「いやいや、そんな事K O M M Iが関わってくれるはずがないから  
それにそんな大人の事情を言うな！！

これを見てくれている人が『はあ！？何言っているのこいつ』と思  
うから！！」

「そうか、メタるのは止めるとするのかのお」

「ああ、止めてくれ」

これを見てくれていている皆様、すみませんでした!」

「そんな謝らなくても」

「お前が原因だから!!」

はあ、決めた、お前は今から俺の使い魔だ!!」

「……………はあ!？」

ワシここの王をしちやていたりするのじゃが!!」

まあ、最近だるいと思っってきたから別に王はどうでもいいかのお

はあ、仕方ないのお、契約するぞ」

「……………いいのか？」

「作者がこれ以上書くとなんだかダルくなって来たようだからのお  
本当はこれを書かずに違う話を書こうとしていたが

ふとワシらの事を思い出し『こいつらの話を書いた方がよくな?』  
的な事を思っつてな

で書いていたが、さっき言ったようにダルくなったから端折るらし  
いのじゃ」

「だ・か・ら・メ・タ・る・な!!」

早く契約するぞ!!作者がこれ以上変な事書く前に!!」

こうしてある少年とレヴァテインとの契約が成立したのだった  
めでたし、めでたし

「めでたしじゃねーし！！」

絶対これ見た読者の皆様、後悔しているから！！

それからいつも以上にひどい出来だから！！

いつもは、よく分からない中二病くさいアホっぽいけど、  
多少なりともましたが

これは絶対にクソ酷いから！！」

めでたし、めでたし



番外編 その2（後書き）

はい、ある少年が言う通りに酷い出来です  
本当にすみませんでした！！

言い訳をするとなんだレヴァティンの口調難しいな  
でも書き直すの面倒臭いな  
じゃもうテキストでいいや！！的な……ダメか  
次回は頑張ります！！

## 第10話（前書き）

久々の更新＆本編です

それから、ルアの一人称を『僕』から『俺』に変えました  
他の話も順に変えて行きます

はぁ、ついリツのくせで『僕』にしちゃったのですよね  
書き換えるの面倒だったのでそのままにしていたのですが、やっぱり変えます

色々すみません

## 第10話

視点 ルア

はあ、朝か……

これでガスタで2日を使ってしまったのか

明後日にアンデットが現れるのにな

俺が寝ているベッドの横に、俺の服（着替え用）と鞆（中に着替える前の服がある）がある

それを来て出て行って、ベビー達を迎えに行き出て行けばいいが……

「ルアさん、おはようございます

良く寝れましたか？薬を塗りますね」

カームこいっがいるから無理だ

はあ、いつも抜け出そうとするときに来る

変な能力があるのか？

それと……

「……ぐっ、前にも聞いたかもしれないが聞く

それ本当に薬か？毒じゃないよな」

本当にこれ、傷をえぐるような痛みが来るのだが

薬ってこんなに痛みがあるのだったか？

「ええ、薬ですよ」

笑顔で返された……

はあ、親父が言うのは本当だ、女は悪魔みたいな奴だ

「カーム！！ルア！！いるか！！  
今すぐ避難しろ！！インヴェルズが攻めてきやがった！！  
ルア！！お前の連れは避難させたから安心しろ！！だからお前も早  
く避難するぞ！！」

それと今外に変な風が吹いている！！

それは体調を崩すから余り当たらないようにしろ！！

それで何人かが今戦闘不能になっている！！」

はあ、親八カウインダールがバカみたいにあわてて入って来た

で、避難？インヴェルズ？

インヴェルズは確かあのガキが言っていたか

5つの部族に侵攻した部族だったか？

で、倒されたのだったか？

まあ、倒されたのじゃなくてもいいか

はあ、無駄な争い事は嫌いだが、借りを作るのはもっと嫌いだ

「…お前らは先に行っていてくれ

俺は後で行く、着替えたいのでな

場所を教えてくれ」

こいつらに俺が今からする事を言つと面倒が起きそうだ  
だから、見られたくないな

「何を言っている！！」

一刻も争うのだぞ！！だから早く来い！！」

「…一刻も争うのならば、早く戦場に出ればいい  
俺に構って暇はないだろ

ガスタの賢者ならば早く行け」

「くっ、カーム行くぞ!!」  
ルア、ここを出て左に大きい建物が見える、そこが避難場所だ!!  
早く行けよ!!」

2人共出て行つたか  
じゃ、着替えるか

そろそろ行くでしょうか  
ベビーもちょうど来たしな  
まあ、長年の付き合いだ、これから俺が何をするか気づいて来てくれただろう

「ベビーどうした？疲れているのか？」

ベビーが来てくれたのはいいが、体調が優れなさそうだ  
ベビー自身は否定しているが、もしかしてウィンドールが言っていた『風』のせいか？

「ベビー、避難所に帰れるか？」  
帰れないのならここに残り……はあ、仕方ない行くぞ」

こいつ頑固だからな  
俺が言っても言う事聞かないからな、こついつ時  
とりあえず、『風』を止めるか

.....

.....

……

インヴェルズと言うのは虫けらだったのか  
どこにもわいて、侵略しようとするあいつらにはお似合いの姿だ  
だが、先にする事があるからな、あいつらの相手は後だ  
まあ、あいつらは空を飛んでいるから結局今は無理だ

「ベビーたのむ

龍術・スタンピング・クラッシュ」

術は発動させた、後はベビーが『風』を消すだけだ

サイクロンでも良かったが、周りを巻きこんだら面倒だからこつち  
にしたが

これにして良かったな、周りを全く巻き込まずに『風』を消せた  
結局あれはなんだった？あの虫けらどもが作ったのか？まあいいか  
ベビーの体調も元通りになったしな

「ベビー、憑依装着

あの虫けらどもがいる高さまで飛んでくれ」

俺を魔力をベビーに憑依させ巨大化させる

で、やっとあいつらと戦えるな

せつかくここに足を運んでもらったんだ

客人にはそれ相応の物を送らないとな

これはガスタの仕事かもしれないが、今は俺しかいないから俺がし  
てもいいよな

「…褒美だ受け取れ、そして……」

儂く散れ  
ギヤラドボルグ？」

数が一気に減ったな  
半分以下じゃないか？

弓は余り使いたくないのが、最近よく使うな……

まあ、そんな事考えながらアームズ・ホールを展開したが、何を出すか

槍でいいか

でもな、この槍結構気に入っているのだよな、あいつらに使うのはもったいないか？

まあ、使わないのももったいないか

「…さあ、悲劇の始まりだ

俺がここにいた時に攻めたのが間違いだったな」

なんだか、あいつらバカみたいにこっちに攻撃してきたな

Aがはいた溶解液っぽいのがBに当たり

BがはいたブレスがAに当たりみたいな感じで、潰しあいになっている

だが、周りにいると邪魔だ

「…惨めに消える、虫けら」

と言い、槍を振り回すと、面白いように当たる当たる

そして落ちて行ったぞ、こいつら本当に5つの部族に挑んだのか？

弱すぎないか？まだ、ゲイボルグの方がましだったぞ

インヴェルズの残党が集まって侵略して来たのか？

数が少ないしな

だが、それをまとめるリーダーはどこだ？

リーダーなら今はこんな近くまで来ないな  
そんな事より、ガスタはまだか？来ないのなら  
別に、アレら全て倒してしまっても構わんのだろう？

「…いい加減にウザい  
虫けらは虫けららしく俺にやられる」

いい加減に面倒になってきたな  
2本目の槍を出すか

「…最後の1体  
これで、近くに来た虫けら全て倒したが  
後は離れたところにいる虫けらだけか  
はあ、こつちに少し近づいてきたし……」

数は200前後か？  
はあ、残党のくせによくわいてくるな

「うわー、私が見た時よりも少なくなっている！！  
あなた1人で倒したの？すごいね！」

…… エリアルはエリア似で  
こいつはウイン似か……  
はあ、他人の空似の奴をここ最近に2人も見るなんてな……

「…そんな無駄口たたいている暇があるなら手伝え  
お前が乗っている鳥はやる気だが」

「はいはい、やりますよーだ！！  
ガストス！！やるよ！！」



と言って、ガルドスが突っ込んで行ったが大丈夫か？  
返り討ちにあうなよ

……そんなのは杞憂だったようだ、クチバシで攻撃して  
上に乗っているウィン似の奴が杖から出した波動で蹴散らしている

「ルア！こんな所で何をやっているんだ！！  
さっさと非難しろっとき言っただろ！！

ウィンダー！！その調子だもつとやれ！！」

はあ、親バカが来たか、こいつも鳥に乗っているな  
あいつはウィンダと言う名前か…あいつの娘だったか？

「…お前の娘よくやるな」

お世辞じゃなく、本当によくやるな

あいつの周りの虫けらはすぐに倒されて落ちていくし

「ははは、そうだろ！！そうだろ！！

何だって私の娘だからな！！」

……すぐに機嫌がよくなったな、こいつ

ウィンダをほめると機嫌がよくなるのか……こいつは利用できるな

「…話している暇はもうなくなったようだ

俺は先に行く、お前はウィンダの所にも行き手伝えばいいのじゃ  
ないか？」

さて、虫けらには消えて貰わないとな

それよりもリーダーはどこだ？

飛び抜けて力が大きい奴は1人もいない

1番強い奴は赤色の虫けらか……だが数が1番多いから違うな

ここにはいないのか？違う場所での状態を観察しているとかか？

まあ、どっちにしても虫けらを消すか

「よおルア！！久しぶりだな！！」

「同じく久しいね、ルア」

……何故こいつらがここにいる？

水の国で別れたよな

「……おい、リチュアがどうしてここにいる？

それともお前らだけか？アビスとヴァニティ」

「いや、ガスタがインヴェルズに襲われたと聞き助太刀に来ただけだよ」

「それとな！！俺らだけじゃなく、リチュア全員がここにきているぜ！！」

……ガスタのリチュアの共同戦線か

はあ、なんだかすごい事になって来たな……

「……俺の邪魔だけはするなよ」

「おいおい、兄ちゃん！！それは俺らもか？」

「あれスフィア？この人と知り合いなの？」

……はあ、聞き覚えのある声が出たと思えば、奴か  
何故ここにいる……その前に何故そんな所に顔がついている？  
で、お前を胸につけているこいつは誰だ？  
はあ、どうしてこう色々わいてくる？

「兄ちゃん！俺がこんな所についているのか疑問に思っただろ！  
それは俺もだ……何故こいつの装備になった時こうなるんだ？  
胸ほそつほとんど無いくせに」

最後の言葉を言った時、こいつを装備している奴がこいつをすぐさま殴った

いい耳しているな……あんなに小さい声で言ったのにな

「……ヴァイロンも今協力しているのか？」

「いやいや、俺はヴァイロンを今離れてな、ガスタにいる  
まあ、昨日ガスタに来てなかったら、宿を営業していたけどな！！  
まあ、俺と同じような奴が3人いるが、内の1体がテトラでリチュ  
アにいるぞ！！  
ほら、あそこで」

……あそことはどこか分からなかったが  
ものすごい音がしたから、その方向を見たら怪物が変な機械を装備  
して水の塊を発射していた  
恐らくあの機械がテトラなのだろう……  
あの怪物はなんだ？

「……ある程度分かったお前はここで戦ってくれ  
俺はもつと奥に行く」

「そうか!! じゃな兄ちゃん!! 後でな!!」  
俺は仕方ないがこいつの小さい胸の所できて置くな!!」

「ルア!! 情けなく負けるなよ!!」

アビスが不吉な事を言ったが、気のせいだろう  
それとオーナーにまた災難が訪れそうだと思うな

奥は森か

あの森ならばこの状態を確認でき

そして、あの場所には虫けらどもがいない  
それを俺たちがあそこは何もないと思わせやすいだから奇襲もできるな

横目で見したが、虫けらが俺の元にあわてて行こうとしたが  
ガスタヤリチュアに止められている、あわてるという事は何かある  
のだろう

俺の予想が外れてない限り、リーダーがいる

それか、リーダーに連絡をする奴か  
連絡要員だったとしてもそいつを潰せば、リーダーに連絡が  
できなくなる

で、リーダーが今戦場にいる虫けらどもに連絡ができなくなる  
どっちにしても倒さないとな

「さあ、どっちだ?」

## 第10話（後書き）

中途半端ですけど、今回はここまでです  
このインヴェルズのリーダーは誰でしょうね？

『風』は『猛毒の風』の事です

それはインヴェルズが発動したのかは分からないようにしています

スファイア……口は災いの元っていうのを理解しましょう

それと憑依装着の設定です

使い魔に自身の魔力を憑依し、憑依を解除する時  
憑依した分の魔力が残っていれば返して貰えます  
憑依中に魔力が少なくなれば

使い魔とマスターの見えない回線を通じ

マスターが使い魔に魔力を渡さなければなりません  
渡さなければ、憑依装着が強制的に解除になります

## 第11話(前書き)

学校が忙しくなってきたので更新スピードがおくれます  
それと、今回は少な目です

## 第11話

視点 ルア

森の奥まで入って来たが、気配が全くない  
それが逆に怪しいな

憑依装着を解除しておくか

偵察部隊やリーダーどつちでもいいから出て来い

はあ、向こうは激しくなってきたな

爆発音が多い……爆発音？何を爆発しているのやら

その前に『激しく』なって来ただ！？

新たな部隊を突入させた、又はリーダーが表舞台に出て行ったのか？  
くっ、それなら残った方が良かったか？

はあ、戻るか……くっ、デカイ虫けらが出てきやがった

やはり、向こうに俺を戻したくないのだろうな

「どこの者かわからんが、我らインヴェルズの同胞を手にかげやが  
ったな

グレス様がこの前、オメガにより倒された事により戦力が減り、貴  
様が放った矢で更に減った

その代償、このホーンが払ってやる

あの方が出る出番はこの戦いではない、俺が全て侵略してやる」

あの方？今のリーダーか？

まあ、こいつがそういつているからこいつよりも強い奴だろう  
向こうの戦いではこいつが言う通りならリーダーは行っていないな

「…お前の仲間がどうなろうと俺には関係ない

それに俺の邪魔をするなら破壊するまでだ、どんなものでもな」

「なら話は早い、俺がお前を倒せばいいのだからな!!」

ふーん、こいつさっきまでの奴より強いな

「…はあ、さっきのお前が言った事は間違っている  
俺がお前を倒すのだからな  
火霊術・デス・メテオ」

俺が放った炎が奴を囲って、大火災となっているな  
まあ、森には被害がないように周りに水霊術をかけているから安全だ

「くっ、この程度の炎などすぐに抜け出せる  
俺はグレス様やあの方の1番の側近の男なのだからな!!」

はあ、なんか気迫で出て来たし  
それからなんだか触角っぽいもので切ろうとしてきたし

「…はあ、だるい  
そろそろ終わらせるか  
術式35番 武器召喚術・アームズ・ホール」

中からさっき向こうで使った2本の槍でいいか  
……はあ、とつさに1本の槍を後ろに向けて構えて良かった  
後ろに剣で俺を倒そうとした虫けらがいるからな

「ロー子様!? 何故出て来ているのですか!?  
こいつは私が相手するので、休憩しておいてください」



「コイツハオマエデハカテナイ  
ダカラオレガアイテスル」

片言かよ

こいつがリーダーか……なるほど、その力量があるな  
俺と互角に打ち合っつてやがる

こいつの胸元に槍を入れようとすると、すぐに剣で弾かれる  
まあ、こいつが俺を切りかかってきたら、俺も槍で弾いているけどな  
だが、後ろで俺に攻撃をしている虫けらにいい加減見ずに相手する  
のはキツクなつて来たな  
あいつを先に倒すか

「…くたばれ……くっ」

ちっ、リーダーが邪魔しやがって  
はあ、仕方ない先にリーダーの方を倒すしか手はないな  
このやり取りをあいつがミスをするまでしないとあいつは倒せない

「…今だ……ちっ、かわされたか」

「オマエヨクヤル、ダガオレハマケナイ」

くっ、なかなかすきを見せやがらない  
どうするか……

## 第11話（後書き）

攻撃力で見ればホーンが勝ち  
効果で見ればローチの勝ち  
見た目は……引き分けかな？

## 第12話

視点 氷華（氷結界の破術師）

ベビーが抜け出してどっかに行っちゃったけど大丈夫かな？

お兄ちゃんは避難所に全然来ないね、やっぱり怪我がひどいから来れないのかもしれないね

モノロフはボクと一緒にいるから大丈夫だけど……窓から外みようかな

誰が来るか分かるもんね

外は……黒い雲？

あつ、違うあれは……インヴェルズ！？どうしているの！？ヴァイロンに倒されたのじゃないの！？

ウインダールさんがどこかに走って行ったね

イグルスだったかな、その子の元に行ったのかな？

でもそれだったら早く行かないと間に合わないよ！！

つて、誰かがドラゴンに乗って、行っているね

あれは……お兄ちゃん！？何やっているの！？

……もう大丈夫なんだ……ギャラドボルグ？を放てるほど回復したのだね

その調子ならインヴェルズが撤退すればまた旅に出れそうだね

うわぁ、更にインヴェルズが増えちゃった……

でもウインダールさんや他のガスタの人がいるから大丈夫だよね？

あれ？今横を何かが通り過ぎたような……あれはリチュア！？どうしてここに？

まさか、今弱っているところについてガスタを乗っ取るつもりなの！？

……でも違っつばいね、巨大なワニさんが自分で作った水弾をインヴェルズに当てて倒しているもんね

それと、エリアルさんと他の2人が変身……怪物に変身した……えっ、ちよつと待ってよ!!

エリアルさんともう1人の足が魚になっているよ!?

もう1人の方は怪物そのものになっているし!!

でも胸についているのは何かな?ヴァイロンかな?

たしか、ヴァイロンに協力したら5種族にヴァイロンを渡したのだったけ?

それでつけているのかな?

と色々見ている間にお兄ちゃんが奥にある森の方に行ったね  
向こうに何かあったのかな?

お兄ちゃんが森に行ってから数分たったね  
数が減ってきたからそろそろ終わりそうだね

えっ!ウソでしょ!!数が最初せめて来たのと同じくらいのが来たよ!!

インヴェルズって本気でここを落とそうとしているね……大丈夫かな……

視点 ルア

何回剣と槍の打ち合いをしただろうか?

後ろは剣と触角の打ち合いだが

まあ、後ろはベビーがどこから来るか教えてくれないと対処しにくい  
いが

「オマエ、キヨウハココマデダ  
グノカズガヘツタコレイジヨウツツケルトオレタチガアブナイ  
ココヲオトセテモホカノブゾクガキタラタイシヨデキン、ダカラホ  
ーンタノンダ」

「はっ、仰せのままに」

ちっ、追いかけたいがこっちは怪我をしているからな勝てるか分  
らないな

ギヤラドボルグ？を撃ったから魔力も十分減っているしな  
戦場にいたインヴェルズも撤退しているっばいな

じゃ、俺も戻るか

奴らも森の間に溶け込んでいったからな、不意打ちされるとまずい

「ベビー、憑依装着

さあ、戻るか」

で、ガスタに戻ると変なことが起きていた……それは……

## 第12話（後書き）

中途半端ですがここでおしまいです！

次はいつ更新できるかな？

ネタはまだあるのだけど暇がない！

それとDTにリチュアがまた増える！早くGETしたいな

## 第13話

視点 ルア

はあ、ガスタの村に着くと何故こんな事が起こっている……

「ルア、私の娘のウィンダとリチュアのそこのエリアルのどっちがかわいい？」

今多数決をしてな、同点なんだ、だからだのんだ」

……はあ、だるい……

「……どっちにも興味ない  
勝手に決めてろ」

「おいおい、決めよーぜ！！ルアよ！！これはリチュアとガスタの  
因縁の対決なんだ！！」

「……だから興味ないと言っているだろ」

「よし、だったらウィンダール、こいつが気に入らぬ奴を全員  
だすか？」

私はエリアルとエミリアを出す」

「ふっ、私の出番だわね、この世界で1番のノエリア様が出てあげ  
るわ」

「「帰れババア！！」（怒）」

ウィンドールとヴァニティって妙に息があっているよな……

「その話乗った、私はウィンダとカムイとカームを出す」

「ウィンドール、ボクは男と言っているだろ!!」

「な、なんだと!?!」

ムスト本当なのか!?!」

「…………… (親のくせに知らなかった人)」

「…親バカ共は黙れ」

親のくせに性別を知らないとはどういう事だ……  
そっいえば、誰か忘れていないか?

「ちょ、ちょっとウィンドール!!私を呼ばないとはどういう事よ  
!!」

「いや、だって胸が……いや何でもない」

ウィンドールが言っている最中にオーナーが踏まれた  
そして地面に埋まっている……こいつ苦勞人だな

「そ、そんなにピリピリするな!!お前は秘密兵器だ!!  
だから名前を言わなかったんだ!!だから怒るな、リーズ!!」

すごい言い訳だ……

はあ、なぜこんな事に巻き込まれるんだ……



「さあ、この中で誰だ!!」

「はあ、興味ないって言っているだろ」

「あつ、お兄ちゃん」

さつきインヴェルズと戦っていたけど大丈夫なの  
傷跡がまた開いたりしていない？」

モノロフに乗った破術師が来た

そういえば、怪我していたな

このバカ共のせいで忘れていた

「ま、まさか、お前はそいつを心に決めた人だから選べないという  
訳でないよな!？」

い、妹に恋をするというそんなゲームみたいな話じゃないよな!!」

……はあ、バカ共が変な妄想を شدしたし……

そのゲームみたいな事をしている奴らが実際にいるのだけだな

それから破術師はなんかあたふたしているし……

「はあ、こいつは妹じゃなし、心に決めた奴じゃない  
ただの旅の仲間だ」

それを聞くとウィンダールらは安心した顔になったな  
で、なぜ破術師は落ち込んでいる？

「よし!じゃ、この中で誰だ!」

またこの話か……

「…はあ、興味ないと言っているだろ

それからこんな事をしていていいのか？

次いつインヴェルズが攻めてくるのか分からなんだ

できるだけ早く対処できるように戦術を決めたりしないとダメなのじゃないのか？

今、ガスタとリチュアがいるんだ

2つの部族が共同して今回は戦えたんだ、それを生かすか殺すかはお前らが決めればいいが」

ローチだったか？

『今日はここまで』と言っていたんだ

その事から考えるとまた来るといふ事だ

「くっ、言われてみればあんなに大量の軍がまだ残っていたんだ

今回はリチュアがいたから何とかなつたかもしれない

ルアが言う通りにするか……」

「…今日は俺はここに泊まるがいいよな

明日出ていくから風の塔の場所を教えてください」

やっと傷が元に戻ったんだ

今日ここで泊り、髪の手入れをできなかった分もしなくてはならないで、明日明るいうちに闇の国に入り出る

「ああ、いいが本当にいいのか？

まあ、カームに見て貰え」

……はあ、あいつに診断されるといやな事しかない気がするのだが

まあ、いいか、明日出ていくのだから  
……

### 第13話（後書き）

……なんかどうしてもルアがフラグを立てている気がしてならない

……

気のせいかな……？

それからなんか今回もグダグダな回だったな……

ガスタトリチュアどっちが人気あるのかな？

それからガスタは誰が1番人気なのかな？サンボルトだったりして

（笑）

## 第14話(前書き)

どうしよう、公式でリチュアがラヴァルを吸収しちゃったよ!!  
何やっているの!? 今まで考えていたストーリーが……

これからどうしようか、このまま公式を無視して進めるか  
公式に従うか……

そういえば、ヴェルズっていたな……

ああ、その設定も考えないと!!

それと、この回なんだっただろう?

## 第14話

視点 ルア

夜が明けたか

そろそろ起きるとするか

髪の手入れも終わらし、昨日のうちにウィンドールに風の塔の場所も聞いた

闇の塔の場所はまだ分からないが何とかなる事を祈ろうか  
ベビーらはまだ寝ているか……少し外に出るか

……いい静寂だ

風の音がするくらいで他の雑音が全くしない  
久しいなこの静寂は……

「おつ、ルアじゃねーか!!もう起きていたのか!!」

……はあ、うるさいやつらに見つかったか……

アビスと誰だ? 剣をつけているという事は剣士か?

「……ああ、静寂と楽しんでた、でそいつは誰だ?」

「こいつはアバンスだ!!お前とちよつと性格が似ている奴だ!!」

はあ、性格が似ている?少しでも嫌だな

「ほお、そなたもこの静寂を楽しんでいたのか

私も楽しんでいたところとこのアビスにより邪魔されたのだ  
邪魔されてはする事がなくなるであろう

なのでな今アビスとふらついてたのだがそなたとあえて良かった一度、話をしたかったのだ」

……なんだか事情説明をしてきたのだが……

俺と性格が似ている？似てないだろ……俺の勘違いか？

で、俺はこいつの事を知らなかったのだが、こいつは俺の事を知っているのか

暇だし話でもするか

「話とはなんだ？」

「そなたの杖を見ると剣を忍ばしているであろう

それが同じ剣士をして気になってな

最近、剣を使う者が少なくなっていてな、珍しくて話してみたかったのだ」

「誰がそんな事を聞きたいと言った

話をしないなら行くぞ」

「そんなに怒らなくては良いでないか

怒ってばかりいれば人生がつまらなくなるぞ」

……何故こいつに人生の心配をされなくてはならない

「その剣を見せてくれぬか？

剣は持ち主の心をうつすのでな」

……はあ、こいつは剣の事を結構詳しくそうだからまあ、見せてもい  
いだろう

「…ほら、見る」

「ほお、きれいな剣だ

だが、光の中に濃い闇が見える

そなたは何やら人に言えぬ闇を持っておるな  
その顔を見れば間違っではないいな」

…いつ心理テストになったこの話は…

俺の闇か…あれは俺自身の問題だ

「…俺の闇を暴いてどうするつもりだ」

「いやいや、人は誰だって闇を持つものだ

だが、そなたは周りがきれいだな、闇が目立ったので言ってみただ  
剣を見る限りそなたはいい人柄だ  
私が思っていた人物でなりよりだ」

「…話はそれだけか」

はあ、剣で人柄を見るとはどんな才能だ

「剣は良い、物騒であるが、人の本質をうつしだす鏡のような物だ  
そなたもそう思うだろ？」

…こいつ、剣マニアか？

俺が剣を使っているから話が合うと勝手に思いこみやがっている

「…興味ない

剣は剣、ただそれだけだ」



「それは嘘だ

そう思うのならその剣はそこまできれいにならぬ  
そなたは自分に正直になっただろうか？

そうでないと連れの者に負担がかかるぞ」

「…もういいだろ、俺は戻る」

ちっ、聞いていれば好き勝手に言いやがる

視点 アバンス

少し言い過ぎたかもしれぬな

「アビスよ、彼は自分に厳しいな」

「ん？何だ？それも剣で見たのか？」

「それもあるが、話していても分かる  
剣に余計な感情を入れてはならないとし、自分の感情を押し殺して  
いる

それが剣だけにはまるとは思えない、他のものにも当てはまるだろ  
う」

「そうかもしれないな、お前とは正反対だから似ているな」

「正反対だから似てはないだろう」

「ははっ、そうだな！..」

視点 ルア

はあ、結局あいつらはなんだったんだ？

ん？あそこにいるのはカームか……何やってんだ？

「……おい、何やってんだ？こんな所で」

「ルアさんですか、私はただ薬草をとっていただけですが」

……言われてみれば、この前見せられた草に似ているな

「……普通に呼び捨てで構わん

それよりも、今日で退院しても構わないよな？」

「ええ、別に構いませんよ

ただ、1つ条件があります」

……条件？

俺に求める条件は何かあるか？

「私もあなたの旅に連れていくことです」

「……何故？

俺の行動をガスタに報告するためか？」

「いえ、あなたの傷はまだ完璧に治っていないのですよ  
だから私が一緒についていくのです」

「…それだったらその薬を俺に渡せばいいだろう  
それとも他に何かあるのか？」

「ええ、今里が大変な時期と分かっているのですが、この旧国から  
出たいのです

それが昔からの夢です

あなたは新国に戻るのですよ、だったら一緒に連れて行ってくださ  
い」

……何故俺が新国から来たと知っている？

こいつには言っていないはずだが

「氷華さんからそう聞いたのですが違いましたか？」

……あいつか

「…そうだ、まあ、ついてくるくらいならいいだろう」

「そうですね、ありがとうございます」

はあ、旧国には奴らを解放しに来たのにな

何故俺の周りに人が増えていく？

## 第14話（後書き）

Q アバンスとルアって性格似ている？

A 気のせいでしょう

Q 氷華の性別結局何にするの？

A ちよつとやりたい事を見つけたので女にします  
キャラ設定の方も女に変えて置きます  
ん？男って噂？気のせいだろう

タッタラーン！

ルアはカームを仲間にした！

だからこれって仲間GETの旅になってきているよね……

第15話(前書き)

久しぶりの更新です

## 第15話

視点 ルア

……はあ、カームを連れてベビーらのもとに戻ったら  
ウインダールが寝ている破術師の近くにいた、息を荒くして

「ルアよ、遅かったな」

「…そいつから離れろ、ロリコン」

といい蹴り飛ばす

ウインダールはきれいに壁まで飛んで行った

カームもウインダールをまるでゴミを見るかのように見ていた

「る、ルア！誤解だ！！」

「ウインダールさん、じゃ何をしていたのですか？  
自分の娘じゃ飽きて……」

「ち、違う！！そんな事言うなカーム！！変態と誤解される！！  
(そのような目で見ていただきありがとうございます！)(」

……今更だと思っが

それにしても、破術師はこの中でまだ寝ているのかよ  
ベビーとモノロフは起きたぞ

「…おい、結局なにをしようとした？」

「別れぐらい見送ろうとしたのだが、いなくてな  
で、氷華が寝ていたから寝顔を拝見して……」

「……そこから何をしようとした？」

睨みつけると、目をそらされた

だが、そらした方にカームが睨んでいた

何故かウインダールが喜んでいるように見えた

「いや、ただ単に誰も帰ってこないのなら裸で私も一緒に寝ようか  
と……って剣を出すな……！」

冗談だ！！ジョーク！！ジョーク！！」

「ルアさん、冗談みたいので許してあげてください」

くっ、邪魔をされたか……「チツ」と舌打ちをし、剣をしまう

後少してゴミを駆除できたのにな

まあ、今の騒ぎで破術師が起きたからいいとしよう

「起きたか、さっさと用意しろ

……ウインダール、外に行くぞ

カーム後は頼んだ」

カームは「はい」と言い寝ぼけている破術師の所に行った

「何故外に出ないといけない」と言っているゴミを窓から蹴り飛ばす  
その後に俺も飛び降りる

……  
……

外で破術師を待っている間、ゴミがある事を語ってきた

「いいカルア、さっき君は私をロリコンと言ってきた  
その通りだ、私はロリが大好きだ

特に小学生のスクミズを見れいればハアハアするし……」

と言う事から始まり

今までずっと話している

全く相手にしてないが

親バカにロリコン、そしてM疑惑が出ているのだが  
ガスタって大丈夫なのか？

「大丈夫だ、問題ない」

語っていたのじゃないのか？何故、俺の心を読む？

…破術師とカームが来たな

取りあえず破術師が来て目が輝いたゴミを蹴り飛ばすか

「…ウインダール、今まで世話になった礼を言う」

と、踏みながら言う

こいつが暴れないようにな

「これが礼をいう時の……いえ、何にもありません、お役に立てて  
ありがとうございます



(くっ、男に踏まれてもうれしく無い  
出来ればウイндаかカームか氷華が良かった)」

ゴミが何かを言うつから見たら、ゴミからも礼を言ってきたな  
ふっ、以後精進することだな

「じゃ、行くぞ」

そうして平和に里を出ていけると思えば……

背後から声が聞こえてきた

赤髪のおばさんが話してきた

「くくっ、ウイन्दールいいざまね」

「何だ？お前はリチュアのノエリアか  
リチュアも里に戻るのか？」

「戻る？寝とぼけて？」

「ここがリチュアの領土となるのよ！！」

ほお、やはりそう来たか

ガスタも大変だな

俺は関係ないから巻き込むなよ

「な、何！？」

「マインドオーガス！！ガストクラーケ！！里を制圧しなさい！！」

エリアルかあれ？

まあ、水色の髪の少女という事しか分からなかったから分からない

が……

足が無くなり、巨大な魚のような生き物が生えているな

もう1つの方も、赤髪の少女の下に巨大なタコかイカが生えている  
まあ、どうでもいいか

それにしてもあの2人、意思がないみたいだったな

あのノエリアだったか？あいつが催眠術をかけて操っているのか

「や、やめろ」

「ふっ、みじめねウィンダール

私の下僕となるのだったら止めてあげてもいいわよ、その坊やも  
ね」

「熟女には興味ない（キリッ）」

「くっ、まあ、いいわ

その坊やはどうするの？」

だから何故俺を巻き込む？

まあ、いいだろう答えてやろう

「…寝ぼけているのはお前じゃないのか？俺がお前の下僕？笑わせ  
るな

お前が俺の下僕となるのなら話は受ける

それに俺はガスタがどうなるかと興味がないが、俺の邪魔をするな  
らガスタに手を貸す

お前にとって都合がいいのはどっちだ？」

「ふっ、ガキが一人増えても問題ない

この美人なお姉さんが「…ギャラドボルグ」な……」

ノエリアが何か言ってきたが、俺との交渉決裂だったのは明らか  
ノエリアの顔のすぐ隣を撃ってやった

「…これでもか？」

今のはわざと外した、邪魔をするようだったら次は当てる」

「このクソガキが!!！」

ノエリアがキレた

そして首に下げていた鏡のようなものから出ている光を自身にあて、  
変身した

なにやら怪物のようなものになった

そして近くで漂っていたヴァイロンらしきものを体に装備した

「…交渉決裂か」

とため息を吐いていると

「おいおいルア!!そんなのであきらめるのか!？」

といい、アビスとヴァニティとアバンスが来た

「…くっ4人を相手か

ウィンドール動けるか？」

「ああ、私も戦える」

「…いや、氷華達を安全な所に連れて行け

4人相手だと流石に邪魔だ」

「おいおい！！俺たちを敵だと思っているのか？」

「せっかく助けに来たのに酷いね

ウィンドールもこんな所で倒れていればまた話できないじゃないか」

「そういう事だ、ルア殿

私ら3人はお主たちと共に戦う

他のリチュアはエリアル嬢らを助けている」

……なるほど、これはノエリアが勝手に起こした事なのか  
はあ、リチュアめ、危険な人物くらい監視をしておけよ

「ふふっ、ヴァニテイ

私が今まで何も用意もせずに起こしていると思っているの？」

「どつという意味だ！！」

「これを見ればわかるわ、チェイン！！」

「……………」

一言も発せず炎に包まれた海竜が来た  
リチュアは炎を持つ奴もいるのか？

「こ、この炎は私らと共に戦ったラヴァルの炎か！？」

女狐！！お主！！ラヴァルを！？」

「そつよ！儀式の生け贄にしたわ！！

さあ、あなた達も私に協力しなさい」

「仕方ねーか」

「そつだね」

「こつなつてしまつては仕方ない」

ふつ、リチュアがガスタに全軍突撃させるのは目に見えたな  
俺はこの里から出るか

「リチュア全軍に次ぐ

我々リチュアはエリアル嬢とエミリア嬢を救い、ノエリアを撃つ！！  
そしてガスタの里を守れ！！」

……はあ、こんなバカがいるのか

この状況を見れば誰もがガスタを攻めるといふのにな  
仕方ない、俺も手伝うか

「カーム、モノロフと氷華を頼む」

「はい、気を付けてくださいね」

カームがモノロフと破術師を連れて行った  
それを見届けて、バカ共に言う

「…お前らだけじゃ弱い、俺が手伝つてやる」

「なんだよルア！！お前さっきビビっていたくせに！！」

「アビスよ、そなたは勘違いしている  
ルア殿はビビってはいなかったぞ」

「…という訳だ、勘違いもほどほどになアビス  
で、あいつを潰せばいいのか？」

リチュア3人組がうなずいたな  
じゃ、簡単に済みますか

「…儂く散れ  
ギヤラドボルグ？」

光の波動で生成した矢を放つ  
あの怪物は何か防ぐという動作を行わなかった  
これで終わりだな

「あらあら、坊やこんなもの？」

「!？」

な、無傷だと!？

「ルア、無傷なのは仕方ない  
何人のラヴァルを生け贄にしたのか分からないが、大勢だろう  
そのうえ、ヴァイロンをつけているのだ  
あれほどの攻撃でもそれらが組み合さった壁の前では赤子のような  
ものだよ」

チツ……きついな

ギヤラドボルグ？が防がれると俺も手の出しようがないぞ

「…何か手はあるか？」

「今の所は無い」

「ああ、ガスタの方も無い」

ヴァニティとウィンドールが戦力不足という事を言ってきた  
仕方ない、アンデットを倒すために封印をといたあいつらを呼ぶか？

「ヴァニティよ、方法ならある」

「本当か？アバンス」

「ああ、私が儀式を成功すればいい」

「だ、だがシャドウがいないのだから！  
シャドウがいれば全てシャドウがまかってくれるが、今は誰がするんだ！？

まさかノエリアみたいにするって言わないよなアバンス！！」

「ふふっ、アビスよ

私があのような事をすると思うか？

私はこれを使う」

といい、金色の鏡を見せて来た

「これは写魂鏡か

ってお前、命を使うのか！？」

「ああ、シャドウがない今、こつするしかないであろう  
まあ、シャドウがいても私はこつするが」

「でもアバンス、神と契約はできたのかい？」

「いや、これからする」

「無茶だ！！失敗すればどうなるかわかっているだろ！！」

「…おいお前らどうするのか早くしろ」

お前らが話している間、光の護封剣であいつの動きを止めているが  
そろそろタイムアップだ」

こいつらが話している時に怪物が襲いに来たから発動したが  
このままじゃ、無意味になる、早くしてくれ

「写魂鏡発動！！くっ……」

金色の鏡から出た光がアバンスを取り囲む  
その光がアバンスのエネルギーを取り込んでい  
って、これは危ないか！？

「…エネルギーの吸収が不規則すぎる

おい、お前らも手伝え、一定の量に調節するぞ」

ここにいる全員の魔力で一定に保つように強制的にさせる  
その結果で何とかなったようだ  
だが、その反面、怪物がこっちの思惑に気づき護封剣を早く壊そつ  
としてきた



視点 アバンス

「写魂鏡発動！！くっ……」

やばい、吸収される量が一定に保てない  
まずい、このままだと失敗する！！

……一定に保った？

ああ、ルア殿か

そなたの目が鋭くて助かった  
後で礼を言わないとならないな、まずはこれを成功し女狐を倒さな  
くてはならぬ

「気づいたか？」

いつの間にか違う所に来ていた！？

目の前にいるこやつは何者！？

龍の姿をしているが……

「お主は何者だ？」

「面白い事をいう

そっちから来ておいて、我の名を問うか

良いだろう、我の名はリヴァイアニマ、お主らが崇める神の一人だ」

……成功したのか

いやまだだ、こうなったかには契約をし、こやつの力を得る

「すまない、少し記憶の整理ができてなく無礼なまねをした  
私の名はアバンス  
単刀直入に言う、そなたの力を貸してくれ」

「良いであろう」

我も我らの同士が操られているのを黙っているわけにはおけなくては  
共に行くぞアバンス」

……

……

……

「アバンス、成功したのか？」

戻って来れたようだ

「ああ、そなたのおかげで助かった」

「光の護封剣も限界だ、頼む」

ふっ、そなたの性格で人に頼むとは  
写魂鏡を空に投げる、そうすると鏡の部分が私を包む

「我が魂を生け贄にイビリチュア・リヴァイアニマ降臨せよ」

視点 ルア

「我が魂を生け贄にイビリチュア・リヴァイアニマ降臨せよ」

そうアバンスが言うと奴を包んでいた光が更に大きくなった

その後、光をかき消すかのように翼が飛び出し、剣を持った龍が出て来た

「私とリヴァイアニマの意思、それは女狐、貴様を倒しリチュアをもとに戻す!!」

## 第15話（後書き）

気力が尽きたのでここで終了  
次の更新はいつになる事やら……  
恐らく、12月中に1、2回は更新します

Q シャドウはどこに行ったの？

A リチュア全員がガスタの里に来る前にヴェルズ化してどこかに……

Q シャドウがいればどうなっていたの？

A シャドウがいれば、儀式はもっと簡単になったし、写魂鏡を使わなくて良かった

Q シャドウを使えば、いなくなるのじゃ……

A オリ設定ですが、リチュアはただでさえ少ないのに、儀式で数を減らせばここまで生き残れないと考え、シャドウは生け贄にされてもずっと残ると考えています

Q ヴイジョン使えよ

A 後になって気づきました  
まあ、シャドウさんみたいに無敵にはならないと言っ事で、無理と言っ事にしました

Q チェインってあいつだよな？

A はい、ラヴァルバル・チェインです

Q ウィンダールエ……

A 最近ウィンダールが変態にしかイメージできないこの頃

Q ルアって氷華（破術師）の事が……

A 全く何とも思っていない

ただ、ウィンダールから守ったのは、  
一緒に連れて行くと決めた以上、傷付けたくないからです

Q 神との契約？

A 設定でリチュアは数あるリチュアの中にいる神と契約をし、  
儀式で契約した神と融合して、イビリチュアとなる事にしてい  
ます

分からない又はややこしい設定がありましたら感想にお書きくださ  
い！

番外編 その3 (前書き)

少し番外編が書きたくなり番外編  
ちよっと重要であつたりなかつたり……

では、どうぞ!!

## 番外編 その3

ルアと破術師らが水の国を出たのと同じ時刻、別の場所で戦いが起こっていた

太古に封印をしていた龍を目覚めさせた一族とその龍との……

『トリシューラが攻めて来た！！応戦する！！』

忍者のような服装の男性、水影が連絡をする  
それを聞いたその時……

「水影、こつちにも龍が攻めて来た……グングニールだ  
こちらにも応戦する」

冷静に水影に連絡する帽子がトレードマークの男性、術者  
だが、彼から流れ出る汗が知らずと緊迫感を語っている

『隊長！！ブリユーナクは封印を完了しましたあ！！』

と、赤髪のツインテールの少女が、風水師が術者に連絡が来た  
3体いる内の1体の龍、1体減った  
これで3体の奇襲などが無くなったが、後2体……

「よし、風水師よ順に封印を急いでくれ」

「隊長、グングニールがもう目と鼻の先にいるのですから、のんき  
連絡しないでください」

と、風水師とは別の首にマフラーを巻いたツインテールの少女、舞姫がそう忠告する

彼女が言った通りにもうすぐそばまで来ていた

一方トリシューラの方は、水影の陣が持ちこたえている

皮肉だが今現在、氷結界の数は少ない

龍と同等の力を持つ、氷結界で名を持つ人、ガンダーラ、グルナード、ライホウがいない今

戦力的に低いのは目に見えている

今いる連中は、術者を中心に集まった寄せ集めに過ぎない

他の者は以前の戦争で亡くなったか、もしくは破術師のように違う場所に行っているか

だから、彼らはこれ以上減らさないため、龍を再び封印することにした

「術者様、例の物が完成しました!!」

と、膝あたりまで伸びる薄い緑色の髪を持つ女性、交霊師が鏡を持って来た

その鏡の周りにまるでトリシューラの頭をイメージしたようなものがつけられていた

「間に合ったか

よし、水影のもとに持って行け

護衛を何人かつけて行けよ」

先ほどの鏡は氷結界の鏡、前回トリシューラに使用したが無意味だった

しかし、交霊師が独自に改良したことにより対策はできている



これで後の問題は術者の陣と交戦中のゲングニールのみとなった

「水影、聞こえるか？」

『な、何だ！？』

今こっちは忙しい！！

くっ、レイス負傷したなら封魔団に診て貰え！！

術者、要件は早く言え！！』

電話越しでも分かるほど向こうはトリシューラとの応戦に苦しい

「交霊師が鏡を持って向かった

その鏡を使えばトリシューラには効果的だ、使えば早く封印を頼む」

『ああ分かっている

だが、そこまで持ちこたえられるか分からない

くっ、もう連絡は無理そうだ、俺も出る』

といい水影との連絡は切れた

だが、術者も先ほど舞姫に忠告されたようにのんきに連絡をしていい暇はない

「俺もそろそろでる

舞姫、怪我人の医療を頼むぞ」

舞姫の「はい」という返事を聞き術者も出て行った

.....

……  
……

一方水影の陣は、残念がことながら水影のみとなった  
交霊師の到着までは後数分かかる  
常識的に考えて不可能だったが……

「水影、俺の不在の間にここまでしてくれて助かったぞ  
ここから先は任せる俺、虎将の一人ガンターラにな」

といいスキンヘッドの武人が現れた  
左手に氷のような気を集めいつでも戦えるように構えている

「ガンターラ様、交霊師が来るまで持ちこたえてください!!」

「おいおい水影、俺がそこまで持たない気がするか？  
別にアレを倒してしまってもいいのだろ？」

と不敵の笑みで水影に言う

そして、トリシューラの懐に入り攻撃をする  
トリシューラは一瞬の事で倒れかけたがすぐに立ちなおした  
そして、怒りを露わにした

「ははっ、やっと本気になったか  
ほら来いよ」

周りが見ればどう思うだろう

氷結界の龍で最強と言われているトリシューラに生身の人間が挑発

している

バカげているが普通か？いやこれが普通か？  
どっちにしろ、この人物にとってこれが普通らしい

「……………！！！！！！！！！！」

一瞬トリシューラが咆哮を上げた

次の瞬間、トリシューラの後ろから岩石ほどの大粒の氷がガンターラに向かいものすごい速さで降ってきている  
だが、ガンターラは不敵の笑みを止めず突っ立っている

「ガンターラ様！！危な「水影、そこから動くなよ」「えっ？」

といい、全ての氷を拳で落としていった

「おいおい、最強の龍ってこんなもんか？」

また挑発をするガンターラ  
そうしている間に交霊師が辿りついた

「はあ、もう着いてしまったか……  
仕方ない交霊師、後は頼むぞ」

と言い、ガンターラは後にする  
そして交霊師が鏡を使う

「鏡よ、トリシューラを眠らせよ！！」

鏡から出た光がトリシューラを包み込む  
そして数十秒たった時トリシューラの体が倒れこんだ

「鏡よ、トリシューラを封印せよ!!」

またトリシューラを光が包み込む

そしてトリシューラが消えた否、封印されるべきところへ行つた  
ブリユーナクも鏡は使っていないが同様に先に封印された

.....

.....

.....

ガンターラが去つたのと同時刻、大怪我をした術者の所に2人の人物が現れた

大剣を背負い、氷で出来た鎧を着たグルナードとまるでチャイナ服のような服を着たライホウ

「無限の剣グルナード、虎将の名の下に貴様を封印する」

「ハハハ、ガンターラもあなたもそういうの好きですね」

「グルナード様、ライホウ様、後は頼みます」

「はい、ここは私たちに任せ治療を受けて来てくださいね」

と言われ術者は舞姫の所へ戻る

そして、グルナードが氷で出来た剣を後ろに待機させている

二つ名通り、無限に近いほどの数がある

「ライホウ、いつも通りで行くぞ!!」

「はいはい、あなたが暴れた後、私の魔法で眠らし怪我を直し封印するという事でいいのですね？」

「おっっ!!」

無限の剣、放出!!」

(どうせいつのならば、もっとかっこよく言えばいいのに  
まあ、厨二臭いのは仕方ないでしょう)

グルナードが攻撃をし、グングニールを気づつけたところをライホウが技目等言わず魔法を放つ  
そして、封印をした

「よし、これで終わりだな

ガンターラからトリシューラの封印は終わったと連絡が来たしな」

「そうですか、では我々も戻りましょうか」

と言い戻っていく

その姿をある虎が見ていた

「ふん、お前らが龍の力が欲しかったと思えば、次は用済みか  
これだから……はあ、もういいか  
それより私はどうするか、彼との連絡が途切れた今する事がないのは仕方ないな」

番外編 その3（後書き）

グルナードが厨二病を……

どうしてこうなったのだろう……

最後に出て来た虎はドウローレンです

あのセリフを言わせたかったのでちょっと満足です

『彼』はまた番外編を書いた時に分かります  
ばれていないよね……？

## 雑談（1）（前書き）

今年は辰年ですね、今年もよろしくお願いします

今年最初の投稿が雑談回です

続きが楽しみだった人はすみません！（まず、いるかな？）

まあ、雑談なので特に意味のない回です

それと時間軸は関係なしと言う事で！

そしてキャラ崩壊していると思います！

「それでも俺は見る！」と言う勇者達はどうぞ！

## 雑談(1)

視点 ルア

ん？手紙が来ている？

ヴァニティとアビスから新年会の誘いか……今日かよ……

まあ、どうせ暇だし行くとするか

場所は……『ヴァイロンの宿！！泊まれば運が上がるかもよ！！』  
つて所か……

ちっ、またここかよ……

ここという事は、オーナーがいるのだろうな……

あいつテンション高いから面倒なのだよな……

まあ、行くとさつき決めたから行くか……

「ベビーとモノロフ……ってモノロフは寝ているのか」

ベビーは俺と目があつとうなずいた、恐らく新年会に行くことを分かっていただろう

「じゃ、破術師とカーム、新年会があるが行くか？」

「……ZZZ」カーム

「あっ、お兄ちゃんか……」

眠たいからいいよ……カームお姉ちゃんも寝ているし」

「そうか、じゃ留守番頼むぞ」

目を開け、立ちながら寝ているカームについては無視しておく



今、俺らがいるのは俺の家だから、旧国に行かないとな……

「ベビー、憑依装着

旧国のアレがいる旅館まで頼む」

ベビーに魔力を送り、成長させる

そして背中に俺が乗るのを確認すると飛び出した

……

……

……

途中で障壁の竜巻があつたが前回同様に『無』を発動し、旧国に入る  
そして旅館の前に着いた  
そして入ると……

「よ！！兄ちゃん！！新年会するんだろ！！」

一番デカイ部屋をとっているからな！！俺も後でいくぜ！！」

あいつが話かけて来た、しかも大声で

「…お前が後で来る？」

客の対応はどうするんだ？」

真っ先に気になった事を言う

いくらなんでも俺らだけという事は無いはずだ

「ああ、その事が!!」

今日はお前らだけの貸切だ!!  
ほら見てみる!! ドアに『本日休業』って張ってあるだろ!!」

……よく見てみるとあった

俺らだけでいいのかよ……収入は大丈夫なのか?

まあ、しよせんは他人事だ、どうでもいいが

「さつさと行けよつ!! ヴァニティ達が待っているぜ!!」

そういえばそうだったな

はあ、いつもこいつと話す調子が狂う

オーナーが言っていた部屋はここか

「…ヴァニティ、待たせたな」

とドアを開けると

何故か、メイド服で女装をしたアバンスがいた

気のせいだと思い、ドアを一度しめ、開けると同じ光景があった事により現実だ

何故こいつは女装をしている?

で、何故似合っている?

「よお!! ルア!! 遅かったな!!」

どうしたそんな目をして!!」

俺の調子を狂わせる奴、その2が出て来た

ヴァイロンはオーナー、リチュアにはアビス、ガスタにはウィンド  
ールか……

他の部族にはそんな奴がいて欲しくないな

そしてこいつは何故俺が変な目？をしているのかを聞いてくる、笑  
いながら

「…気のせいだろ

ヴァニティはどうした？」

「ヴァニティならほら真ん中にいるだろ！！」

ウィンドールと一緒に酒を交わしながら話しているぜ！！」

……入口で衝撃的なものを見てしまったせいでそこまで目がいかな  
かったらしい

それにあえて何も言っていないが、それでいいのだろうか？

ヴァニティとウィンドールは……ああ、そういう事か

いつも通りの自分の娘と妹的な存在の語りあいか

この前聞いた話だと、ヴァニティとエリアルは兄妹でも親子でも親  
戚でもないらしい

ただヴァニティが兄分として面倒を見ているらしい

別にそれはいいと思うが、ああなるとエリアルは気の毒だ

まあ、取りあえず挨拶に行った方がいいだろうな

「…ヴァニティとウィンドール、今来た」

「やあ、ルア意外と早かったね

新国に住んでいると聞いていから遅くなると思っていたのだけど、  
早くてなによりだよ」

「る、ルア！！氷華とカームはどこだ！！  
貴様だけ来ても意味は無いだろう！！

久々に会うついでにあんな事やそんな事をしよう……やあ、良く  
きたな」

ウィンダール  
変態がバカげた事を言ったから、槍を武器庫から取り出し喉に向け  
ると態度が豹変した

はあ、最初からそうしておけば良いのにな

「…新年会に来る奴は誰がいる？」

「あそこに私のエリアル嬢とウィンダ嬢とがいるのと

そしてムストさんとカムイ君が親子でバイキングを取っている  
多分あそこは知っているとと思うが、入口でアビスとアバンスがいる  
それと向こうでデュエルをしているのはジャッジメントさんを含む  
ラヴァルとジエムのグループがいる」

やはりヴァニティもおかしいみたいだ

エリアルも残念だな

それと一度入口の所を見てみるとアバンスがチャイナ服を着替えて  
いた、何故似合っている？

あいつ男だったよな？

そして、アビスが写真を撮っていた

デュエルをしている奴はヴァニティが言った通りだった

ラヴァルの生き残りのジャッジメントとラヴァルの少しの奴ら、そ  
してジエムナイト

詳しい事はこの作者が『言うな』と言っているから言えない

今度作者が話の続きを書くと分かるだろう

まあ、デュエルの様子を見れば

ラヴァルが先攻1ターン目でシューティング・クエーサーを出し、返しのジエムナイトのターンで超融合の融合素材と使われたというのが印象深かったな

「…何か料理を取ってくる」

「じゃ、私の分も頼むぞ！」 ウィンダール

「それじゃ、すまないが私も頼んでもいいかな？」

料理は何でもいいよ」 ヴァニティ

ヴァニティに「…ああ」と言い席を立つ

ウィンダールには喉が渇くものばかり入れていくか、飲み物なかったし

おっ、ふりかけがあるな、ご飯1に対しふりかけ9の割合で持っていくか

ウィンダールへのは決まったが、ヴァニティは何にするか

何でもいいと言っていたから、俺の取ったやつと一緒に取ればいいか

………

………

………

料理を取って席に戻る

俺の席の場所に皿を置くついでに奴らの席にも置く

取ってきた料理はご飯に焼き魚に味噌汁という普通のものを取ってきた

ヴァニティからは「ありがとう」と言われた……何か気持ち悪い  
ウィンダールは文句を言っているが結局食った、そして「喉がかわく」と叫んでいる

「はいルア殿、飲み物だ

お茶にしておいたがよいか？

ウィンダール殿にヴァニティも茶で良いな？」

ちようど飲み物を取り忘れていたから良かった、もってきた奴がこいつじゃなければ

いや、こいつが着ている服さえ普通ならば

（アバンス、何故女装をしている

それと『殿』は止める、何か気持ち悪い）

ヒソヒソ話でアバンスと話す

ヴァニティやウィンダールにばれないように聞いているが、ばれれば必ず笑いものにされるだろう

（それはアビスが、どうしても女装をしるとうるさいのでな  
新年会という事もあるし、ノリでしてみたのだ  
えっと、ルアよ、今の私はどうだ？）

と返事が返って来た

なんと答えたらいいのだろうか？

『…いつもの少しの暗い感じが無く、似合っている』と答えるべき

か？

『…お前、本当に男か？』とさえばいいのか？

『…お前も堕ちたな』と言うべきか？

それとも『とうとう目覚めてしまったか』と呆れたように言えばいいのか？

まあ、最後のはアビスに言った方がいいな、あいつが言い出したらしいから

取りあえず『…似合っているのじゃないのか』と言っておいた  
すると何故か喜んでいた……普通は喜ぶのか？俺がおかしいのか？  
アバンスは俺の中の常識を壊す奴と認識をした方がいいだろう  
アビスの所に戻ったと思えば、ワンピースに着替えていた……それは余り似合っていないな

「ヴァニティ、そろそろアレを始めるとしようか」

「ああ、頃合いだし、始めましょうか」

ウィンドールとヴァニティが何かを始めるそうだ

『第一回！！デュエル王者決定戦！！』　　ヴァニティ

『さあ、とうとう始まりましたね

最初の王者が誰か楽しみですね、僕も挑戦しますが、勝利出来ますかね？』　　ジエムナイト・サファイア

『さあ、審判はこの人だ！！

いくつもの試合を見て、感動してきたこの男！！ヴァイロン・スフ  
イアだ！！』　　ウィンドール

……審判をしたことない奴がするの  
か  
そして感動をしてくだつてどうい  
う事だ？  
デュエルで感動することがあるの  
か？

『よっ！！待たせたな！！』

俺が来たからには不正はさせねー  
ぜ！！  
審判魂を見せてやらあ！！』 オー  
ナー

『熱い意気込みを聞かせてくれ  
ましたね

今からルールを説明します

1対1のライフポイント4000の  
デュエルをし、先に1本取った  
方の勝ちとなります

ただし、特別ルールをこの試合  
に入れます

こちらの箱があります、上から  
手を入れます

箱の中には特別ルールカードが  
あるので、それをデュエル前に  
します  
2人共が取り出し、取り出した  
ルールカードに書かれたルール  
を入れ込んだデュエルをします

今私が取り出したルールカード  
は、毎ターン2ドロと書かれて  
います

この場合はドロフェイズは通常  
は1枚ドロですが、2枚ドロ  
する事になります

ルールカードはいろんな種類が  
あるので、楽しみにしておいて  
くだ  
さい

それと、ルールカードのルール  
は絶対です

ルール説明はこれで終了です  
ね

私ヴァニティは解説をし、こ  
ちらのウィンドールは司会を  
します』

ヴァニティ



『はい！司会を務めるウィンダールです！！』

勝つのはウィンダって決まっています、司会をさせていただきます！』 ウィンダール

取り合えず、司会をするならそういう事を言っな

『では対戦表ができたので発表します！』 ヴァニティ

もう決まっていたのか

まあ、出る気はなかったからどうでもいいが  
なんとなく見物でもしておくか

『1試合目は

荒ぶる魂ジャツジメントさん

それに対するは

クールな魔法使い、ルア！！』

……一瞬、飲んでいた茶を吐きそうになった

何故俺が出ている

それとクールってなんだ？俺はクールじゃないと思うが  
もっと、陰気臭いとかの方が似合っていると思うが

それとどうでもいいが、解説が司会の仕事してないか？

「なんだ、ルアが出るとはな

お主、こういう催し物には興味無いと思っていたのだけどな」

「……ああ、俺は興味ないのだが、勝手に出場登録されていたそうだが  
そもそもデツキを持ってきていないから出れないのだが……」

『司会のウィンダールさん、この組み合わせをどう思いますか？』  
ヴァニティ

『……むさ苦しい男のデュエルなど興味無い』 ウィンダール

『そうですか、では気を取り直し2試合目！

俺の嫁！エリアル！！

そして対抗するは

宝石より生まれし戦士、ジエムナイト・サファイア！！』

……なんだ俺の嫁って？

あいつら結婚していないはずだったが、結婚する予定があるのか？  
まあ、他人事だからどうでもいいが

『3試合目は

可愛そうな親の娘、ウィンダ！

対するは

実の息子を娘と思っていたムスト！！』

『ウィンダ！ウィンダ！ウィンダ！ウィンダ！

そんなオッサン潰してしまえ！！』

ウィンダールは司会失格だな

誰か違う奴に変わらせる

『司会のウィンダールさん、荒ぶっているところ悪いですが

4試合目、ラストの試合です！

ガスタの男の娘！カムイ！

それに対するのはこの方しかない！

第三の性別、アバンスの登場だ！！

さあつて、解説者としては女装をして出てくれると嬉しい』

……ヴァニティもダメだ

第三の性別ってなんなんだ？

女っぽいつていつても所詮は男だろうが、そこまで騒ぐな

『司会のウィンダールさん、この組み合わせはどう思いますか？』

『解説のヴァニティさんが言った通りの事をしてくれとお小遣いをあげよう

そして、銀髪で紅眼の男性が男の娘の存在を否定している事はスル  
ーしましょう』

……悪かったな

さつきから聞き間違いのふりをしていたが、なんなんだ男の『娘』  
って

『子』じゃないのか？

こいつらの頭の中ではどうなっているのだ？

『さあ、準備があると思うので、30分後に試合開始をします！  
聞きたいことがあるならば、本部（こく）に来てください』 ヴァニティ

『では、30分後に集合！！

解散！！』 ウィンダール

取りあえず、聞きたい事がたくさんあるから行かなくてはな

「…おい、ヴァニティ、ウィンダール

何故俺が登録されている？

理由を説明しろ」

「あれ？ルアって登録してなかったの？  
私は登録したものだと思っていただけ……  
という事で考えられるのは……ウインター説明を」 ヴァニティ

と言いヴァニティがウインターを見ると大量の汗をかいていた  
正直臭い

「あ、はは、君達、僕を疑っているのかい？  
困るなあ」 ウインター

……キャラ変わってないか？  
まあ、こいつが犯人というのは確定だな  
だが証拠がないと言われたら元の子がない  
仕方ない、新年会という事もあるし、今回は癩だがこいつに踊らさ  
れるか

「……はあ、仕方ない出てやる  
ただしデッキはないぞ、どうすればいい？」

致命的な問題を言わないとな  
今からデッキを取りに戻るとなれば30分いないには戻れないぞ

「ふふつ、ルア、ここにこんな物が」 ウインター

……こいつ本当にキャラ崩壊していないか？  
で、こいつが取り出したものは、カードが入ったケースか？

「……今作れと言うのか？」

と言うと、笑顔で「ああ！！」と言ってきた

そんなに俺をおとしりたいのか？

何か不満があったのか？

まあ、さっきやると言ってしまったから仕方ない作るか

「…借りるぞ」

……いや、くれるそうだ

こいつの考えている事が分からないな  
仕方ない、作るか

……

……

……

ようやく終了した

はあ、俺のデッキもあいつの置いていったデッキの同じカードがほとんどなかったからな

一から考える事になった

デッキ作り苦手な俺にこんな事をさせたんだ、このツケは高いぞ、  
ウインダール

「久しぶりだなルア」

と、炎で出来た体の男が話かけて来た

こいつは確かジャッジメントだったか？

ラヴアルの生き残りを束ねるリーダーだったはず

「…ああ、何の用だ？後で試合をするはずだが」

「ああ、試合前のあいさつだ  
熱い試合を期待しているぞ」

と笑いながらどっかに行った  
熱い試合とか面倒だ、冷たい試合の方がいい、涼しいからな

『1試合目を始めます  
選手の皆さん、集合してください！』

行かないとな  
ルールカードを何を引くかでこれは変わるはずだ  
さっきヴァニティが引いたのと違う不利なカードがでる可能性だっ  
てある

俺の今のデッキにとっても突き刺さるカードが出ない事を祈るか  
と考えているうちに着いたな  
ジャッジメントはもう準備をしているか

「さあ！！お前ら！！ルールカードを引け！！」

とオーナーが箱を渡す  
先にジャッジメントが取った  
じゃ、俺も取るか

「さあ！！取ったな！！」  
ジャッジメント選手のルールカードは、『1ターンに1度、デッキ  
からモンスターを墓地に落とせる』というカード！！

ルア選手は！！って兄ちゃん何絶望を見たかのような顔をしているんだ！！

えっと書かれているのは！！……もしかして突き刺さったか？」

とオーナーが言うので正直にうなずく

仕方ない、俺のデッキにあのルールは負け確定だ

「『エクゾディアでの特殊勝利を封じる』がルア選手のルールカードだ！！」

そしてルア選手のデッキはなんとエクゾディアデッキ！！

ルア選手はこの勝負降りるって言っているので、ジャッジメント選手の勝利だ！！」

まあ、負けは負けだ

愚痴を言っても仕方ない、俺の運が悪かったな

それにもし違うデッキを組んでいても、あいつはさっき見たがラヴアルデッキ

確か侍女の効果と相性のいいルールカードだったはずだ

俺の負けは確定していたんだ

さて、試合を見物させてもらうか

1 試合 ジャッジメント ルア x

雑談(1) (後書き)

主人公がこんなに惨めに負けてしまいました  
特に意味はありません

この小説の存在くらいありません  
僕の文才くらいありません

それと、ジャツジメントがこの試合結果が不満で、  
本部に再試合を頼んだっていう裏設定があったり……  
まあ、ルアが拒否するからどっちみちできないのですけどね……

Q ラヴァルとジエムナイトが!?

A はい、本来ならばストーリーで先に登場させるつもりでした

Q あれ?主人公なんだか丸くない?

A はい、なんだか丸くなっています  
いや、気のせいかもしれません

アンケート:アバンスの性別ってどう思いますか?

? 「『エ』『リ』『ア』って文字がないから男だ!」

? 「いや、微かに胸があるんじゃない?よって女だ!」

? 「いや、俺は男の娘っていう説を立てる!」



? 「もう『性別：アバンス』でいいじゃん……」

? その他 ) (

? 〓? 番の内、どれだと思えますか?

もし良ければ感想に書いてください!おねがいします!  
気軽に書いてくださいね!

多分次も雑談です

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5151v/>

---

龍と共に

2012年1月1日02時45分発行